
ブストサル

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブストサル

【Nコード】

N3976J

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

木村梨乃は高校二年生。女子フットサル部の部長になったばかり。部活一筋でしゃれっ気もない梨乃は、スポーツ経験のほとんどない転校生衣笠春奈の入部によりどんどん心の歯車を狂わせていき、親友の景子とも大喧嘩してしまう。フットサル大会も近いというのに、

第一章 フットサル（前書き）

文体は軽いですが、アニメ調ではなく実写をイメージしてお読み下さい。

第一章 フットサル

1

「じゃ次、ペアになってキック練習いくよ。まずは相手の胸に戻すように、三十回」

精一杯大きな声をあげたつもりだったが、隣で練習している剣道部員たちの竹刀や防具のぶつかりあう音に掻き消されてしまう。わたしは咳払いで喉のイガイガを飛ばすと、もう一度大きな声で叫んだ、のだが同時に隣さんから「チョリヤ！」と剣道らしからぬ奇声があがり、それに狂わされて、声裏返ってしまった。恥ずかしい。まあ、毎日やっているメニューなので、わたしの声が裏返ろうがしゃがれ声になろうが、彼女らの行動に変化はないのだが。十名強の部員たちはそれぞれにペアを組んで向き合うつと、わたしの指示した通り次の練習メニューを開始する。

ボールを相手の胸元目掛けて蹴る。両手でボールをキャッチした相方は、すぐさま手首のスナップでボールを相手に返す。それを今度は反対の足で返す。三十回繰り返すと、今度は蹴るほうと受けるほうとを交代させる。

単純なことだけに、技術の差がはつきり出る。一年生の中には、感心するくらい上手なものいれば、救いの手を差し伸べられないのがもどかしいほどにたどたどしいものもある。基本的には、小中学校の頃からやっているのか、高校生になってから始めたのか、という経験の違いだと思っている。

「久樹^{ひさぎ}、ごめん、ちょっと竹藤を見てあげて」

竹藤^{たけふじ}琴美^{ことみ}は一年生。一年生の中に「今年から組」は三人ほどいるのだが、彼女が一番不器用。とても頑張っているのはよく分かるのだけど、どうにも飲み込みが悪く、なかなか上達しない。いまのメニューだって、相手の胸元にボールを返すどころか、とりあえずおおよそ相手の方向に飛んでいきさえすればラッキーという有様。

「オッケー！」と浜虫久樹^{はまむしひさき}は竹藤琴美のもとへ小走りに駆け寄る。

「えっと、その間、サジは織絵と組んで」

楽山織絵^{らくやまおりえ}と佐治ヶ江優^{さしがえゆう}がペアになり、キック練習を開始。佐治ヶ江は一年生だけど、恐ろしくキックの精度が高い。まるで精密機械みたいだ。投げる側の手がすべて変なボールになってしまっても、それでもさつと移動するなり強引に足を伸ばすなりして、結局、投げた側の構えた手の中央へとボールは戻ってくる。

副部長の浜虫久樹は竹藤にぴったり寄り添い、ボールを蹴る時の足の使い方や姿勢、タイミングなど、自らの実践もまじえて手取り足取り教えている。久樹は教え方がとても優しく上手なので助かっている。彼女は普段はともおちゃらけていて、わたしにもバカみたいなことばかりいつてくるのだが、部活になると顔つきがきりつと変わる。

「はい終了。それじゃ、次は」

わたしの合図に、キック練習は次のパターンへと移る。ペアをズラして、今度は近距離でのパス交換の練習。インサイドキック、アウトサイドキック、トゥーキック。足裏で少し転がして、パス。反対方向に、転がしてパス。

今度は、四人で組んでやはりパス交換の練習。

久樹はラボーナみたいな動きで竹藤へパス出そうとして、思い切り失敗している。

「久樹、余計なことしない！」

基本を教える基本を。竹藤相手なんだから。

察しの良い人なら、剣道部と同じ場所つまり室内でサッカーのような練習をしていることから、我々がなにをしているのか分かるんじゃないかと思う。フットサル。誰にでも分かるようにいうとミニサッカー。テニスに対しての卓球のように、室内でサッカーを、ということ誕生したもの。サッカーは誰でも知っているだろうけど、サッカーにまったく興味のない人はフットサルを知らないんじゃないかな。でも意外に歴史は古く、現在ではフットサル独自のルール

もしつかり確立されており、サッカーとは完全に異なるスポーツだ。サッカーの規模にはとてもかなわないけど世界にはプロチームだって存在しているし、日本にだってゆく末はプロ化を目指しているリーグというものがある。

ええと、ではここで自己紹介をしておこうと思う。わたしの名前は木村梨乃^{きむらりの}、千葉県立佐原南高等学校^{さわらの}の二年生。つい先日、この女子フットサル部の部長になったばかり。

夏休み一杯で三年生は引退、もちろん部長も引退したのだが、何故だかよりによってわたしなんぞに後任の白羽の矢が立ってしまい、それから今日までの一ヶ月、みんなに助けて貰いながら、どうにかこうにか頑張っているというわけである。

「久樹、ありがとう。もういいよ。竹藤も戻って。はい、じゃ、次いくよ。ダッシュ、往復二十回」

床に赤と白の二重の輪っかがペイントされている。赤い線がフットサル用の、ふた回りほど小さな白いのがバスケットボール用のセンターサークル。センターサークルを横切っているのがハーフウェイライン。そのラインのあたりから体育館の壁まで二十メートルほどの短いダッシュ。壁にタッチすると、そこからまたダッシュでハーフウェイラインまで戻る。それを、ただひたすらに繰り返す。わたしもみんなの中に加わり、走る。

たかだか二十メートルの距離を、たかだか二十往復するだけ。と試してみるのには簡単だけど、やってみるとかなりキツイ。往復十回にも達しないうちに、一年生の何人かがへたばってくる。

「ほらほら、だらだらしないの!」

両手を叩いて、一年生を叱咤する。

「そんなこと……いわれても……」

篠亜由美^{しのあゆみ}が泣きそうな声。

「口動かす暇あったら足動かせ!」

「は、はい!」

ほら、走れるじゃんか。

と思つたら今度は佐治ヶ江がしゃがみ込んでしまった。

「サジ、やる気ないなら出てけ！」

分かっている。基礎体力がまだ貧弱な一年生にとって、こうした体を苛めるだけのトレーニングがどんなにキツイのかは。でも、だからこそあえて、こういうことをしなければいけない。どんなに技術があつたつて、体力がなければ意味がないのだから。逆にいえば、体力さえあれば練習で身につけた技術が活きる。そうなれば、もつとフットサルを楽しむことが出来る。それに、頑張りぬく根性を鍛えることは、今後の長い人生、決して無駄にはならないだろうし。そんな恥ずかしいことわざわざ口に出してはいわないけど、彼女たちはきつと分かってくれていると思う。

実はわたしもフットサル経験二年程度の新米だ。

中学の三年間は陸上部に所属し、中距離走をやっていた。それなりに優秀な成績だった。いや、それなりどころではない。自慢ではないが中二の時に、全中千葉予選八百メートル走で二位、標準参加記録を大きく上回り本大会へ進出。そして本大会では千葉予選一位だった子よりも良い成績を収めて全国四位になったほどだ。とにかく走ることに自信があつた。それなのにフットサルを始めたばかりの頃は、肉体が悲鳴をあげまくり、眠るのも辛いほどの毎日だった。フットサルというスポーツは、「前に走るだけ」とは、あまりにも使う筋肉が異なるのだ。

だから、中学で文化部だった竹藤や亜由美が涙目になつてしまうのも仕方がないのだ。中学でもフットサルやつてた佐治ヶ江がへたばつてしまうのは、ちょっと情けないけど。佐治ヶ江、ボール扱いが高校生と思えないほど上手なくせに、体力があまりになさすぎだ。「ほら、またペース落ちてるよ、亜由美！ ちゃんとしないと、もう二十回やらせるよ！」

「は、はい！」

このあと紅白戦を行う予定なのだけど、いったいいつになったら、バテバテではない引き締まった紅白戦が出来ることやら。

グレーのスカート、白のソックス、白のブラウス、赤いネクタイ、グレーのベスト。特別捻りもない、ごく平凡な女子高生の制服。しよわしよわとセミの鳴く陽炎立ち昇る田舎道に結構マッチするわ、と畔木景子と浜虫久樹の姿を見てしみじみそう思う。まあ、わたしあぜきけいこも同じ制服を着て、三人仲良く薄暗い林の中、細い県道を歩いているわけだが。

牛蛙のぶおーぶおーという鳴き声が時折聞こえてくる。

ここは千葉県の東北部にある、香取市というところ。茨城との県境にあり、間には利根川が流れている。この辺り、以前は佐原市という名前だったのだが、数年前に佐原を中心として合併、名称変更があったのだ。

高校のある場所は、ＪＲ佐原駅から南東方向の山の中、徒歩で四十分以上もかかる。市営バスが通ってはいるものの、三十分に一本、通学時間であってもそのペースは変わらない。乗れないこともあるし、乗れてもあまりの混雑に体がバラバラになりそうになる。学校ももつと市に強く訴えて増便させてくれればいいのに。都会に住んでいる人には、わたしたちの学校は陸の中の孤島としか思えないだろう。

市の合併とほぼ同時に、成田市と銚子市を結ぶ銚成線というベタなネーミングの私鉄が開通し、佐原南高校から二十分という一見便利な位置に駅も作られた。しかしこれがまた一時間近く電車を待つこともある役立たず鉄道。だから、ＪＲ佐原駅を使って駅と学校は自転車で、という生徒も数多い。ＪＲ成田線もまた、三十分に一本という本数の少なさなのだが、銚成線よりは遥かにマシ。ＪＲ佐原駅はこの春、都心に八年遅れてようやくＩＣカード定期券が利用可能になったが、それだけでも大きな進歩というものだ。

いろいろとあげていくときりがないが、この程度の説明で充分に通学時における交通事情の劣悪さはご理解いただけたのではないか

と思う。

とはいうもののわたしはこの近辺に住んでおり、学校まで徒歩圏なので、交通事情もなにも関係ない。地元だけあって交通機関を利用しての通学がいかに大変なことかはよく分かっていたので、徒歩で通えるいまの高校、学力的に厳しいと知りつつ猛烈に勉強してなんとか転がりこんだのだ。通学のことだけでなく、フットサル部があるというのも佐原南を選んだ大きな理由。まだまだフットサル部のある学校というのは非常に数が少なく、こんな近くにあるということ自体、奇跡のようなものだ。進学校というほどでもないけれども、そこそこ学力レベルの高い学校で、おかげで授業についていくだけで精一杯。フットサル部のある、もっと楽に入れる、もっと東京に近い高校にでもいって、いつそのこと一人暮らしでもすればよかったかなあ、などと少し後悔している。でもいまの学校で、仲の良い友達が出来たのはなににも変え難い収穫だったと思う。

佐原駅近くにある、セカンドチキンバーガーという節操なしな名前のお店に入る。弱小ながらも全国展開しているファーストフード店らしく、最近テレビCMも見erようになった。千葉県内にもここを含めて三店舗あるとのこと。しかしそんな数少ないうちの一点舗が、何故佐原なんかにあるんだろ。松戸や千葉市ならともかく。重宝しているので文句いうつもりはまったくないけど。

佐原南高校を佐原駅に向かって下山する途中に、平坦な場所があり、畑の中、小さな住宅街が点在している。その住宅街に入って、狭い道を十分ほど歩いたところにわたしの自宅はある。つまり、佐原駅のほうにいくなど下校するだけなら遠回りもいいとこなのだけど、ここらへんまで降りてこないとファーストフード店みたいな会話出来るようなお店がないのだからしょうがない。学校のすぐそばにあればいいんだけど、残念だが定食屋と床屋しかお店がない。

店内は我々のような中高校生の客が大半を占めている。

三人、思い思いのものを注文して、テーブル席へとつく。

わたしはセカンドチキンハバネロダブルバーガーセットとクリームチーズシェーキ。久樹もわたしと同じもの、とセカンドメガメガチキンカツバーガー単品一つ。フットサル部で一番体が小さいくせに、楽山織絵と一位二位を争うほどの大食いだ。景子は、セカンドスパイシーミニバーコンパイ単品一つと烏龍茶。こっちはとても小食。

席についてからずっと、久樹のおしゃべりがとまらない。

「んでさあ、モキチがさあ、真後ろに立ってて、要田のこと見下ろしてんのよ。要田はつと気づいてビクツとなつて、慌てて机のもの隠そうとしてるんだけど、そうはさせねえってモキチがぶるぶる体震わせながら回り込んで飛び掛つてさあ、がっぷり四つで『よ、よよよ、どどど、ななな』ってなにいつてつか分かんないの。顔だけ必死だから、もう大笑い。要田も真剣なのかからかってんのか、よよよよって真似するし」

顔歪めながら大袈裟な身振りでモキチの真似をする。わたしと景子は、お腹をかかえてげらげらと笑い転げた。

「それ見たかった！ モキチ、興奮すると日本語忘れるからね」

「国語の先生なのにねえ」

モキチというのは、国語を担当している斉藤先生のこと。斉藤さんからモキチ、安直過ぎと文句を付けようにも、名付けた先輩は十年前に卒業している。

「でもさ、要田、よくそれで追試にならなかったね。普通に考えて、大幅減点もいいところでしょが」わたしはにじみ出る涙を拭った。拭いっつ、またぶつと吹いた。「あたしたちなんて、そうになったらとても部活どこじゃなくなっちゃうよね」

と久樹に同意を求める。

「自慢じゃないけど勉強に関しては万年崖っぷち犬だからね、あたしも梨乃も。……景子が羨ましいよな、赤点と無縁で。あたしが景子くらい頭が良かったら、ほとんど勉強なんかしないでフットサルばっかやってるよ」

「あのねえ、わたしは別に頭良くなんかないよ。それだから夜必死で勉強しているだけです！　そうしないとすぐ成績下がっちゃうから」

「そのさ、夜にちゃんと勉強するつてのがさ、つか机に向かえるつてこと自体がさ、一つの才能なわけよ、大将」

勉強嫌いが優等生に向かって勉強のことをエラソウに語っているよ。

わたしはそれを聞いて笑いながらも、ちょっとした劣等感を覚えてさびしい気持ちになる。景子はもとの才能もあるのだろうが、なおかつしっかり勉強もしていて、とても賢い。久樹はいつも赤点ぎりぎりだが、ろくに勉強をしていないのである意味当然の成績。高校を卒業さえ出来ればいいと考えているので、とても器用に生きているともいえる。そしてわたしはといえば、成績は久樹よりほんの少しだけ上だが、実はかなり勉強を頑張っている。それでろくに勉強していない久樹とどっちが劣等生か真剣に競争しているのだから、いかにももとの脳味噌の作りが劣悪か、ということなのだろう。

神様は不公平だ。天は二物を与えず、というけれども、わたしには一物もないのだから。……体力があることだけは自信があっただけ、その自信も中学の頃、ある人間にメチャクチャに破壊されたし。「あ、そうだ梨乃、関サル、今日か明日あたり、相手分かるんじゃないか」

久樹が唐突に会話をフットサルモードに切り替えてきた。いつものことだけど。

「その予定。明日、朝まっさきに職員室いつてオジイに聞いてみるよ」

関サルとは、関東高校生フットサル大会のこと。どこかの食品会社が主催して行っているもので、今年で第七回目だ。ちなみにオジイとは、フットサル部顧問の先生。

「弱いとこと当たりたいな」

とわたしの弱気発言に対し、

「あたしは強いとこのほうがやる気出るけどね。最初に潰してしまえば楽だし」

とあくまで強気発言の久樹。うち、そんなこといえるほど強いだろ。まあ、久樹だけは別格で、とてつもなく上手なだけどさ。来年の二月に、千葉県少女フットサル大会なんてのが開催されるらしいんだよね。それも、申し込んでみようかな」

「いいんじゃない。関サル、関東決勝までいっても日程かぶらないし」久樹はどんな時であれ、優勝することしか考えてない。

「あたし、なんか少女って言葉、嫌いなんだよね」

スカートのくせに椅子に座りながら片あぐらの久樹、確かに少女っぽくないよな。肌も黒くて小学生の男の子みたい。とかいいつつわたしも片あぐら組んじやっているけど。

「あたしも、少女って嫌い。なんか鳥肌立つよねあの言葉。じゃなんていえばいいのか分かんないけど。平気なのは少女漫画っていう時だけ。そんな時だけ、違和感ない」

「わたしも、好きじゃないな」。女子ならいいけど」と景子。

「そうそう、女子ならいい！意味がどうこうじゃなくて少女って言葉の響きが、なんか嫌なんだよね」

誰も考えないようなどうでもいいこだわりが、三人で一致してしまった。わたしたちが友達になったのって、必然のことだったのかも。

「スカート丈もさ、最近の高校生、短いじゃん。あれ、凄い嫌なんだよね。履いちゃってるけどさ。浮かない程度に、長めに伸ばしちやってるけどさ」

今度はわたしが振る。

「梨乃はガッツリ筋肉ついてるからな、男みたいに」

「ついてないよ！」

失敬な。

「冗談だって。でもあたしも、本当は嫌だな。バカみたく見えるし

さ、太ってる子なんか可哀相だよ、どう考えても似合っていないに、そうしないとそれはそれで目立って恥ずかしいし」

「わたしも好きじゃない。でも、そうしないと、久樹のいう通り目立って恥ずかしいんだよ」

また三人で意見一致だ。

「まさにそうなんだよ。一年の時あたし実際にやったよ、長く。膝下十センチ。通学路に出た瞬間、うわやばっ！ ってすぐ家に戻ったよ」

とわたしは去年の恥ずかしい経験を語る。

「で、そんなさあ、織絵に見られて、爆笑されちゃったよ。女って嫌だね、服のことだけじゃなくなにからなにまで面倒で」

「ほんとほんと。男に生まれたかったよね」

「そう？」

あ、ここで景子脱落。

「飛行機乗ったことない人！」

わたしは唐突にそういうと、高らかに手を上げた。なんかいまの流れたと、またまた全員意見一致しそうな気がして。でも二人の手は上がらなかった。

「なんだよいきなり。あるよ、飛行機くらい」

と久樹。

「毎年家族で海外旅行に行くから」

と景子。

「あたしだけ仲間外れか。景子とはかく、久樹が飛行機乗ったことあるとは意外だ」

「一昨年、学校の旅行でも乗ったし。それと、小さい頃。親の仕事の関係で、ブラジルに住んだから」

「え、久樹、外国で暮らしてたの？」

「九歳くらいまでね。向こうの日本人学校に通ってた」

「初めて聞いたあ。じゃ、じゃあブラジル語も話せるの？」

「ブラジルはポルトガル語だよ。まだ、ある程度は話せると思うよ」

「凄い！　うわあ、なんか落ち込むな。あたし一人飛行機未体験かなんて思ってたなら、それどこじゃなくて、久樹外国語喋れるんだもんな。景子も頭いいしさ、真の劣等生はあたし一人だよ。もう、立ち直れん」

横にどつと倒れて、景子の膝枕。景子にほつぺたをムニムニムニといじられる。

「梨乃、中二の時、陸上の全中で四国いったんだろ。飛行機じゃなかったの？」

「あれさあ、お金ないからっていわれて、新幹線と在来線。本州の外に出たの初めてだったのに、えらい大変な旅行だった」

久樹、子供の頃からフットサルやってたっていうのは、ブラジルでやってたんだ。だからあんなに技術があるんだな。

さて、わたしもなんとか立ち直った。わたしたちの会話は相変わらずフットサル中心で回っていく。今回、関サルのことだから、わたしも景子もそこそこ会話に参加したけども、フットサルの話題は久樹が一人で喋り続けることが多い。ただでさえよく回転する舌がフットサルの話になるとさらに倍化する。そして今日もだんだんいつもの久樹になってきた。

部活のこと、リーグのこと、世界の有名なプレイヤーのこと、そしてサッカーのこと。久樹はこの分野のことは実に情報豊かで、一人で喋らせていても少しも話が途切れることがない。ある意味凄い才能だ。

わたしは基本的には頷いているだけで、自分の知識や考えで返せるようなところがあれば返すという程度。景子とはなから頷きと相槌担当を決め込んでいる。

「ピヴオとはなんぞや」

唐突にそんな質問をしてきた。

「最前列ディフェンダー。たぶん久樹とは違う考え方だと思うけど」わたしは即答する。常々考えていることだったから。ちなみにピヴオとはサッカーでいうところのフォワード。

久樹、にやにや笑って、

「まあね。でもキャプテンの考えてることの方向性を確認しとかな
いと、なにやるにもチグハグになっちゃうからさ、ちょっと聞いて
みた。なるほどね、最前列ディフェンダーか。じゃ、FP四人全員
がベツキだな」

「フットサルはルール自体が守備的一邊倒にはやれないようになって
いるから、だからこそ全てのことを守備的に考えるのって大事だ
と思う。大袈裟にいうと、点を取ることも守備なんだよ。逆いうと
守備することも攻撃になっちゃってしまうから、あまり突っ込んだ話をし
ようとしても矛盾だらけで論点ずれちゃうけど。まあとにかく、そ
れで戦術をどうしようともでは思ってたなくて……あたしはまだ
そこまで経験はないから。あくまで個人的な、意識の持ち方ってだ
けの話。先制されたらパワープレイだってさせるよ」

「梨乃が部長になつてからのこの一ヶ月間の練習で、守備的に比重
置く考えなのは分かっていたけど、そこまでとはね。おもしろいね、
点取ることも守備って」

「二年前、先輩のボールを二十分かけて奪うどころか触れることす
ら出来なかったってところから、あたしのフットサル人生は始まって
いるからね。守備が完璧ならば負けない」

「また春江先輩ですか。だから何度もいうけど、あいつは別格なん
だってば」

お店の自動ドアが開き、新たな客。よく知った顔の男子が二人。

「お、ゴリラとその手下たちじゃん」

二人とも佐原南の男子制服をラフに着ている。ワイシャツは第三
ボタンまで開け、裾はズボンから出している。暑いのにわざわざ長
袖を着てわざわざ袖まくりしている。ズボンずり下げるようなみつ
ともない格好はしてないけど、それでも充分にだらしない。

嫌な奴がやってきた……

いつもぼさぼさ寝癖髪。高木三人。たかぎみつとわたしや景子と同じクラス。

その後ろにいる図体の大きいのが高木三人の友人というか悪友の梶かじ
わらたかし

原孝。どちらも男子フットサル部員。

三人と書いて「さんりん」でも「みつひと」でもなく、「ミット」と読む変な名前。背はスラッとして顔立ちもまあ普通なのだけど、とにかく口が悪い。だからわたしの心の中の「非・恋愛対象者リスト」の上位には、常にこいつの名前がある。本人はそんなことゆも知らずに能天気顔。

なんでもお父さんが野球大好きで、息子をプロ野球選手にしたかったらしい。ところが当の息子ときたら天性の天邪鬼、物心つくや否、買い与えられたバットもグローブも蹴飛ばして、地元の少年サッカー団に入ってしまったのだ。しかしそんな捻くれ者も自分で選んだ道は楽しいようで、中学校ではサッカー部、高校ではフットサル部、と順調に続けている。

「あれ、おい、ゴリラ、そのシェーキ新しいのじゃねーの？ 期間限定の、クリームチーズの。麗葉ちゃんがCMやってるの。おれもそれにしよう」と

「勝手にすりゃいいじゃん。それはそうと、ゴリラっていうな、このミット！」

よく考えるまでもなく悪口でもなんでもないことを、さも悪口かのような口調でいつてみる。いずれにしてもこのバカ男にはまったく効果なく、それどころか余計に調子に乗ってゴリラゴリラと不気味な歌をうたいながら体くねらせている。

「夏の暑さが脳にまだ残ってんじゃないの、あんた」

このバカとは家が近く、小学校の時から半ば腐れ縁のような関係。ただ、同じクラスになったのは、今年が初めて。バカバカいつてるけども、わたしよりずっと成績が良く、それがとても悔しい。

あと、いつとくけどわたしは別にゴリラ顔ではない。体だってか細くはないけど太くもないし、まあ普通だ。小学生の頃に何故だかそんなあだ名がついたことがあって、現在でもその名で呼ぶ者がいるというだけのこと。こいつもその一人。ほんと、大っ嫌い。

「本当、仲がいいよね」

ミットの後ろに回りこんで、いつそ絞め殺してやろうかとスリーパーホールドをかけていると、それを見ていた景子が唐突に、とんでもないことをいい出した。

「どこが！」

対象者二人揃って、景子に真剣に抗議。

「うわ、ハモった！」

茶化す久樹。

「そついえば、お前らよう」

黙って立っていた加地原孝が、唐突に口を開いた。すっかり存在を忘れていた。体が大きいと、かえって目立たないものだ。

「関サルの一回戦、茂原藤ヶ谷に決まったらしいべ。ご愁傷様だな」
え……茂原藤ヶ谷って、まさか。

「なに、ゴリラあそこ当たんだ。うわっほ、可愛そうに。まあ、骨は拾ってやるから、せいぜい頑張れや。つか、お前には効かないんじゃないの、呪い。あれ、人間用だろ」

わたしの腕の中でミットが小癢なことをいうので、ぎゅいっと腕に力を込めてやった。

「あたしも立派な人間なんですけど」

このまま窒息してしまえ。

「分かった、それでもいい、ギブ、ギブッ」

腕を緩めてやった途端、するりと抜け出したミット。また類人猿だなんだといって踊り始める。行動読めてたから、もうあんまり腹も立たない。それよりも、

「加地原、それ本当なの？ 茂原藤ヶ谷って」

アホの相手よりもこっちのほうが大事だ。

「さっき入ってきたばかりの情報だけど間違いねえって。ダブルバスターかけてもいい、ハバネロの」

「かけないよそんなの、あたしに分が悪い」

毎年秋から冬にかけて行われている関東高校生フットサル大会。我々にとって一番二番を争う大事なイベント。まずは県内で地区予

選があるのだけど、加地原の話ではわたしたち女子部の初戦の相手が茂原藤ヶ谷だというのだ。

県立茂原藤ヶ谷商業高等学校。千葉県茂原市の外れ、海の近くにある高校だ。男子部は特になにも聞かないけれども、女子部は非常に有名。大柄な選手揃いで、体格にものをいわせた反則ギリギリのラフなプレーがとにかく多いらしいのだ。

しかも、何故だか試合直前になると、対戦相手の主力選手が怪我やら病気やらで欠場してしまったりするとのこと。去年の大会の時も直前に対戦校の主将がアルバイト先で大クレームを起こして、お客さん先に謝罪にいかされるはめになり、それもあつてか結局茂原藤ヶ谷にボロボロにやられてしまったという話だ。

そんなことばかり起こるので、毒を盛っているんだとか、黒魔術だとか、様々な噂が暴走している状態。運良く試合に出られた選手も、結局はラフプレーの餌食になるとか。

結局はフィジカルが強くて戦術のしっかりした強豪校にあつさり負けて散ってしまうのだけだね。それまでにどれだけ血の海を作り、死人の山を築くことか。最初に強豪校と当たつてとつとと玉砕してしまえばいいのに、よりもよって何故うちなんかと。

「嫌だなあ、茂原藤ヶ谷なんて」

景子が心底嫌そうな顔。華奢な体格の景子は、茂原藤ヶ谷の直撃を食らつたらひとたまりもないだろう。くるくる回りながら八十メートルくらい吹っ飛ぶんじゃないかしら。……どんな怪物なんだか一度も実物見たことないものだから、どうしても噂からいろいろと勝手に破天荒な想像をしてしまう。

「大丈夫。あいつら、技術はそれほどじゃないって聞くよ。絶対にあたしらが勝つ！　ね、梨乃」

久樹が、冬だつたら暖房費かからないんじゃないかってくらいに炎めらめら燃やした瞳でわたしの顔を見る。いま九月だからくそ暑いわ。

「なんかえらく強気だなあ。そりゃ、あたしだってさ、やるからに

は勝ちにいきますって。だからとりあえず……景子、あのさあ」

「なに？」

「ノート見せて。現国の」

両手合わせて景子様を拝む。

「モキチ、今日の中から出題するようなこといつてたじゃん、二期の間」

試験で赤点なぞとつていたら、茂原藤ヶ谷もなにもないのだ。

「あ、ずるい梨乃！ 景子、あたしも」

「あのね、二人とも、ノートとることだってちゃんとした勉強なんですからね」

「だってモキチ板書速いんだもん」

とわたしはグズる。

「どこの田舎か分からないような喋り方するから、ついついまじまじ聞いてちやうんだよな」

久樹がなんか酷いこといつてる。とかいうわたしも乗ってしまつて、

「そうそう。どこの地方の喋り方だろ、って考えている間に、黒板消しサツサカやって消しちやうんだもん」

「同じまじまじ聞くな、せめて身になるところをちゃんと聞けばいいのに」

景子、あきれてものもいえない様子。いつてるけど。

「そうするから、だから、ノート見せて。いまここでちょっと見るだけでもいいから」

「なんかいつてることが支離滅裂なんですけど。……しょうがないなあ。今回だけだよ」

「やった〜！」

声合わせて喜ぶ劣等性コンビ。

これで何度目の「今回だけ」か。

やっぱり持つべきものは友達ってことですね。

「ただいまー」

我が家に帰宅。もうとつくに夜だ。時計の針はすでに八時を十分ほど回っている。

勉強もしないといけないというのに、ついつい久樹たちと対茂原藤ヶ谷戦のことで話し合っていて時間がたつのも忘れてしまったのだ。

「あ、おかえりなさい、梨乃さん」

従業員のヒデさんがお店の後片付けをしている。ヒデさんは大柄で、優しそうな顔の青年だ。確か年齢は二十九歳。独身。

木村豆腐店というのがこの店の名前。木造の、吹けば飛ぶようなオンボロの住宅兼店舗だ。以前はお父さんとお母さん夫婦で働いていたのだけど、お母さんが死んでしまって……半年くらいはお父さん一人で頑張っていたのだけれど、やはりどうにも労力的に厳しくて、ヒデさんを雇ったというわけだ。もうかれこれ五年ほど前の話になる。

よく「店の側から上がるんじゃないよ！」と、お父さんに怒鳴られるけど、こっちのほうが早いし、いまは営業時間終わっているから平気でお店から入ってしまう。まあ、営業時間内でも平気でそうしちゃっているのだけだ。

店の奥ではお父さんが大きな鍋を鉄のタワシで掃除している。同時に明日のための仕込みも行っている。いつものことながら、もの凄い大豆の匂いだ。

「お父さん、ただいま」

「おかえりういっしゅ」

腕を交差させる父。ゴツイ顔して、チヨビ髭なんか生やしてるくせに、なにやってんだか。

「バカじゃないの」

わたしも容赦ない。

「うるせーな、吉田さんが流行ってるっていったんだよ！」

吉田さんは近所のおばちゃんて、お得意様。

「……あのさあ、なんか手伝おつか」

わたしの一声に、父、振り上げたタワシを下ろし、

「お、なんだなんだ、こういう風の吹き回しだよ。ははあ、小遣い値上げなら無理な話だぜ。このあいだ上げてやったばっかだろ」

「まったくもう。可愛い娘の純粋な愛情を、そうやってすぐ邪推するんだからなあ」

まあ無理もないか。先々月、粘りに粘ってようやくお小遣いを上げて貰ったばかりなのだから。

「え、可愛い娘、どこどこ？ いねえよぶふっ！」

予想外に力が入ってしまった拳を顎に受けて、のけぞるオヤジ一匹。やば、当たり所が悪かったのか本当に痛そう。

「いつてえな。余計な筋肉ばかりつけやがって」

「バカなこといつてっからだよ」

「器量悪いツラしてんだから、すこしはおしとやかにしてろっつの」

「昭和のオヤジか！」

器量悪いだとか、いまどぎ実の娘にいう台詞かね。

夜九時。

残暑の厳しい季節だけれども、さすがにこのくらいの時間になるといくらか涼しくなる。

既にヒデさんも帰って、ボロい我が家にはわたしたち父娘の二人だけ。

お風呂から出たわたしは、パジャマに着替えタオルを頭にまいて、床にあぐらかいてビデオのリモコンをいじっている。

「ああもう、また録画されてないよ！ お父さん、もうこのボロビデオ、やだ」

「電源ちゃんと入るべ」

寝っ転がりながら柿の種を食べている父。

「すぐ録画出来なくなるんじゃないじゃん」

千葉テレビで隔週放送しているサッカー講座番組「楽しいサッカー」、タイマー録画のセットをしたはずなのに撮れてない。番組予約表を見ると、予約時刻の表示が残ったままだから、そもそもまったく作動しなかったのだ。セットした予約時間に間違いはないものの、ビデオの時計が0:00のまま点滅している。一瞬電源が落ちたのか、時刻が飛んでしまったようだ。たまにこのようなことが起こるのだが、まさかこんな日に、こんなことになるとは。

「久樹も景子も録画していると思うけど、ビデオテープじゃないしなあ。今度、遊びにいつて、見せてもらおう」

二人とも、家にあるのは地デジ対応のハードディスクレコーダーだというのに、うちはいまだにVHS。テレビなんか、わたしが生まれた頃を買ったらしい十四インチでビデオ一体型のものだ。買って数年でビデオデッキ部分が壊れてしまい、ビデオだけ別に専用機を買ったのだそうだ。

「早く最新のテレビと、録画する機械買えばいいのに。知ってる？あと二年でアナログ放送も終わりなんだよ。この機械じゃ映らなくなるんだよ。クサナギ君がCMでいつてたでしょ。でもまあ、ぎりぎりまで待ったほうが性能が良いのが出るからいいか、どうせまた十年二十年って使うんだろうから」

「そもそも、いらねーじゃん。テレビなんて見ないだろ」
呑気そうにお茶をすする父。

「見るよ！ テレビがないなんて、どんな家だよ。あのね、お父さん、確かに豆腐作りには関係ないかも知れないよ。豆腐講座なんてやってないからね、NHKでも千葉テレビでも。でもさあ、それ以外にも、物価の上昇やら消費税やら天気予報やら株価やら総裁選やら占いやら、生活にかかわるような番組一杯あるでしょーが」

あと、お笑いやら、ドラマやら。わたしのついでとはいえお父さんも見ているから、ういっしゅなんてバカやっているわけで。

「山奥で仙人のような暮らししている職人と違うんだよ。街の中、

お客さん相手の商売してるんだからね。世の中のことなんにも知りませ〜ん興味もありませ〜んじゃ困るでしょ？」

「別に困らんなあ」

ダメだこりゃ。

テレビもビデオも、はよ壊れてしまえいっそのこと、と思っただけど、やっぱり壊れてはいけけない、頼む、もうしばらく頑張ってくれ。二年後のアナログ放送が終わる頃までには、なんとかお父さんを改心させるから。

あ、でもあと二年後といえば、わたしももう高校卒業しているよな。

大学生になつて一人暮らしなんかしているかも知れない。

……結婚してたりして。

なんてね〜。

「相手いねーだろ」

「あ、あたしなに喋った？ どこまで喋った？」

お父さんの首を両手でぎゅぎゅーっと絞める。

思ってること無意識に口にしてしまう癖、なんとかしないとなあ。

「楽しいサッカー」が録画されてないんじゃないか、いつも夜十時くらいからやってる日課のランニング、早めに済ませてくるか。それとも勉強を先にしてしまおうか。などと考えていると、いきなり電話のベルが鳴った。まあ、いきなりじゃなく予告してからベルの鳴る電話機なんてないけど、とにかくうちの電話は大昔からの黒電話なのでジリリリン！ とうるさくて、油断している時に鳴ると飛び上がって天井に頭ぶつけるくらいビックリするのだ。この感覚、分かってくれる人がいないんだよね。黒い電話だからなに？ って感じで。

いつまでもオカマのセミみたいな大音量でジリジリ鳴られてはかなわないので、四つ足で素早く電話器ににじり寄り受話器を取った。「はい。木村豆腐店です」

うちはお店専用の電話番号を持ってないので、建物同様に電話も

自宅と兼用。だからわたしも必然的に営業トークなんか身につけてしまっている。電話で赤の他人と会話ができない十代が増えているとニュースで見たことがあるが、うちには無縁のことだ。

「あ、なんだなんだ。春江先輩かあ」

わたしとフットサルとを引き合わせてくれた人。パワーも技術も半端じゃなく凄い、わたしの心の師匠だ。本当は同じ年なんだけど、尊敬崇拝の意味を込めて先輩と呼んでいる。

彼女はわたしと同じ中学の出身で、現在は東京の高校に通っている。実家からあまりに時間がかかるから、アパートを借りて一人暮らしをしている。わたしが一人暮らしに憧れるのも、彼女の影響なのだ。先輩のやること、わたしにはなんでもかっこよく思えてしまう。

「そうそう、そうなんだよ。茂原藤ヶ谷でしょお、もう、どうしようかと思ってるさあ。……そりゃ、やるしかないよ。うん、うん、ありがとね、心配してくれて。先輩、大好きだよー」

茂原藤ヶ谷がわたしたちの初戦の対戦相手であることを知って、ちょっと心配になって電話をかけてきたのだそうだ。優しいなあ。それにしても情報が早い。いくら人望があるにしても、凄いネットワークだよな。

4

スカートをきゅつきゅつと回して位置の微調整。

赤いネクタイを結び、ブラウスの第一ボタンをとめる。

髪の毛にさつとスプレーをひとふき。

目の前にいま女の子が一人立っている。

身長百六十ちよつと、まあ普通。体重も、まあ普通っぽい。背骨はすらつと真つ直ぐで、目はパツチリでもないが二重、髪の毛は肩にかかるかどうかくらい長さだ。

鏡に映ったわたしの姿。

「ゴリラじゃねえよな」

ぼそり、と呟く。

そこそこ可愛い部類に入るのでは。いや、まあまあ普通、かな。他人の感覚なんぞ分かんが、ともかく、決して、絶対に、ブスなんかではない。なにがあるうと、そう、なにがあるうと、ゴリラなんかじゃないっつーの。高木ミツトのアホウ！ あ、マンガの江戸っ子みたいな顔のオヤジの娘にしては驚異的に可愛い！

と思うけど。

どうなんだろう……

もう、どうでもいいや。

ブスでもいいや。

はあ。

つい、心の中で熱く盛り上がってしまったて、逆にテンション下がっちゃったよ。

小学四年生の時だったかな、クラスの女子がやけに華奢な子ばかりで、相対的にわたしがいかつく見えてしまったのか、男子に毎日のようにブスだ猿だゴリラだといわれていた。現在となってもその名残から、悪意はなくともわたしをそう呼ぶ者がいる。例えば高木ミツトとか。

周囲の子がどうこうというだけでなく、その頃わたしがいつも猫背気味で姿勢が悪かったことも原因の一つかも知れないけどね。少し色黒なところも。他人よりちょっとだけ首が短いとか。意外とがっちり骨太なところも。低学年の頃から妙に気が強くて、男子と殴り合っただけのこと。ミツトの奴も何度ボコボコにしてやったことか。まあそんなわたしも現在はずっかりおとなしくて地味な子になってしまったけどね。ええと、あとそれから、って、おい、いくつ原因があるんだよ。

再び、長い長いため息だ。

やっぱりブスなんだよ。きっとゴリラなんだよわたしは。

しかし男子も男子だ。小学生の頃ならば、女の子にブスだなんだいいたくもなる年齢だろうけど、高校生にもなっているんだよ。

お父さんが眠そうな目をこすりながら洗面所に入ってきた。いつも早朝の仕事が一息つくといったん寝て、このくらいの時間にまた起きてくる。

「おう、洗面所まだあかねえのか。化粧したって変わらんだろ。酷くなりこそすれ」

「化粧なんかしてないよ！」

誰がブスじゃボケ！

「なに怒ってんだよ」

「ごめん。ん？　なんでバカにされたほうが謝んなきゃなんないんだよ」

「知るか」

わたしは歯ブラシを手に取り、ブラシの上ににゅるんとチューブの中身を出すと、お父さんに洗面所の所有権を明け渡した。歯を磨きながら居間にいく。十四インチのボロテレビをつけると「めざましスタジオ七時です」がやっている。

男性レポーターが、渋谷の女の子に現在流行のおしゃれグッズのことを質問している。名前聞き逃したが、なんかギリシヤ人みたいな変わった靴。認知度九八%だつて。うそ、わたし、そんなの初めて見たよ。

……おしゃれなんて二の次って思ってたけど、さすがに二%の側になるのは恥ずかしいかも。ちょっとは興味持つようにしないといけないなあ。雑誌まで買うつもりはないけど。

仕度を済ませ、トイレも済ませ、仏壇に線香あげて、天国のお母さんにお祈りして、お父さんと従業員のヒデさんに挨拶して、靴履いて、家を出た。

朝、七時四十分ジャスト。

今日も平凡な、でもそれなりに充実してて退屈はしない、そんな一日がはじまる。

わたしの通う佐原南高校まで早足でも三十分はかかる。電車通学

の久樹が体力作りのためバスを使わず佐原駅から歩いているので、わたしも景子も真似して、なるべく歩くようにしているのだ。

佐原駅から見ると、北側は平坦な住宅地帯。南側は少しだけ平坦な部分があり、小江戸などと呼ばれる観光名所があるが、さらに進むと住宅の閑散とした山林地帯だ。でも山の中にもところどころ住宅街も存在しており、我が家はそんな中にある。昔からある小さな住宅街の中の、古びた商店街の中の、さびれた豆腐屋。なんでも昔は老舗の和菓子屋だったらしいのだが、戦後、祖父の代、大量の大豆が激安入手出来るルートがあるとかで、あっさり鞍替えしてしまったらしい。一時期はそれで儲けたらしいが、いまはご覧の通りの有様。しかもここ数年、大豆の価格高騰でさらに厳しい状態らしい。和菓子屋だったら後を継いであげてもいいけど、豆腐屋じゃ嫌だなあ。などと考えてしまつたしは冷たい人間だろうか。

さて、その小さな豆腐屋を出て、自動車一台が通れる程度の細い道を十分ほども歩くと、左右から伸びる木々のトンネルに覆われた薄暗い県道に出る。この県道が、JR佐原駅から佐原南高校までの通学路だ。わたしの住んでいるところも駅から結構坂道を登ったところなのだが、高校はもつともつと登ったところにある。

「おいーす」

自転車に乗った加地原孝が、わたしを追い抜いていく。上り坂なのに凄い勢いだ。

「おいーす」

といちおう返しとくが、立ち漕ぎでシャカシャカ頑張ってる加地原の巨大なはずの背中が、既にかなり小さくなっている。

反対にみるみる大きくなってくるのが畦木景子の後ろ姿。景子はいつも単語帳やら参考書やら片手にゆくり歩いているので、早足のわたしとこのように合流することが多い。一緒になるとわたしも速度落とすし、景子も手にしてる物しまつて歩調を速め、他愛もない話などをしながら歩くことになる。

「景子、ノートありがとね。助かった。……悪いね、見せてもらう

どころか結局貸してもらっちゃって」

「貸したくはないけど、梨乃ってば、鬼気迫る感じで顔寄せてくるんだもん」

とまあ、昨日はそういうことだったのだそうで……

「まあまあ。試験無事にパスしたら、なんでも奢っちゃうからさあ」

「じゃ、ハナキヤのイタリアンジェラートね。ダブルのビッグサイズで、ゴールドバナラとカカオスペシャル」

景子、さらっといつてのけるが、しかし、

「そ、それ、究極にゴーヂヤスな組み合わせじゃん！」

「嫌なら別にいいよ。それじゃ、ハナキヤはやめて、そうだなあ、カフェエクスプレツアの……」

「ハナキヤでいいです。ハナキヤ奢らせてください、是非」

高い代償を払うことになってしまった。小遣い値上げしてもらってなければ、どうなっていたことか。口は災いの元とはよくいったものだ。

「ダイエツトしてるくせに」

往生際悪く、ぼそつと反撃してみる。

「こういう時にしっかり食べられるようにね」

間髪入れず、返ってくる。

負けた。

まあいいか。ノートは今日、久樹も借りるんだから。なんとか引きずり込んで、折半にしてしまおう。

それにしても、景子のまとめたノートは本当に分かりやすかった。基礎学力の足りないわたしには、どうにも分からないところもたくさんあったのだが、それでも、ノートを見ているだけでなんだか賢くなった気がしたし、今度の試験対策には充分に役立つものだったと思う。

でもいいな、景子は。

頭いいし。

かわいいし。

性格も優しいし。

気がきくし。

ほんと、欠点がない。おっとりしてて、一緒にいて癒される。

「よっ、ゴリラ」

背後からその声が耳に入った瞬間、脳を経由せず脊髄反射で後ろ回し蹴りをしていた。獲物をしとめた確かな感触。高木ミツトが「えひい」と奇妙な叫び声をあげた。わたしの蹴りが、腰だか腿だかのあたりに炸裂したのだ。

「スカートで回し蹴りなんてほんと野蛮なサルだな。ガキかよ！」

「うるさい！ ガキはお前のほうだ！」

ほんとこいつ、ムカツクわ。

「景子、やめてよ、その微笑ましいものを見る顔つき。他人に勘違いされたらどうすんの」

「楽しそうだなあって思ってた」

「どこが！」

また、このバカとぴたりハモってしまった。

朝からついてねえ。

腹立つからもういっちょ蹴りくらわしたる。

5

「えー、であるからにしてからにして」

静かな教室にカマバロンの甲高い声だけが反響している。

いまは四時限目、数学の時間だ。

そして、これが終わればようやくお昼。あと三十分。

もうお腹が鳴りそう。昼、早くきてくれ。

しかし今日は凄い猛暑だ。残暑云々という季節だというのに、真夏を超えている。

汗がダラダラと止まらない。エアコンくらい導入してくれればいいのに。職員室にもないので、そう文句もいえないけど。

空腹と暑さで、椅子に座っているのにもかかわらず目が回って

倒れそうだよ。

「したがってこの式の解は！」

またカマバロンの絶叫轟く。いや、普通に喋っているだけなんだろうけど、キンキン響くからヒステリックなおばちゃんが怒っているように感じられるのだ。

本名、田中武。ジャガイモみたいな顔 ジャガイモ 男爵、ということで、オカマ男爵と呼ばれていたのだが、最近は専らカマバロンと呼ばれている。名付け親は遠藤孝一。肉ジャガから派生して、肉男爵などといっている者もいるが、なんか響きが下品な感じで、女子は誰もそう呼んでない。

しかし参ったな。迂闊だった。モキチの国語のことばかり考えて、すっかり数学のことを忘れていたよ。

テストに備えて、さて、本腰入れて授業を聞きますか、と思ったものの全然理解出来ない。カマバロンが黒板に数式を書いているが、魔女の呪文にしか見えない。

わたしは自分のノートに、『ノートちょっと見せて』と書いて、小声で「おい」と隣の隣の席にいる高木ミットに声をかけた。

よくよく考えると数学って他人のノート見ても意味がないと思うのだけど、まあ咄嗟の人間の行動なんてこんなものなのである。

ミットは、こちらをちらりと見るや否、ぷいと反対側を向いてしまった。

ほんつと嫌な奴。せめて気づかないふりして真っ直ぐ黒板見てるよ。

と思ったらミット、がさごそ動き出し、高くノートをかかげた。なんだ、ちよつとはいいいところあるじゃん。

『阿佐野亭のステーキ食いたいなー』

はあ？

横目でこちらをちらちら見てるミット。

頭きた。すかさず力り力り書いて、

『ドケチ！』

景子におごるだけで財布が大ピンチなのに。

『バーカ』

と瞬時にして返ってきた。

ミット、いったんノート引っ込めて、カリカリやって、また見せてくる。さっきのおつきい『バーカ』の周囲に小さく、

『バーカ バーカ バーカ ゴリラ ゴリラ ゴリラ ブス ブス
ブス サル ブスザル ブス 猿人 類人猿 人類のあけぼの
石器 オリバー』

わたしたち二人の間にいる越野知美ちゃんが迷惑そうな表情を浮かべている。ごめん、しかしもう、あとには引けんのじゃ。他人のノート借りようというわたしもわたしだが、さすがにムカつ腹が立ち、ガリガリガリガリと思いつく罵詈雑言の限りをノートに書き殴り、これでどーじゃとばかりミットに向けてばつと突き出した。

シヨックで死ね！

突き出した先には、カマバロンの顔があった。わたしのノートを見て、目を白黒させている。頬がピクピクしてるのが分かる。

この教室にこれほどまでに重たい空気が流れたのは、開校以来ではなかるうか。

カマバロン、ノートを軽く払いのけて、こほんと咳払い。

「あなたの気持ちはよく分かりました」

冷静な表情だが、手がぶるぶる震えているのがはっきり分かる。

「ち、ちが……」

慌てて立ち上がるわたし。

事情を説明するから冷静に聞いてくれ、カマバロン！ いや、田

中先生！

「自習！」

カマバロン、甲高い声で叫ぶと、内股の早足で教室を出ていつてしまった。

吉田ノリオが廊下に顔を出し、完全にカマバロンが消えたのを見届けガッツポーズ。埃が床に落ちる音すら聞こえそうなくらいしん

としていた空気が、一瞬にして大爆発。

「自習！」

近藤直樹が内股で体をくねらせながらカマバロンのキンキン声をマネして叫ぶ。

「木村、ありがとう」

徳江次郎がわたしの手をぎゅっと握ってきた。

「はああああ？」

ちよつと、なにいつてんのよこいつ。

「よし、早弁するべ」

「野球やろうぜ野球」

とみんなはしゃぎ放題。

みなさん、教室は勉強するところですよー！

「しかし木村、お前勇気あるなあ」

「だから違つて！ ミットが」

「失敬な。ボクはただ真面目に勉強してただけですが」
作り真顔100%のミット。

「うわ、きつたねー」

わたし一人悪者かよ。

しかし、最悪な事態になってしまった。

よりもよつて、カマバロン相手にやらかしてしまうとは。

以前、吉田ノリオが先生にチクリと嫌味をいつてしまったことがある。確かあの時も、冷静に受け流しつつも手がぶるぶるしてた。

翌日から、吉田への態度がもう明らかに違っていた。問題の振りかたなんか実に用意周到で、難易度高くはないけども吉田には苦手そうというものばかり振ってくるのだ。徹夜で考えてるんじゃないかってくらい。ヒント教えてあげる振りをしつつ、恥かくように巧みに巧みに誘導するような真似するし。

「にねん たかぎみつと」と名前書いた野球ボールでもカマバロンの後頭部にぶつけてやるうかしら。あらたな獲物の出現に、地味なわたしの存在なんてあつさり忘れてくれるかも知れない。

「次っ、リフティング！ 五回も出来なかったら腹筋五十回やらせっからね！」

わたしの怒鳴り声が、壁に人にボールにバリバリぶつかって反響しまくっている。いま体育館には女子フットサル部員しかいないから、そんな大きな声出す必要ないのだけど。

「キャプテン、無駄に声うるさくて迷惑です」

浜虫久樹がしかめっ面で耳を押さえて、容赦ないリアクション。

「どーもすみませんです……」

わたしはがつくりうな垂れる。

だって、明日からのカマバロンのねちねち攻撃が怖いんだもん。情緒不安定になるのもしょうがないじゃないか。でもまあ、いまから不安な気持ちになっていても、それこそしょうがないよな。世の中なるようにしかならないのだから。気持ちを切り替えなければ。そうだ。こんな時にはフットサルの練習だ。すべてを忘れられる、楽しいフットサル。わたしもみんなと一緒に、リフティングに参加しよう。

結局……

五回出来なかったのはわたし一人だけだった。

やりやいいんでしょ、腹筋五十回。

「うわあ」

久樹が大袈裟に身をのけぞらせて驚いている。

「そりゃくるよ、きますよ、絶対。ねっちなねっちと、ねばっこのいのが。バカだなあ梨乃は、なにカマバロン敵に回してんのよ。心から同情するわ。ま、せいぜい頑張ってね」

「おい、どこが同情してるんだよ」

所詮人間一人きり。孤独な生き物。

もう夜の七時半だというのに、わたしと久樹はまだ学校にいる。

ところどころ照明の消された、薄暗い廊下を歩いている。

もう完全に夕日も沈みきっており、窓の向こうはろくに外灯もない真っ暗闇。

部活のあと、わたしと久樹の勉強落ちこぼれコンビは教室でテストの対策をしていて、それですっかり帰りが遅くなってしまったのだ。

「あれ、部長ノート置いてきちゃったみたいだ。ごめん久樹、ちょっとだけ待ってて。んじゃ、昇降口のところで」

「分かった。急いでよね」

オーケー、とわたしは駆け出す。静まり返った廊下に、かかとを履きつぶした上履きのペタペタという足音が響く。

部長ノートとは、普通の大学ノートで、単にわたしが部活用に使っているメモ帳だ。

階段を降り、再び廊下を走り、廊下を抜けて外へ、体育館の入り口直前を左折、体育館に沿ってぐるりと半周したところに、運動部の部室に使用しているプレハブの建物がある……のだが、わたしはそこまですぐに体育館の途中で足を止めてしまった。

「おら、いくぞ！」

「まだまだ！」

「武富、そこじゃないっていったら間抜けが！」

男子の大きな叫び声にびっくりし、窓から体育館の中を覗き込み、そのまま目が離せなくなってしまったのだ。

高木ミット、その他、二十人ほどの男子が、素早く動き回り、体をぶつけ合っている。

男子フットサル部。こんな時間なのに、まだ練習しているんだ。いくつかのグループに分かれ、ボールを使い、攻守の練習をしているようだ。

いいなあ男子は、三年が抜けても二十人以上の部員がいるんだから。紅白戦に不自由しないじゃないか。こちらは、何人かに休まれるともう無理だからね、五対五は。

しかし、ほんとにみんな凄く真剣な顔してる。

ボールと足と脚と筋肉と骨と頭と胸と気迫と汗と、様々なものがぶつかり合っては、ガツ、ガツと音をたてている。

短パン姿なんだけど、ソックスとの間から見えている足の筋肉なんかも、見事に筋張ってて、太くガツチリしてて、なおかつしなやかそうで。

やっぱり男子は迫力があるなあ。高木ミットも凄い気迫だ。汗だらだら。いつもふざけてて、くだらないことばっかりいつているのに。

そうだ、久樹待たせていること、すっかり忘れてた。怒られちゃう。

わたしはまた、ペタペタと音たてて薄暗い通路を走り出した。

第二章 部長ってなんだ

1

ボールが武田晶の股の間をすりりと抜けて、またネットが揺れた。男子チームのゴール。

「いやっっぽう！」

シュートを決めた志田紀男が飛び跳ねて喜んでいる。

「やったー！」

「ナイシュ〜！」

残る四人が志田を押し倒して次々と上に重なり、歓喜の雄叫びをあげている。

股抜きゴールを決められたゴレイロの武田晶は、地団駄踏んで悔しがっている。たとえ何点取られようと、失点が悔しいことは変わらない。ましてや股抜きともなれば、なおさらだろう。

学校行事や病欠などで女子部の人数が足りず、ひょんなことから男子部と練習試合を行うことになったわけだけど……

まさか、女相手にここまで容赦なく本気でくるとは。

いいところ見せたいのか、勝負にかける思いが我々とは次元が違うのか、それは分からないが、とにかく一人一人が完全に本気だし、向こうのキャプテンどんどん選手交代させて、疲れていないのを次々投入してくるし。

そんなこんなで現在の得点状況、

十八　〇

男子の圧倒的リード。大虐殺といっても過言でない状態。

あ、いま十九　〇になった……

「しゃーっっ！」

豊田浩二のオーバーヘッド気味のクリアを、さらに志田紀男がオーバーヘッド、ループ気味のボールは飛び出していたゴレイロの武田晶の頭上を飛び越えてゴールイン。

「ミラクル！」

「宇宙最強！」

またみんなで抱き合って喜んでいるし。

こいつら、女子相手のゴールがそこまで嬉しいのか。しかも、一度や二度ならまだしも、もう十九回目だというのにまあいつまでも変わらぬハイテンションで。ゆりかごダンスまでやってるし。子供でも生まれたのかったの。

オーバーヘッドなんて、わたしたち完全に遊ばれているよ。

「うおおおっし！」

高木ミットの絶叫。そして両腕広げてほよほよと手を動かす変態的なダンス。

男子二十点目は、ミットの六点目。ダブルハット達成、はい、おめでとさんだ。最初は失点が悔しかったが、もう麻痺してきた。晶は相変わらず、地団駄踏んでいるけど。

武田晶は一年生だけど、反応素早いし、ポジショニング的確だし、上級生にも物怖じせずにしっかりコーチングが出来るし、とても優秀なゴレイロだ。まさに守護神といって過言でない。でも失点はゴレイロだけで防げるものではない。攻撃も守備も全員で行うのがフットサルなのだから。それなのに、肝心のＦＰはわたしを含めて全員、あまりの疲労に完全に足が止まってしまっている。男子はいくらでも交代メンバーがいるので、時間がたてばたつほど体力差が出てくるのは理の当然。男子のゴールまでの間隔がどんどん短くなっていく。

手を抜かれるよりは、ずっとマシなだけどさ。遊びでもないんだし。

……。

遊びじゃない、って、それじゃ、なんなんだろうなあ。わたしたちのやっていることって。義務でやっているわけでもないし。好きで、自分から飛び込んだわけだし。……わたしたちいま、なにをやっているんだろうなあ。

疲労困憊極みに達し、考えてもしかたのないことを考えてしまう。どうしてわたしたちは、肉体を苛めて、ときには怪我をしてまで痛い、辛い思いをしてまで頑張るんだろう。やらされている。そう思うなら、やめてしまえばいいのに。

夏木フサエも、浜虫久樹も、楽山織絵も、そして私も、ぜいぜいと肩を大きく上下させている。ピッチ外で、足を投げ出して地面に尻をついている楠見留美子と佐治ケ江優、彼女らも苦しそうな表情を隠しもしない。極度の疲労に、隠せるだけの余裕もないのだ。人数が少なくて、交代出来るのが二人しかない。二人とも、いまのいままで走り回っていたのだから。

足が痛い。もう攣りそう。いや、半分攣ってる。だましまし、体を動かしている。きつとみんなも同じだろう。

織絵、残った体力と気力を奮い立たせて、ふらふらとしながらもボールを奪いに詰め寄る。しかしそんなド根性もむなしく、交代で初めてピッチに入ったばかりの加地原孝は、ベッキつまり最終ラインの選手である織絵の突進をひよいとかわしてドリブル独走、飛び出してボール奪取を試みる武田晶をもフェイントで楽々とかわして無人のゴールにちょこんとボールを蹴りこむ。するするとゆっくり転がるボール、ゴールネットが小さく揺れた。

「やったぜ母ちゃん！」

「おおお！」

飽きるよ、お前ら……

2

「あつゝ」

わたしはグレーのベストのボタンを外して、パタパタと仰ぐ。足はフラフラ。もうなにをする力も残っていない。視界はゆっくり後ろに流れているからとりあえず歩けてはいるのだろうけど、足に感覚があるのだからいなかそれすら自分で分からない状態。

「明日、絶対筋肉痛やで、ほんまに」

夏木フサエがぼやく。なぜ関西弁？

わたしと夏木フサエ、浜虫久樹、楠見留美子、武田晶、佐治ケ江優の六人。学校の制服姿で、でっかいスポーツバッグを背負っている。今日はなんだかバッグが異常に重い。

「普通さあ、ミックスでやるよねえ」

「当然だよ、なんじゃありや、男子対女子ってさあ。せめて交代枠の数くらい合わせろっての。なんであつちだけ無限にいるんだよ」

「そんなにゴール決めて、なんでああまではしゃげるかなあ」

「かんっぜんに、本気だったよねあいつら」

「しかも飽きるどころか、パフォーマンスがどんどん派手になってくのね」

「ったく、ガキじゃないんだから」

「ガキ以下だよ」

わたしが内心思ってたようなことを、夏木フサエと楠見留美子が交互に口に行っている。

唇が渴いたかフサエ、缶コーヒーを一口。

「あんたいつもマックスコーヒーばかり、一日に何本飲んでんのよ。糖尿病になるよ」

「いいじゃん、今日はあんな動いたんだから。糖分摂取しないと」

「普段はあんな動かないでしょ。ぜーったい糖尿になるわ、あんた」健康オタクの楠見留美子。二人の会話はフットサルから離れて他愛ない雑談へ。

久樹と佐治ケ江は、ずっと下を向いたままだ。久樹は惨敗という結果に相当落ち込んでいるのだろう。佐治ケ江はいつもこんな感じにおとなしいので、悔しいのか悔しくないのかよく分からない。

「そんな気を落とさないでよ」

わたしは久樹を励ましてやる。

「でもさあ……」

久樹、力なく呟く。

「すごい、悔しいなあ。まさか、一点も取れなかったなんて」

「しょうがないって」

久樹のちっちゃな背中をばんと叩く。

「久樹、バー直撃の惜しいのもあったじゃない。ズガンって凄い勢いで、ゴレイロの寺田も全然反応できてなかったよ。そうそう、その前のサジのパスも良い感じだったよ。サジ、やりや出来るんだから、この調子で頑張りなよね」

「はい」

佐治ケ江優は一年生。センスも技術も非常にハイレベルなのが、人を相手にするとどうにも消極的になってしまい、まともにプレーが出来なくなってしまう致命的な欠点がある。そういう気の弱いところが直って、もう少し体力がついてくれば、レギュラー間違いないんだけど。

「悔しいなあ」

久樹が、まだいつてる。

「だから、しょうがないでしょ。むこう人数いたし、それに、男子なんだから」

「うん。……でも、腕力比べしているわけじゃないんだし、あたしたちとあいつら、そこまで差があるかなあ」

「まあ……一点くらいは、取りたかったよね」

「取りたかったね」

わたしは久樹と並び、とぼとぼと歩く。

「練習するしかないよね」

「練習するしかないね」

久樹、頷く。

気持ちはよく分かるつもりだ。久樹の受けた屈辱は相当なものだろう。もう十年以上もフットサルやっているのだから。小さな頃はブラジル人の男の子に混じって。帰国してからは、地元の少年フットサルチーム、中学になってからは学校の女子フットサル部。数年前まで男子の中で、しかも自信を持ってプレーしていたのに、久しぶりに男子と対戦してみたら圧倒的な体力の差に潰されて、せつか

くの優れた技術をろくに見せることもなく終わってしまった。

もう高校生だからな、体格、体力に男女差が出てくるのは仕方ないよ。そのあたりは陸上やっていたわたしのほうが現実的に受け止められるところだ。百メートル何秒、ってはっきり数字に出る世界だからね。

それと

数日前の夜のことを思い出す。夜の体育館。汗まみれでひたすらボールを追う男子たち。ぶつかり、倒れ、怒鳴られ、起き上がり……。いちおうあいつら、やることはやっているんだよ。とはいえ、やっぱり子供っぽいけどね。

「あ、織絵だ」

楠見留美子が前方を指差した。織絵が男子と手を繋いで歩いている。

「本当だ。一人とつとと帰っちゃったと思ったら。……あれ、織絵って高橋君と付き合ってたんじゃないかなったっけ？」

「梨乃、知らないの？ 五月に別れたんだよ。で、一ヶ月もしないうちに、今度は三年生と」

「えー！」

知らなかった。

二人、いちやついてゆっくり歩いているものだから、わたしたちも足フラフラで相当ゆっくりだというのに追いついてしまう。織絵、妙に元気そうだな。一緒に試合してたんだから、わたしたち同様に疲れているはずなのに……。どこからそんなパワーが溢れてくるんだろうか。もう一試合いけそうなくらいじゃないか。一番死にそうな顔してボール追っていたくせに。

織絵は後ろからやってきたわたしたちに気づくが、まったく照れた様子もなくベタベタし続ける。

「いいなー、織絵、彼氏いてさあ」

フサエ、ちっちゃな目をさらに細めて、心底羨ましそうな口調。やけ酒代わりなのかマックスコーヒを一気に飲み干す。

「なんかさ、彼氏作るようになってから、織絵、色々変わったよね」

留美子はすぐ横のフサエに対して呟いたのだが、織絵の地獄耳はその言葉を聞き漏らさず、

「分かるう？ 恋するとねえ、女は綺麗になるのよ。まあ、あんたらも頑張りなさいな」

ほほ、と不気味な高笑い。織絵と彼氏とは、横道にそれて姿を消した。

「変わったには違いはないけど。綺麗には……なっていないと思う。織絵には悪いけど」

思ったことつい呟いてしまつたし。

「むしろ、ごつく遅しくなつたよね。おかげで二年からスタメンになつたけど」

「あ、久樹もそう思つてた？」

織絵は、それほどボール捌きや、体を動かす技術は高くはない。一年の時は体も痩せてて筋肉もなく、レギュラーには程遠い存在だった。一年生の冬休みに同じクラスの高橋君という彼氏が出来て、理由はまったく謎だがその頃からどんどん体格が良くなってきて、プレーにも安定感が出てきて、いまやすっかり守備の要へと成長した。後世に伝わるであろう我がフットサル部の七不思議の一つといわれている。

まあ、やることやってくれば、なにも文句はないけどね。

それにしても、

「織絵うらやましいなあ……彼氏いてさあ」

わたしもつい、フサエみたいなことをぼやいてしまう。

「そう？ あたしはもう、しばらくいいや。男なんか」

「え？ え？ 久樹、彼氏いたの？ いつ？」

フットサルが生涯唯一の恋人だと思つていたのに。

「中学の頃にね。好奇心からちよつと付き合つてみた。おれとフットサルどっちが大事なんだ、なんていうから、面倒くさくて別れち

やった」

「……そうなんだ。でもそれって女のほうの台詞だね。あたしと仕事とどっちが大切なのよって。久樹がガサツな性格だから、彼氏が女っぽくなっちゃうんだよ」

「うるさいな」

「景子もいたのかなあ。モテそうな顔だしなあ」

「中学の時にいたらしいよ」

「ええ？ そうなんだ。なんかショック……三人の中ではわたしだけか、彼氏いない歴イコール年齢って」

「いなきやいないで別に構わない、と思っていただけ、いざこうして取り残されてみると、なんだか自分が惨めに思えてくる。」

「まあ、そのうちにさ、素敵な王子様があらわれるって。……などと話してたら、ほら、さっそきたよ、王子が」

後ろから山野裕子が歩いてきた。疲れきった、気の抜けた表情で、頭はフラフラとしていて、目はうつろ。

「よっ、王子様！」

という久樹の呼びかけに、まるで夢の世界にいられたかのような彼女の顔が一瞬にして現に戻ってきた。

「久樹先輩、その王子っていうの、やめてくださいよ！」

山野裕子は一年生、女子フットサル部の部員だ。髪の毛が、男子のスポーツ刈り並みに短い。顔立ちは結構整っているんだけど。性格はともかくとして、ぱつと見が美少年ぽいので、付いたあだ名が王子。

「じゃ、その男みたいな髪型やめなよ。この角刈り王子が。あんたがヘディングするとボールが全部破裂しちゃうんだよ」

「破裂するわけないでしょう！ 髪の毛くらいで。それに、男みたいではなく、これは女っぽい短髪なんです。短髪イコール男、スポーツ刈りイコール男、という考えが古いんですよ。古いのが好きならフットサルなんかやめて蹴鞠でもやってりゃいいんです、中大兄皇子みたいなカッコして。シガニーウィバーの坊主頭、最高にセク

シーじゃないですか。神取忍だって素敵じゃないですか。だからこれは女っぽい短髪なんです。あたしほど女っぽい女、世の中くまなく探したって、そうはいませんよ。久樹先輩、分かりましたか？」

そう一気に喋りきると、ぜえはあと呼吸整えている。

「そんなんで息切らしてたら、フットサルどこじゃないだろ。素敵なシガニーの魅力も伝わんないよ」

「そ、そんな程度で息切らしているのではなくて、これほどの息切れをさせるほどに、せ、先輩があたしの純真な心を追い詰めているんです！」

「分かった分かった。ごめんごめん。ジャージ姿でトイレに入ると女子が悲鳴あげるのも、裕子のエレガントな輝きを見抜けない女子どもが悪い」

「分かりやいいんです。でもなんか引つかかる台詞だな」

久樹、わたしの耳に口を寄せて、ぼそりと、

「ね、裕子からかうと面白いだろ」

「本当だ……」

わたしと久樹、どちらからともなく大きな声をあげて笑い出していた。

裕子、自分でいうほど女っぽくもないのに。授業中に居眠りを注意されて、「だったら眠くならない授業やれや！」と先生を怒鳴りつけたという話、有名だ。

「なんか、すげー失礼なんすけど先輩たち」

裕子、ブスツとした表情。

「ごめん裕子」わたしは謝り、真顔に戻ると、「それで、今日の補習はどうだったの？」

「あ、大丈夫です。なんとかかなりそうです。今日は休んじやうとでもすみませんでした。明日からはちゃんと出ますから」

「んならいいんだけどさ」

と久樹。

「そのうちレギュラーになったとして、それで赤点取ったからしば

らく部活休みますじゃ困るんだからね、そうならないように、勉強もしつかりやること！」

「はい！ 頑張ります！」

久樹の言葉にわたしは堪らず、ぷーっと吹き出してしまった。

「おい…… 木村君、木村部長、君が笑っていいところじゃないと思うんだがね」

久樹、わたしのほっぺをつんつんとつついてくる。

「社長、わたしは分をわきまえた発言しかしてませんから」

などと二人で冗談をいつていると、突然、「ぎゃっ」という鋭い悲鳴が。

佐治ヶ江優が走り寄ってきて、わたしの背中に隠れた。

「ちよっと、どうしたの、サジ？」

「あ、あれっ」

わたしの肩越しに、前方を指差した。

おばあちゃんが犬を散歩させている。マルチーズみたいな、小さな茶色い犬だ。頭に赤いリボン、よちよち歩いていて可愛い。

「あれがどうかしたの？」

「あ、あたし、犬っ、犬が、苦手なんです！」

「でも小さな犬じゃない」

おばあちゃん、犬と一緒に真っ直ぐこちらへ歩いてくる。

「うわあ」

佐治ヶ江は泣きそうな顔で悲鳴を上げると、学校へ戻るように、走って逃げていった。

みんな、その姿を見て大笑い。

「ほんと可愛いな、あいつは」

「一番の体力なしがさあ、なんだ、ちゃんと走れるんじゃない」

「ガチガチで柔軟もろくに出来ないくせに、抱きしめるとふにゃっ
つとして凄く柔らかいんだよな」

「いつ抱きしめたんだよ。フサエ、あんた、そっちのほうの趣味があつたとは」

「久樹、いい後継者がいて良かったね」

「本当。うちの部の次期マスコットはサジで決定だね、久樹」

みんなの視線を浴びて久樹は、

「そうそう、これであたしも一安心、っておい！ 後継者もなにも、そもそもあたしはマスコットじゃないよ！」

「出た、久樹のノリツツコミ！」

でも、アクシデントとはいえあんな大騒ぎをする佐治ヶ江はじめて見た。いままで地味というか、ちよつと暗いというか、部員たちの輪に溶け込めていないところがあつたから、晶並みにものごとに動じないクールな性格なのかなと思っていたけどあんな感じに取り乱したりすることもあるんだな。もつとみんなと打ち解けて、もつと澁刺としたプレーが出来るようになってくればいいんだけどな。

3

「だからね、亜由美、あたしがいいたいのは、茂美と仲良くするなつてことじゃなくて、茂美とはこれまで以上に仲良くなって他のみんなとも仲良くなるうねつてこと」

幼稚園の先生みたいなこといわせるなよ。

「分かつてますけどお。きつかけも特にないし。それにあたしだけそうなつて茂美を残したら、かわいそうじゃないですかー」

「なんで茂美を残すのよ」

「残りません？」

どうだろう。

真砂茂美、黙々と真面目に練習している姿は好感が持てる。しかし黙々の度合いがあまりに酷く、ほとんど口を開くことがない。大親友の篠亜由美に対してさえた。そもそも大親友もなにも、亜由美が一人で親友と主張しているだけで、茂美本人の口から聞いたことはないのだけだ。

「残るかも」

「でしょ」

「でも、茂美なら別に悲しまないんじゃない？ 一人になったって……あ、もちろん仲間外れなんかにしないよ。そうじゃなくて、茂美はそういうこと気にしなさそうなキャラに思えるっていつてるだけ」

「あたしが一人どつかいっちゃったらメチャクチャ悲しむと思うなあ。茂美の心は誰よりオトメですから」

「オトメかよ。ねえ、茂美ってなんであんな無口なの？ 練習の時も全然声出さないし。最初は注意してたけど、なんか事情というか、体質というか、あるのかなと思って」

「なにもないですよ。心の中では、誰よりも熱い雄たけびをあげているんですよ」

「チームの雰囲気ってのもあるんだし、声出して欲しいんだけどねえ」

「先輩、あたしの前、茂美だったけど、やりにくかったでしょう？」

「そりゃ、ね。どちらかといえば、一年生からいろいろ意見して欲しい面談なのに、一方的にあたしが喋るだけになっちゃったよ。相槌もないから、まあやりにくいなのなんの」

いまなにをしているのかって？

一年生を一人一人部屋に呼び、面談をしているのだ。部の現状に不満はないか、わたしのやり方に問題はないか、二年生たちはどうか、などあらかじめ用意しておいて貰った意見を聞いていく。そして、それについて、わたしと一対一で話し合う。

部長就任後一ヶ月くらいのタイミングで行う、昔よりの伝統行事だ。といっても、まだ同好会時代から合わせて六年の、さしたる歴史もない部だけだね。

篠亜由美が退出し、次の部員が入ってくる。

まん丸い顔で、髪の毛は頭の形がはっきり分かるようなぴっちり張り付いたショート。そして体つきも丸っこいものだから、第一印象はとにかく「丸い」の一言。武田晶だ。見た目とは裏腹に、驚

くほど動作が素早く、体も柔らかい。小学生の頃に空手とハンドボールをやっていたという、ちょっと異色の経歴の持ち主だ。

面談に入る。予想はしていたけど、特に不満もなにもないのと。自分以外、一年どころか二年にも本職ゴレイロがいないため、レギュラーの座は安泰なわけだし当然といえば当然か。

ただ、控えがいないのも相当なプレッシャーを感じるそうで、可能ならばもう一人ゴレイロ専門がいると助かる、とのこと。そのほうがやる気も出るし、と。

確かにゴレイロは二人以上いたほうがいいのだけど、でも、部員が十人ちよつとだから現状では難しいところだ。少し前までは、小島先輩と晶との二人体制だったんだけど。

とりあえずのところ、わたしと景子が、晶に教えて貰いながらゴレイロの練習をしている。紅白戦も片方は晶で、もう片方はわたしか景子のどちらかがやる。二人必要というのは、いざという時の控えという意味もあるが、みんな疲労で動けないがどうしても点は欲しいという時に備えてという意味もある。晶はFPとしてもそこそこ優秀だから。

と、ある意味では控えが二人もいる状態といえるが、やはり、メンバー表にゴレイロが自分一人だけというのがどうにも不安なのだろう。

「でも正式に二人体制にしたら、もう一人の子、自分が劣って見えて面白くないかもね」

「そんなこと。自分、そんなたいしたことないですよ」

「またまた謙遜しちゃって。晶ほど俊敏に動けるのなんていないよ。見た目から信じられない……あ、ごめん、その、見た目って、そういう意味じゃ……」

まさにそういう意味でいってしまったのだが、女の子に対して面と向かっていうものじゃない。

「いいですよ。実際、皮下脂肪かなりありますからね。小学生の頃のアダ名、ダンゴムシでしたから」

「うわ、それ酷いな。こんな可愛いのに」

例えるにしてもジャンガリアンハムスターとか冬のススメとか、もっと可愛いのがあるだろう。いや、それも失礼か。

「別に可愛くなんてなりたくもないですけどね」

「あたしも小学生の頃、ゴリラなんて呼ばれたことあったよ」

「そうですか」

嘘でしょ、とか、信じらんないとかいえんのか！ ダンゴムシつてのをフォローしてあげてんだから。

「そういえばさ、ゴレイロっていつてるけど、女子の場合ゴレイラっていうんだってね」

昨日日本屋で、フットサル雑誌立ち読みしたら、そんなこと書いてあった。だから、部員みんな間違っていたのだ。

「どっちだっていいんですよ。どっちも俗称であって、日本の公式ルールではサッカーと同じでゴールキーパーなんですから」

「え、そうだったんだ！ 全然知らなかった。あたし、部長のくせにダメだな」

だから、ゴレイロなのに略がGKなのか。

「関係ないですよ。細かい名前知ってて強くなるわけじゃないし」
試合の時以外は、ほんとクールだな、こいつ。

また晶、変な顔してる……

ジャガイモみたいにコロコロ丸っこくて可愛い顔の晶だが、時折、目を細めて唇をタコみたいに突き出していることがある。疲れているとそうなるのか、怒っているとなのか、考えることをしているとなのか、発生条件がさっぱり分からない。聞くのも失礼かなと誰もが思っているようで、謎のまま、だったのだがしかし、

「ね、なんでそんなタコみたいな口してんの？」

二人きりなのいいことに、ついに聞いてしまった。

「し、してませんよ、そんな変な顔！」

リンゴのようなほっぺをさらに真っ赤にして怒り出してしまった。やっぱり自分では気づいていなかったみたい。

「失礼します」

佐治ケ江優が入ってくる。

ピョコ、と深く頭を下げる。長くはないがふわふわとした前髪が、なんだか別の生き物のように、あとから動いて佐治ケ江の顔を覆い隠す。落ち着きのない、おどおどした表情を浮かべている。いつものことなので、別に気にしない。

「そこ、座って」

「はい」

佐治ケ江は椅子に腰を降ろし、机を挟んでわたしと向き合う。向き合うといっても、佐治ケ江は下を向いてモジモジしている。

「じゃ、始めようか」

「はい……」

「人と話す時は、相手のほうを見る！」

「は、はいっ、すみませんっ！」

悲鳴のような裏返った声をあげると、膝とおでこがゴツツンしそうなくらい頭を下げ、それからおもむろに頭を上げて、おずおずとわたしのほうを見る。少し下向き加減で上目遣い、しかも泣きそうな表情。なんだか、わたしがいじめているみたいじゃないかよ。

「ええと、なんか考えといてっていつてあったよね。どう？」

「あの……いろいろ考えてはみましたけど、なにもないです」

「本当に？」

「はい」

「部のことじゃなく、わたし個人への文句でもいいんだよ。あと、自分はこうしたいのについて要望でもいいんだよ。トレーニングきつとか。試合に使えるよ、とかそんなことでもいいんだよ。単なる愚痴でもいいんだよ。……なにもない？」

佐治ケ江はしばらく考え込むような表情を見せたが、やがて、

「あたし、いまのままでいいんです。ボール蹴ってるだけで、楽しいんです」

なら家で一人でボール蹴ってるよ、と一瞬思ったが、彼女は予想外の言葉を続けた。

「……誰も、殴らないし……いじめてこないし。みんな、いい人たちばかりで、そんな中で、あたし、好きなこと、やってられて、本当にいいのになって……」

相変わらずうつむいたままの佐治ケ江。体が小さく震えていた。「前に、いじめられてたの？」

佐治ケ江は小さく頷いた。

悪いかなと思いつつも、どういふことをされてきたのか、つい聞いてしまった。辛い過去があるのなら聞いてあげれば楽になるかなという気持ちが半分と、残り半分は単なる好奇心から。時折出る「やけえ」などの広島弁に興味を持っていたというのもある。

つかえつつかえ話す佐治ケ江の話を要約すると、次のような感じだ。

なんでも、小学校低学年の頃に、些細なことがきっかけでいじめられるようになり、それは中学二年まで続いた。いじめられなくなったわけではなく、逃げるように他の中学へ転校したのだ。それでも悪夢を見たり、吐き気がおさまらない。街でいじめっこにばったり出くわし、殴られたことから、その症状は余計に酷くなった。パニック障害になり、頻繁に過呼吸による呼吸困難を起こすようになった。いきなり気を失って倒れてしまったことも、何度もあるらしい。

母親の提案により、広島から祖母のいる千葉へと引っ越すことになった。それが中二の夏休みのこと。父親だけは、仕事のため広島に残っている。

どんないじめを受けたのか、聞いているうちに気分が悪くなってきた。

生ゴミ容器の、腐った生ゴミの中に顔を押し込められたり、椅子に画鋲置かれたり、

教科書に落書きされたり、破かれたり、

強引に下剤飲まされたうえに、トイレにいかれないよう押さえつけられたり、

生きたゴキブリを吞まされそうになったり、

髪の毛や制服をハサミで切られたり、

柱に縛りつけられて大型犬をけしかけられたり……

ちよつと酷過ぎるよ、それは。

小さな犬でもダメって、きっとそのせいなのだろうな。この前、みんなで笑ってしまつて悪いことしちゃったな。

「悪いのは絶対にそのいじめっ子たちだと思うけど、でも、お父さんお母さんはなにしてたのよ？ サジがいじめられているつてのに」「二人とも、わたしのために一生懸命色々としてくれたんです。とても感謝してます」

「そうか……」

わたしは、それ以上はなにもいわなかった。

いじめなんて、ゲーム感覚で発生する場合もあれば、絶対的な要因がある場合だってあるだろうし、頑張ればいじめられなくなるわけでもない。先生や両親の対応が非のうちどころのない素晴らしいものだったとしても、それでも子供がいじめがおさまる保証はないわたしにいけないだけで、もしかしたら佐治ヶ江のほうが悪いのかも知れない。ここまで話を聞いてしまうと、後は佐治ヶ江の心の中にかなり踏み込んでいかなければならない。わたしはそこまでの責任を取れないし、根掘り葉掘り聞いてもしかたない。なんのための面談なのだからなくなる。だから聞くのをやめた。

「でも、それは過ぎたことですよ。ここには、いじめっ子もいないんだし、もつとき、みんなの中に入ってきたよ。一年同士、バカ騒ぎしたりしなよ。サジが飛び込んできたら、みんな大歓迎だよ」

「友達、いたことないんで、どうしたらいいのかわからない」

「小さな頃って、なにやって遊んでたの？」

「サッカーボールがあつたので、リフティングとか、ドリブルとか、壁打ちとか」

「ずっと?」

「はい。……家にいても誰もいなかったの」

「毎日?」

「はい」

「うわあ、そりゃ上手になるわけだよ」

妙にテクニクがあると思ったら、そういうことだったのか。

「別に、上手じゃありません。ただ好きだからやっているだけで」

「いやあ、久樹も舌巻いてるよ。技術だけならサジには勝てないって」

「そんなことないです。浜虫先輩のほうがずっと凄いです」

どこまでも謙遜するなあ。山野裕子だったら褒められたら即座に「才能つす」なんて自慢気な顔するだろうに。

「まあ、いざ勝負になったら絶対負けない、なんていつているけどね」

「当然です。あたしなんか浜虫先輩に勝てるはずありません」

「サジ、なんであんな個人技は凄いものを持っているのに、人と向き合くとダメなの? いくらずっと一人でやってたからって、中二で千葉に越してきて、フットサル部だかサッカー部だか、入ってたんでしょ? 試合したりしなかったの?」

「……プレーが消極的だって、叱られてばかりで、一度も試合に出してもらったことはありません。練習でも、蹴るだけならなんとかなるんですが、奪い合いとか勝負っぽくなると、なんだか、緊張してしまつて……。呼吸が乱れて、胸が苦しくなつて……」

「残念ながら、いまもそこは変わっていないよね。消極的で、すぐに萎縮しちゃつて」

「……エレベーターに乗つてて扉閉まりかけてる時、乗ろうと走ってくる人に気づいて、開くボタン押してあげようと慌てて間違つて閉じてしまったこと、ありませんか?」

「なによ、いきなり。何回か、やったことある。まあ、あたしこの辺が地元で遠くにも出かけないから、エレベーター自体にあまり乗

ったことないけど」

「あたし、必ずそれやっちゃうんです。開けようとしているのに閉じてくる扉に、わけが分からなくなつて、階数指定のボタンをガチャガチャ全部押してしまつたこともあります。だから最近、十階でも二十階でもエレベーターは絶対に使わないようにしているんです」

混雑してるエレベーターだったらヒンシュクものだったろうな。

「フットサルと、根本原因、同じだろうね。あのねサジ、全部、精神的な問題なんだよ。でもさ、さっきもいったけど、誰もいじめてくるようなのいないでしょ。のびのびとさ、楽しんでやろうよ」

「いまでも十分楽しいです。ボール蹴つてられれば、面白いんです」
こりゃ、根が深そうだ……

せつかく技術があるのにもつたいない。

最後の一人、竹藤琴美が入ってきた。

いつになく暗い表情。佐治ヶ江より酷いかも。

なんだかそわそわしている。様子がおかしいなと思つてみると、

不意に彼女は手にしていたものを机の上に置いた。

茶封筒。

退部願ひ、と小さな字で書いてある。

「なに……これは」

双方無言の状態が続いた。しばらくして、ようやく竹藤は重い沈黙を破つた。

「すみません」

微かに聞こえるような小さな声で、そう呟いた。

「なんで……」

わたしの頭の中でなんとも名づけ難い感情や考えがグルグルと回り、意識的にか無意識にか自分でも分からぬままようやく出した声がその一言だつた。

「向いてなかつたんです」

「でも、頑張っていたじゃない。竹藤、一番頑張っていたよ」

「辛いだけでした」

「最初は誰だっけそうでしょ」

「だから、向いてないんですよ。きつと三年間、この辛さに耐えるだけで……報われない」

「そんなの、やり抜いてみなきゃ分かんないでしょ！」

「ダメだったら……もし、最後まで辛いだけだったら、先輩、責任とってくれるんですか？」

「それは……」

わたしは言葉を返すことが出来なかった。

「もつと向いている部があると思うんです。もう、写真部の小野先輩と英会話部の安田先輩に誘われています。それぞれ、体験入部して、どちらかに転部しようと思っています」

深呼吸。

だんだんと、冷静になってきた。と同時に、だんだんと腹が立ってきた。

「それじゃ、しょうがないよね。まあ、他の部で頑張っただけ」

ここで頑張り切ることが出来なかつたくせにどこで頑張れるものか。

「はい。顧問の北岡先生にも、退部願ひ渡してきます。では、これまでご指導ありがとうございました」

竹藤は頭を下げた。

こちらこそ。……その言葉が出なかった。思ってもいない言葉をとりにえず口に出すことが、これほど難しいとは。はいだが、へえだか、自分でもよく分からない言葉を返す。それが彼女への最後の言葉になった。

静かにドアが閉まった。

「なんだよ……」

あの、根性なし。

時間を無駄にしたくないのなら、金子先輩の時にとっとと退部し

ときやよかったじゃないかよ。わたしが部長やっているのが、そんなに気に入くないのか。

ああ、もうムシャクシャすんな！

わたしは足元のカラーコーンを手に取ると、思い切り床に叩き付けた。

なんだ、このやり場のない怒り。

たかが一人退部しただけだ。

やる気のない奴が一人いなくなったただけだ。

なんてことないはずなのに、

何故こんなに、もやもやとした気持ちになるのだろう。

4

放課後。

今日もいつものように、女子フットサル部は練習メニューをこなしている。まず、学校の周囲をランニング。学校に戻ると、体育館の一角でボールを使用した練習だ。

久しぶりに、顧問の北岡先生が姿を見せた。

北岡先生はまだ五十前らしいのだが、すでに頭が真っ白髪で、少し腰が曲がっていることから、生徒らには陰でオジイと呼ばれている。

いつも一人でテレテレとだらしなく歩いてくるのだが、今日は違っていた。いや、テレテレだらしなくというのは普段通りなのだけでなく、一人ではなかった。後ろから、見たことのない女の子がついてきている。

みんな体を動かすことをやめて、そちらを見ている。

「誰だろ」

夏木フサエが心に浮かんだ疑問符をそのまま言葉にする。

女の子は制服姿。エンジ色っぽいセーラー服にスカート。この学校のじゃない。佐原南の女子の夏服は、白いブラウス、グレーのベストにグレーのスカートだから。

非常に体が細く、小さく、顔も可愛らしい。系統がまったく違うけど景子に匹敵するくらい可愛いかも。まだ一年生だろうか。中学生でも通じそうなくらい幼く見える顔立ち。

少し脱色しているのか、うっすら茶色っぽい髪の毛。ゆるく波打って、肩にかかっている。

オジイと見知らぬ女の子の二人は、わたしたちフットサル部員のところにやってきて、足をとめた。

「えー」

オジイが口を開く。喋り方まで年寄りくさい。離れているのに、声に乗って加齢臭が届いてきそうだ。

「新入部員を紹介する」

周囲、ざわつく。

え……

突然のことに、わたしはなにを考えればいいのかすら、考えられず、黙って立っているしかなかった。

オジイにうながされ、女の子はぺこりとおじぎをした。

「衣笠春奈です」

高くて、子供っぽい声。

「父の転勤の都合で、昨日、静岡の学校から転校してきたばかりです。フットサルのルールも全然知らない初心者ですけど、みなさん、よろしく願います」

字にすると、すらすらよどみなく喋っている感じだけでも、実際には、なんかまどろっこしい。ブリッコって死語だと思うけど、それ以外にじっくりくる言葉がない。

部員たちの拍手が彼女、衣笠春奈を包んだ。

わたしだけ、拍手を送ることをせずに、ただ突っ立っていた。取り残されていた。胸の奥からこみ上げてくる、なんだか分からない感覚に困惑していたから。

なんだ、この気持ち……

だんだんと頭が落ち着いてきた。自分の気持ちが分かってきた。

「面白くない」のだ。

「北岡先生」

さすがに面と向かってオジイとは呼べない。

「あの、説明して欲しいんですけど、これは、どういうことですか？」

「ああ、なにがかな」

このもったりした口調が、こういう時には一段と腹立たしい。

「わたし、なにも聞いてないんですが」

「なにがかな」

「ですから、新入部員のことですよ。急にこられても」

「昨日こっちに転校してきてね」

「それは聞きました！」

「で、今日、入部を決めたから。だからだよ」

「だからだよじゃないでしょう！」わたしは湧き上がる怒りを懸命に抑え、オジイの耳元へ口を近づけ、「そうだとすると、部長のわたしがみんなと一緒にいきなり知るってどういうことですか！直前だとしても、こんなふうには耳打ちなり、すればいいじゃないですか！」

部長がいきなりのことに啞然としているなか、本人自己紹介、なんだかどつくに順応している部員たちは拍手で迎え……そんなみっともない話があるか。

「どうしてだね」

「だってわたし、部長ですよ！」

「いわれなくても知っているよ」

ダメだ。

かみ合わない。それはいつものことだけど、事態が事態だけに腹立たしいことこのうえない。別にわたしだって、個人的な自尊心のためだけに、こうまで怒っているわけじゃない。と思う……多分。それにしても。

鈍すぎるよ。

この先生。

睨みつけるわたしの視線などどこ吹く風、オジイは汚い手をわたしの肩の上に置き、

「こちらが部長の田村さん」

「木村です！」

わたしはオジイの手を払った。

誰だよタムラって！ なんなんだ、このジジイは！

フットサル部しか担当してないんだから、部長の名前くらい覚えとけよ。

「木村部長、これからスエナガクご指導よろしくお願いいたしまあす」

衣笠春奈がまた、ぺこりと頭を下げた。

「あ、ええと……こ、こちらこそ、よろしく」

わたしはいったいどんな表情で、彼女のあどけない笑顔を見ていたのだろう。

5

ガリガリと、鉛筆で紙に書き殴る音と、時計のカチカチいう音だけが静かな部屋に響いている。

ボロ家の二階にある、わたしの部屋。

六畳間の和室。あまり物のない質素な部屋。畳の上にはいくつかの筋トレ器具が無造作に置かれている。

わたしは机に向かい、数学の公式を、ノートに書き込んでいる。ガリガリと、とにかくひたすらに書き込んでいる。

どんな教科であれ、基本、手を動かしまくって書きまくるのがわたしの勉強方法。頭脳の出来が残念ながらあまりよろしくないため、勉強の仕方自体がよくわからない。だから、体を動かし、体で覚えるのだ。

公式なんかひたすら書いてないで応用問題の一つでも解けよ、と思うこともある。この不器用さ、自分でも嫌になる。そのうち、景

子に勉強の方法を教えてもらおう。

先日発生したカマバロン事件、クラスのみんなが期待する通り、わたしは先生からの集中砲火を浴びることになった。

指されると絶対に恥かかされる。

同じ答えられないにしても、サル並みの知能で答えられないのと、ヒトとして答えられないのでは、恥ずかしさのレベルが違う。だから爆撃ダメージを少しでも減らすべく、こうして数学の勉強をしているのだ。

他の教科の勉強だってしなきゃならないのに。

カマバロンめ……

そしてミットの奴め。

いかんいかん、他人のせいにしてもなにもはじまらない。

しかしわたしって意外によく勉強しているよな。中学の頃からは考えつかない。無理してレベルの高い高校に入ってしまったて下手すりや留年なので、やるしかないんだけど。

フットサル頑張ってご飯が食べられるものでもないので、勉強は勉強で頑張らないといけないのである。……などと、部員のみんなに聞かれたら絶対に減滅されるだろうな。もう部員じゃないけど竹藤琴美には特に。

将来なになりたいという夢があるわけでもないが、漠然とした将来への不安は人並み以上にしっかりとあり、なのでこうして闇雲に勉強しているわけだけど　時折、勉強していること自体がどうしようもなく虚しく思えてくる時がある。不安から逃れるためにやっていることなのに逆に不安になってどうすんだと思うけど、どうしようもない。

勉強だけしていればいいのか。

そこそこの大学に入れさえすればいいのか。

親に迷惑かけないような、そこそこの会社に就職さえすればいいのか。

そこそこの相手のとこに嫁にいきさえすればいいのか。

考えてもしようがないことなのに、すぐ考えてしまう。

なんか頭がゴチャゴチャしてきた。

勉強中断。

カマバロンなんかのために、貴重な人生の残り時間を使ってくれるか！

フットサル部の練習メニューでも考えよう。ずっと有意義だ。

数学の参考書を横にどかし、部長ノートを取り出し、開く。

しかしあのブリッコ転校生……

衣笠春奈とかいったな。

今日入部したばかりで、運動部の経験もないっていうから、体が全然動かないのは分かるけど……にしてもちよつと、体力がなさすぎだったなあ。そもそも体力なんかより、あんなフニャフニャした仕草や言葉遣いじゃあ、運動部なんか無理だよ。「おっねがいしまあす」じゃないだろ、子供じゃないんだから。

だいたい、経験まったくないどころか見たこともなかったくせに、昨日、ちよつと知った程度で面白そうなんて簡単に考えちゃってさ。春江先輩に名前が似ているのも、なんか氣にくわないよな。

先輩と正反対の、根性まったくなさそうな顔して。

「あたし……嫌な奴だ……」

そう呟くと、がばつと机に伏せた。

本当、最低だ。わたしだって、中学三年になるまで、フットサルなんて名前すら知らなかったじゃないか。

たかが一人の後輩に参っててどうするんだ。来年になれば、何人も新入部員が入ってくるかも知れないというのに。

春江先輩ならきつと、「腕の見せどころじゃん」と張り切るに違いない。

よし。頑張つて、鍛え、育ててみるか。態度だって、注意すればいいだけのこと。せつかくフットサル部に入ってくれたんだから、大切にしないと。

とはいえ彼女はまったくの初心者、そして中学の時は文化部だっ

たので体力もない。どんな練習をさせればいいんだろう。

わたしが入部した時って、どうだったろうか。現在の一年たち、四月五月はどうだったろうか。

記憶の糸をたぐりながら、彼女用の練習メニュー案を紙に書いては破り、気づくともう日付は明日になろうとしていた。

久樹に聞けばいいや。

お風呂に入り、寝た。

6

「久樹、張ってて！ あとは戻って、ピヴォ当てで！」

「分かった！」

わたしの指示に反応して、陣形が変化する。

ピヴォの久樹は相手ゴールの近くに残ったまま。アラの佐治ケ江と景子は、少し下がり目になり、ベッキの織絵を中心に浅いVの字を描くような並びになる。

ポジションについては、なんとなく分かるかも知れないけど、ピヴォはサッカーでいうフォワードのような役割。アラは語弊もあるかも知れないがミッドフィルダーのような役割で、左右両翼がいるベッキはディフェンダーだ。

ピヴォ当てというのは、まずピヴォにボールを預け、そこから展開していく戦術のこと。ピヴォはしっかりボールをキープし、攻め上がるアラやベッキにパスを出したり、ときには反転してシュートを狙ったり、ドリブルで仕掛けたりする。

景子が華奢ながらも巧みな体の入れ方で、ボールを相手から奪い取った。姿勢を崩しながらも、少し後方に戻すように、織絵へとパスを送る。すぐさま織絵は景子がくるであろうはずの位置へとパスいわゆるワンツ、ずっと練習でやってきた形だ。そして景子は素早く、前線で一人待ち構えている久樹へとボールを送る。

「サジ、上がって！」

佐治ケ江、わたしの叫び声にどきっとしたように肩をすくめた。

慌てて、前方へと走り出す。

久樹に相手のベツキが迫り、ボールを奪おうとする。しかし久樹は背中や腕を上手に利用して、簡単にはボールの所有権を渡さない。そしてボールは、駆け上がったってきた佐治ケ江へ渡った。

いいタイミングだ！

久樹の柔らかいパスを受けた佐治ケ江、

抜け出した！

相手ゴールとの間にはゴレイロがいるだけだ。

「サジ、シュート！」

しかし佐治ケ江は、突進してくるゴレイロに焦ったのか、後ろを向くと、最後列の織絵へボールを戻してしまった。

先制点の大チャンスが……

リフティングがどんなに上手か知らないけど、ほんとに実戦では使えない奴だな。メンタル鍛えてやろうと、せっかく出してあげたのに。体力もあまりないから、もうへたばってきているし。

「王子、サジと交代するよ！」

「了解ス！」

王子こと山野裕子はわたしのすぐ隣で、男子のようなスポーツ刈りを左右の手でなで上げた。彼女なりの気合の入れ方らしい。王子、技術はあまりないけど体力があるし、とにかく負けん気が強いから、頼もしい。

交代ゾーンから王子はピッチの中へ。

そして佐治ケ江はピッチの外へ。わたしが立っているすぐそばの床に、足を投げ出すようにして座った。苦しそうに、大きく呼吸している。

「なにがダメだったのか、どうすればいいのか、レポート書いて提出しな」

わたしは厳しくいう。

「はい……」

ピッチ上では、王子が野獣のような雄叫びをあげて走り回ってい

る。

バカ、せめてフォーメーションくらい、意識してくれよ。

「王……」

わたしが思わず注意しようとした時　百パーセント偶然と思うが　王子が相手二人をドリブルでかわし、久樹にパツと見ではあるが見事なパスが通った。久樹、それを受けた瞬間に、振り向いてのシュートを放っていた。

ゴール右上隅、これ以上ない素晴らしい位置への弾丸シュート、ゴールに突き刺さった！　と思つたら、なんと相手のゴレイロ、反応していた、左手一本で弾いていた。

佐原南の選手たち、みな落胆の声をあげた。

あれを止めるか。さすが、去年の関サル千葉県決勝大会準優勝高校。

我々はいま、久しぶりに他校への遠征にきている。わたしが部長になつてからは、初めてだ。目的は、対茂原藤ヶ谷戦を想定しての練習試合のためだ。

対戦相手校は、千葉県立我孫子東第三高等学校。男女ともに、優れたチームワークとしつかりした個人技で知られる強豪校だ。フィジカルの強さも半端ではないので、茂原藤ヶ谷対策に良いかなと思つたのだ。まさか試合を受けてくれるとは思わなかつたけど。本物と違って、ラフプレーでうちの選手たちが壊されることもないだろうし有り難い。とはいえ、こっちのほうで茂原藤ヶ谷より格段に強いだろうけど。

試合は、二十分を三セット、最後に十分を一セットで組んでいる。現在、一セット目。開始から九分が経過している。

まだスコアは動いていない。我々が意外にやれるのか、まだ相手が実力を出していないのかは分からない。

我孫子東は、赤いユニフォーム。確か茂原藤ヶ谷も同じ色のはず、丁度いい。

わたしたち佐原南は全身青いユニフォームだ。胸には長体で「S

AWARAMINAMI」の文字、背中には大きく番号が書いてある。

普段、練習の時はトレーニングウェアを着ているので、こうしてユニフォーム姿になると身も心も引き締まるものがある。

いまピッチでプレーしている佐原南の選手は、浜虫久樹、畔木景子、楽山織絵、山野裕子、武田晶の五人。

わたしはピッチの外、サイドライン際に立って、選手たちに指示を送っている。

「いけえ、そこですううう！　そうそう、やった、ナイスカット！　うまいうまい、織絵先輩最っ高！」

いつとくけど、これはわたしの声ではない。そもそもこれ、指示じゃなくて単なる声援だし。叫び声の主は、新入部員の衣笠春奈だ。試合開始してからというものの、いや正確には電車移動中からかな、ひつきりなしに腕を振り回しては奇声のような声を張り上げている。運動部なわけだし、大きな声を出すのは悪いことではないので注意はしてないけど、ほんと無駄にやかましいな。しかも器用なことに、ぎゃーぎゃー絶叫しながらも決してガサツにはならず、ブリッコキヤラは壊さない。昔のアイドルかよ。

「交代！」

今度はわたしの叫び声だ。

「景子、あたしと交代」

わたしは交代ゾーンに立った。戻ってくる景子。

「お疲れさん」

「まかせたよ、梨乃」

「分かってる」

パシッ、と擦れ違い様にタッチし、わたしたちは入れ替わった。

「木村先輩い、頑張ってくださいあい！」

いわれなくても頑張るっつーの。

だがしかし……

わたしの軽率なプレーからボールを奪われて、カウンターからあ

つけなく失点してしまったのだった。

第一セット終了の笛。

「先輩、ナイスファイトでしたあ。まだ第一セットが終わったばかり。これからこれから！」

「うるさいな！」

わたし、怒鳴ってた。

空気が変化した。みんな、わたしの様子がおかしいことに気づいたのだろう。

ごめん。すぐにそう謝ればいいのに。いえなかった。

「春奈、いいよ別に。どんどん声出して、盛り上げてこっ」

景子は笑って、春奈の肩をぽんと叩いた。

「はい！」

春奈の表情にも笑顔が戻る。

え……

それ、なんなの、

景子……

わたしの味方じゃ、なかったの？ 親友じゃなかったの？

いや、分かるよ、分かるけど。衣笠春奈のことをフォローしただけだって。

でも……。

心臓の音、聞こえる。どくどくと、うるさい。

「キャプテン、次のセット、どうするの？」

織絵がじれったそう。

「……あ、ええと……」

結局、第二セット、第三セット、わたしはなんらの確な指示を出すことが出来ず、一九で負けた。

ちなみに佐原南唯一の得点者は、山野裕子。

第三章 秋の祭り

1

今日は土曜日なので学校は休みだ。

だから部活は午前練習のみ。いまはその帰り道。浜虫久樹とわたしの二人、山林の通学路を麓目指してひたすらと下っている。

「え、いい子じゃん」

久樹の返事は早かった。

尋ねてみたのだ。

衣笠春奈のことをどう思っているか。

「練習物凄く頑張っているしさあ。まだまだてんで駄目だけど。でも好感もてるよね」

「まあ、そうだよな。頑張っているよね」

それは間違いのない事実。

「声出すしさあ」

「そうだね」

一番うるさいくらいかも知れない。

「分かった。梨乃、あれ気にしてるんでしょう。我孫子東との練習試合の時のこと」

凶星である。わたしは素直に頷いた。

「あたしね、久樹みたいに教え上手じゃないしさ、なんかこう、目の前にあるのに手が届かないもどかさっていうのかな」

ということだけにモヤモヤしているわけじゃないのだが、まあ、いつてみた。

「あたしも別に教え上手でもないけどな。ただ、教えるのも嫌じゃないというか、楽しいというか。学べるところもあるし」

「そう思えるというのがもう教え上手なんだよ」

「あと気が長いことかなあ」

「そう、そういうところも。久樹って試合中はすぐ切れるくせに、そ

れ以外でイライラしてるの見たことない」

自分に自信があるからなんだろうな。わたしと違って、たぶん久樹は自分のことが好きなんだと思う。人間の個性って能力、性格、体格、環境、経験、様々なもののバランスから成るものだと思うけど、久樹は自分の個性が好きなんだ。でも、わたしは……

「イライラしてるんだ。……春奈に」

ズバツときいてくるな。わたしはまた、ちょっとした沈黙のあと、はつきりと頷いた。

「ああいうタイプに、どう接していいのかが分からない。最初はオジがあんなふうに連れてくるからそれに憤慨してるんだ、って思おうとしてたんだけど、実はそうではなくて……その……問題は自分の中だけにあったわけで。そんな自分がとても嫌で……」

「くだらない。どう接するものにもないじゃんか。部長として、怠けてたら叱りやいいし、しっかりやったら褒めりやいいし、技術どうこうってところは、それじゃ、教え上手のあたしが監督してやるよ。それでいい？」

「そういう問題でも……」

「梨乃はね、多分共感してもらいたいただけだと思うんだ。……でもね、悪いけど今回のその問題に関しては、あたしは共感は出来ないな」

「そんなんじゃない……。でも、考えてみると、そうかも知れないな。あたしさ、部長になってから、まだ一ヶ月でしょ。春奈、初心者でしょ。だからさ、春奈がはじめてなんだよね、最初からってのが。王子やサジたちの面倒見たのも、金子先輩だからね。分かってはいるんだよ。この前もさあ、夜、家で『よし、やるぞ』って張り切って練習メニュー考えたんだ。そのあと、久樹たちにも考えてもらったけど。でもなかなか覚えてくれないし、基礎体力ないからすぐばてるし。しょうがないのは分かっているはずなのに、なんかイライラしてきちゃって、そんなところへ持ってきて、あの喋り方や物腰でしよう、やる気あんのかよって思っちゃって」

「あたしと梨乃ってさ、色気より食い気、勉強より運動ってタイプだよ。すっごい死語だけどキャピキャピしてるっていうの、そういうところがまったくなくて男っぽいというか。その点は似てるよね。でもさ、その真逆なのが運動部にいると、あたしは面白いなと思うんだけど、梨乃はそういうの嫌うほうなのかもね」

「そうかも」

「バカだな。そんなんじゃ疲れるって。女なんだから、女みたいなのが多いに決まってるじゃん。みんな王子みたいに『ウス!』なんてキャラだったらそれこそ不気味だろ。……それにさ、春奈って梨乃が考えているほど『それでもない』かもよ」

「どういうこと？」

「もうすこし様子見てみなってこと」

「なんかよく分からないけど、久樹がそう……うわっ!」

突然の和太鼓の低い音に、鼓膜がぶうんと震えて、二人して驚いて飛び上がってしまった。

すでに山道は終わり、古びた情緒のある町並みへと眺めは変わっている。小江戸などと呼ばれる佐原ならではの景色だ。

人が大勢集まって、祭りの準備をしている。祭り太鼓の練習をしている音だったようだ。そうだ、今日と明日はお祭りの日なんだっ

た。

「お、久樹ちゃん梨乃ちゃん!」

屋台の準備をしているオジさんが声をかけてきた。顔の半分がもじやもじやの髭に覆われて、体も大きいし、猿というより熊みたいな感じ。わたしたちがよく利用する本屋の店主で、たしかトクジさんという名前。祭りが大好きで、祭りの日には店を奥さんにまかせて、自分は弟さんのやつている屋台を手伝ったりするのだそう。今日はどうやら、リンゴ飴とチョコバナナの屋台のようだ。

あと一週間で九月も終わる。

でも、まだまだ蒸し暑く、まだまだセミのうるさい季節である。

全部わたしが悪かったんだと思う。

たぶん。いや、絶対。絶対全面的確実に、わたしが悪かった。

お父さんと喧嘩した。

先日、伯母さんがきて、お父さんに再婚の話を持ちかけたのだ。

その日は、勝手にすればって思っていたのだけど、翌日突然に何故だか許せなくなり、爆発してしまった。再婚というものが、なんだかとても汚らしいもののように思ってしまったのだ。まだ具体的な相手がいるわけじゃないのに、その女性が許せなくなり、そんな人と家庭を持つとうというお父さんのこともまた許せないと考えてしまったのだ。

喧嘩といっても、お互いにヒートアップしたわけではない。むしろ、お父さんは収縮させてくれようとしていたと思う。悪くもないのに謝ってくれようとしていた。だいたい、悪いも悪くないも、伯母さんがいきなり訪ねてきて、勝手に再婚の話をして帰っていっただけ。わたしが一方的に、なんでもないことをこじらせてしまっただけなのだ。

頭の中、真っ白になってしまって、最後のほう、よく覚えていない。確か、ちゃぶ台ひっくり返すわ、お父さんの足に蹴り入れてしまっわ、自分でも自分のこと最低な奴だなと思いながらも暴れていた気がする。

反抗期、というつもりはないのだけど、こういうこと、たまにやっってしまう。

それにしても、今回ののはひどすぎた。最近部活のことでイライラしていたから、というのもあるだろう。なんの弁解にもなっていないけど。

わたしって本当に嫌な奴だなあと思う。自分、大嫌いだ。

お母さんさえ生きていてくれていれば、少しは違っていたのかな。考えてもしかたないことを考えてしまっ。まあ、今回の問題が起きなかったことは確実だけだね。

提灯。

人の群れ。

浴衣。

夜店。

喧騒。

お囃子。

高木ミット。……ん？

「って、なんであんたがここにいるのよ」

小江戸は日も暮れ、すっかり祭りの場として盛り上がっていた。佐原は一応は観光地。でも今日は、地元住民のための小さな祭りの日。出店の間を、楽しむ気もなくせに冷やかしてふらふら歩いていたところ、水風船ヨーヨーで遊んでいる高木ミットと出くわした、というわけである。

「なんでもなにも、いちやおかしいかよ。どちらかというと、お前のほうが似合わないぞ、こういうところ」

むむ……確かに。

「似合うの似合わないのなんてどうでもいいでしょ。今日は加地原はどうしたのよ」

「なにその詰問調。山梨で溪流釣りだつてよ」

「ふうん。あんたらいつも一緒にいるわけじゃないんだ」

わたしとミットはお互い離れる理由も見つからず、とぼとぼと夜店の間を歩き続けた。水風船のばしゅばしゅいう音が鬱陶しい。だいたいそれって、幼児用のおもちゃだろ。

クラスメイトの須田康太と八木茜とすれ違った。手を繋いでいた。二人はクラス公認のカップルなのだ。祭りの夜店、恋人とデート。

いいなあ。羨ましい……

「お前さあ、そんなにデートしてみたいの？」

ミットが眉をしかめてわたしの顔を覗き込むように見ている。

「ちょ、ちょっとなにいつてんのよ」

「お前って、考えてることすぐ口にしちゃうのな、昔から」

「うるさいなあ」

好きでそうしているわけじゃない。

「そんな恋人欲しいの？」

笑っているような、ちょっと不機嫌そうな、なんだかよく分からない顔のミット。

「……いいでしょ別に。恋人同士が普通どんな会話してんのかなんて知らないけどさ、でもなんか、家の悩み、進路のこと、部活のこと、友達のこと……親にも親友にもいえないような悩みを相談しあえる関係っていいなって思うよ」

「恋人恋人いつてるけど、あいつら、そんな崇高なもんでもないぜ。そんなの、いつの時代の彼氏彼女だよ。ガキが見栄張って背伸びしてるだけだ」

「うん。まあ、確かにあんたのいう通りかも知れないけどさ。……つか、いたことないんだから知らんわ。漠然と懂れてちゃ悪いかボケ！」

「相変わらず言葉の汚えやつだな。で、なんだって？　なんか誰にもいえない悩みでもありそうな口ぶりだな。恋人に相談するつもりで話してみ」

「恋人じゃないでしょうが」

「だからつもりっていつてんだろが、バカだな。話すだけでも楽になれるかも知れないだろ。誰にもいわないからよ」

どいう理屈だよ。と思いつつもわたしは、

「……誰にもいうなよ……」

と念を押し、結局、喋り始めた。恋人がいたら聞いてもらっていたのにな、と思っていたことを。どんな内容なのかは、既に語った通りだ。親の再婚話のこと。部活での、春奈のこと、竹藤のこと。そして、景子とのこと。

話せば話すほど自分の中の変な部分、嫌な部分がどんどん出てき

て、それがとても辛かった。なんでこいつなんかに、こんなペラペラと正直に話してしまっているんだろう。

そして一通り話し終わると、

「よし。聞いた！」

それきりミットは黙ってしまった。

双方沈黙の数十秒。

「おい」

ミットの脇腹を肘で小突いた。

「なんかコメントしなさいよ。女の子が恥ずかしいこと洗いざらい打ち明けたんだから」

「うーむ。一週間待てや。なんか上手いことを返すつもりだったけど、おれバカだから言葉が出てこねえや」

「もう。変な奴だなあ」

「否定はしません」

ほんつとに変な奴だ。でも、なんだか、ほんのちよつとだけど、わたしの心はすっきりした気分になっていた。

4

なんか今日の高木ミットは気持ち悪いな。普段からなに考えてんだか分からないところあるけど、いつも以上だ。

アイス買ってきてやるから、と出店のほうにしょぼしょぼ大袈裟に腕を振りながら走り去っていったばかり。普段からあんな感じならいいんだけどねえ。とりあえずは茶々入れずに悩みを聞いてくれたし、黙ってさえいりやあ顔立ちだって悪かないってのに、いつもわたしの顔見るやブスだサルだゴリラだって、ホントむかついてしょーがない。

わたしは、木造のベンチから立ち上がった。

川沿いの道で、すぐそばには観光用の船乗り場がある。柵にもたれて夜風を浴びる。夜風といってもまったく爽やかなものではなく、蒸し蒸しとした単なる熱気ではない。もうすぐ十月だというのに、

まだまだ容赦なく暑い。

とくに当てがあつてきたわけじゃないとはいえ、ぼーっと立っているのも暇だ。つつい、膝の屈伸運動をしたり、ストレッチなどをしてみる。スカートだけど周囲に誰もいないから、気にしない。

ほんの数分しかたつていないのに、もう暇をもてあまして退屈で退屈でしかたないという気分になっていた。無趣味人間で、別になにもやることなんてないくせに。

この直後に、退屈なほうがよほどいいと思えるような怖い体験をすることになるなんて、当たり前だけど考えてもいなかった。

「おい、姉ちゃん」

ガラが悪そうな男たちが立っていた。三人。年齢は三十代だろうか。全員、赤や青のカラフルなシャツで、胸元を大きくあけている。服装だけ、髪型だけ、顔つきだけ、どれをとって見てもとても暴力的な匂いを発していた。

「ねえ、いま暇？」

一人が近寄り、さらに顔を寄せてきた。お酒臭い。

なにかいおうにも、わたしの口はまったく開かなかった。体を動かそうにも、まったく動することが出来なかった。なのに、心臓だけは自分勝手に、ドドッ、ドドッ、と速い鼓動を刻み出した。

「暇か　って聞いているの。ひよつとして、耳悪い？」

「あ……え、えと、暇、暇じゃ、ありません。ひ、人……人を、待つてて」

やっと言葉が出た。

ちよつと前まで暇だ退屈だと思っていたくせに。

「ふーん。じゃ、それまで、おれたちと遊ぼうよ」

「あ、あの……」

「こいよ」

一人がわたしの腕をぐいと引っ張った。

「やめてください！　人を呼びますよ！」

囁くような小さな声だが、ようやく、拒絶の意思を伝えることが

出来た。しかし、

「呼ぶなら呼んでみるよ。デカイ声出したらさあ、おれたちカツとなつてなにすつか分かんないぜ」

にやにや笑っている。

わたしってこんなに情けない奴だったんだな。心の奥に、冷静なもう一人の自分がいて、そんなことを考えていた。もう少し度胸すわっているかと思っていたけど、こんな脅しになにもいえなくなつてしまったのだから。

「おとなしくなりやがったぜ」

「ふるえてるよ。よく見ると、かわいい顔してるよな。体はどんなかなあ」

「それじゃおれたちと楽しいことしにいこうぜ。こんな、なんもないとこにいないですよ」

また、わたしは腕を強く引つ張られた。

「や、やめ……」

「はあ？　なんかいった？」

わたしのまるで抵抗になっていない抵抗は、結局のところ彼らをますますいい気にさせるだけだった。なす術なくぐいぐいと引きずられていく。

「おっそくなつたあ！」

建物の陰から飛び出した高木ミットの素っ頓狂な叫び声が、我々がそれぞれ心に感じていた空気をとにかくにもバリバリと蹴り碎いた。

ミットの両手には、ソフトクリームが握られている。

男たちとミットとが向かい合う。

「なんだてめえ！」

「なんだとはなんだ、おっさん！　って、なんだこりゃ、どうなつてんだか、わけ分かんねえぞ！」

どこまでも、なんだか人を食つたようなミット。

「そうか、この姉ちゃんの彼氏か。でもよ、てめえみたいなひよろ

ひよろしたガキよりも、おれたちのほうがいいってよ」

誰もそんなこといつてない。

「痛い目にあわねえうちにいっちなまいな。夜店で射的でもやってるよ」

ちよつと面食らったような表情のミットであつたが、次第に顔がにやけてきた。

破顔、というのか、こんな時になんでそんな表情が出来るのか……

「ふうん」

男たちをじろじろ見ている。

「てめえ、ふざけてんじゃねえぞ」

小学生の頃からミットを知っているわたしには、なんとなく分かつてきた。ミットも怖いのだが、絶対にそれを顔に出したくないのだ。意地っ張りで、天邪鬼だから。いつも余裕の、済ました顔をしていたいから。

「あのね、渋いお兄様がた。ふざけているってのはね……」

ミットがふらーっと歩を進める。そして突然、

「こういうのをいうんだよ！」

二人の顔面にソフトクリームを押し付けた。と同時にずっとわたしの腕をつかんでいた男の鼻っ柱に、

「アルシンドッ」

と意味不明な雄叫びとともに、頭突きを浴びせた。わたしの腕が解放される。それとほとんど同時に、ソフトクリーム攻撃で動転している二人の脛に渾身の力を込めたローキック。デッ！ と八モるような二人の悲鳴。

「うつそ、こんなにうまくいくなんて」

自分の行動の結果に驚いているミット。

「走るぞ、梨乃」

ミットはわたしの手を握り、そして走り出す。

足が地についているようないような、なにがなんだか分からない心地。でもちゃんと足は動いてくれているようで、視界が凄

速度でどんどん後ろに流れていく。

男たちの怒声が小さくなっていく。追ってきてはいないようだ。
灯り。

人だ……

だんだん人の姿が増えてくる。

人込みの中に入り込み、祭りのメイン通りを反対側へと抜けた。

「あれ、梨乃ちゃんじゃないか」

トクジさんの姿。

ようやく、わたしたちは足をとめた。

「この人、トクジさん、ここの、顔、だから、も、もう大丈夫、だよ。……あいつら以上に、ガラの悪い、のが、ゴロゴロと、子分に
いるから」

両膝に両手を付き、つつかえつつかえなんとか言葉を出す。ミットも息を切らせてはいるが、わたしに比べるとまったく平然としたものだ。

「本屋の親父をつかまえて、人聞き悪いなあ。彼氏と二人して、そんな息切らせちゃって、いったいどうしたんだい」

「な、なんでも……ないです。……あと、彼氏じゃない」

川沿いの道にある木造ベンチ、ちょうどカップルがどいて二人分空いたので、わたしたちはそこに座る。

「ああ、疲れたな。……試合の時に比べりゃ全然走ってないのに、なんでこんな息切れるんだろな」

「当たり前でしょ！」

わたしは大きな声を出していた。というか怒鳴っていた。

「……当たり前でしょ。あんな目に……あつたんだから。なに強がつてんのよ！ バカ！ほんとに……ほんとに、もの凄く怖かったんだからね！」

涙がボロボロとこぼれてきた。

恥ずかしい。

わたし、ミットの前で泣いちゃってるよ。

こんな奴の前で、弱み握られたくないのに。
涙、止まんないよ。

「ごめんな……」

ミット、夜空を見上げている。

「なんだよ。ちよつとは素直なところもあるじゃない」

そういおうとしたのだけど、きつとミットには伝わっていない。

口の筋肉が痙攣して、まったく言葉になっていなかった。ただろうから。
ぬぐってもぬぐっても涙、こぼれてくる。

ほんとに恥ずかしい。

「えと……」

ミットが立ち上がる。

「送ってくわ」

自分のいったことに、なんだかそわそわしている風のミット。

「当然でしょ」とはいわなかった。どうせ言葉にならないに決まっている。

かわりに、わたしは大きく頷いた。

5

腕立て、腹筋、スクワット、ウエイトを付けた状態で順々に、黙々と、延々とやっている。日も暮れかけ、すっかり薄暗くなった自分の部屋で。

すでに全身筋肉痛。あきらかにオーバーワーク、筋肉が細くなってしまうだけだ。

分かつてはいるのだけど、無性に肉体を苛めたくて仕方ない。

ただでさえ部活の練習でクタクタだというのに。

疲労に音を上げたというより、単に飽きがきて、家を出た。今度はジョギングだ。

家は山の中腹にあるため、周囲を適当に走っているだけでもかなりハードな運動になる。いつもコースは決まっているのだが、今日は普段通らないような大回りをしてみたい。

全身の筋肉や関節が痛い、それが逆に心地良い。心地よいというか、色々と忘れられるから気分が楽。

山を下り、古い街並みを越え、ＪＲの線路を渡り、利根川の遊歩道。もう完全に日が暮れ、夜空には金星だかなんだか一つだけ輝いている。

やがて利根川を渡る長い橋が見えてくるのだが、ここで遊歩道は終わっている。

まだ距離はあるが、その橋の下で、誰かがボールを蹴って遊んでいるのが見える。

橋桁相手にサッカーボールかなにかを蹴っているようだ。

遠いけど、なんか見たことあるシルエツト。

わたしは柵を乗り越え、草むらの中に入った。

橋桁に近づいていく。

やっぱり、高木ミツトだった。

ほんと、どこにでもいるな、こいつは。わたしもこいつも、家が近いし、徒歩圏内しか移動しないタイプだから仕方ないのは分かるけど。

さらに近づいていくと、ようやくわたしの姿に気づいたようだ。

無理もない。橋の上はかなり明るいのだろうが、ここはその洩れた灯りでなんとか見えるという程度の、かなりの暗がりだ。しかも上は、車の通りが激しく、騒音がかなり凄まじい。

「なんだお前、どこにでもいるな」

ミツトが叫ぶ。叫ぶといっても、騒音にかき消されてかろうじて聞こえる程度。まあ、だから叫んでいるわけだけだ。

「あんたもね。千葉県だけで二百匹くらいいるんじゃないの。で、なにしてるの？」

もう分かっていたけど、でもとりあえず、聞いてみた。

「壁打ちだよ。一人練習」

「よくやるなあ。人には不真面目だけど、フットサルには真面目だよな。あれ、そのボール大きいね」

「サッカー用の五号球だからな。フットサルのボールは弾まないから、サッカーボールのほうがいいんだよ」

「なるほどね。ちょっとあたしにも蹴らせてよ」

「ゴリラパワーで破裂させんなよ」

「アホか」

わたしはミットの足元のサッカーボールを奪い、ドリブルしてみた。砂利のせいもあるけど、やはり慣れない大きさのボール、蹴り辛い。

橋桁のコンクリート目掛けて蹴った。

それほど力を入れたつもりはないのだが、思いのほかバウンドし、わたしの頭上を越えていった。ミットがボールに走り寄る。長い足を伸ばしてボールを蹴り上げる。ヘディング、そしてまたキック。ボールは高く上がり、わたしのほうへと落ちてきた。

わたしもヘディングで受け、右腿、右足の甲、左肩、右足のインサイド、左腿、とリフティング。ボールの違いに慣れるまでもなく、落ち着いてやればなんてことはない。基礎は出来ているから、ボールがちよつと変わったくらいで失敗することはない。とかいいつつ、慣れたボールでも五回と耐えられずに地面に落としてしまったりもするけど。

宙に高く蹴り上げた。

落ちてくるボールにタイミングを合わせ、壁に向かって蹴った。

壁にぶつかりバウンドしてくるボールを右腿を上げてトラップ、左足の甲で上げておいて、また壁に向かって蹴る。

戻ってくるボールを今度は頭で真上に上げて、また壁に向かって蹴る。

これが壁打ちだ。

部活入って仲間もいるし、あまり有効な練習方法ではないと思っ
てあまり気にしないでいたけど、いざやってみるとなかなか面白い。距離を詰めたり離したり、やり方次第では、結構いい練習かも知れないな。

そういえば、佐治ケ江が子供の頃に毎日やってたっていったな、壁打ち。一人だったから、リフティングとドリブルと壁打ちばかりやってたって。

わたしも毎日やれば、抜けるだろうか。佐治ケ江を。

あの子がリフティングなどの個人技が誰よりも上手なことは事実。いつか部のみんなと接することや、相手と戦うことにも慣れてきて、萎縮せずにプレーが出来るようになったら、わたしなんか存在価値がなくなってしまうかも知れない。

でも、そうなりそうになったら、その前に潰してやるだけだ。

一年なんかに舐められてたまるか。

……また、嫌なわたしがいるよ。

人間のクズだな。

勝手に鍛え、育てておいて、自分を抜きそうになったら、増長しそうになったそのプライドぶっ潰す！ って、なんだそりゃ。自分で自分が嫌にならない？ よく平気で生きているよね、わたし。

「おい！ ……おい、ゴリ！ 寝てんのか、てめえ！」

高木ミットがわたしの側で、珍しく真剣な顔で叫んでいる。

「ど、どうしたの？」

跳ね返ってきたボール、胸で受けて、壁に蹴り返す。

「やっと目が覚めたか。なんか、凄い怖い形相でボール蹴ってたぜ。もつと楽しめよ。それがボール蹴る時の礼儀だぜ。お前が部員によくいつていることだろ、柄にもなく」

「そんな変な顔してた？」

ボールが眼前に迫っていた。ヘディングで壁に返す。戻ってきたボール、右腿、左腿、右腿、頭、右足甲で壁へキック。

戻ってきたボール、今度はミットが受けた。

二人で、しばらくラリーを続ける。

ミットの奴、普段おちゃらけてるくせして、こういうことには陰で物凄く努力しているようで、実に器用にボールを扱う。わたしも真似してみようとするが、上手くないかず、おかしい方向にボールを

蹴つてしまつ。でもミットはそれをきちんと受けてくれる。

「お前さあ」

「なによ」

会話しながらも、ボールを蹴る足は休めない。もちろん地面に落とすこともない。

「まだ、大泣きして涙ではれた跡、はつきり残ってるぜ」

「誰が泣かしたと思つてんのよ！」

「あのチンピラ三人組」

そうだった。

「あ……」

ボール、足の甲で受けたつもりが、受け損ねて落としてしまった。

「はい、ゴリの負け」

「変なこというからだよ！」

「では罰ゲームを発表します」

全然ひとのいうこと聞いてない。

「勝手なことばかりいつてんだから」

「では、罰ゲーム。……もうちょっと、付き合えや」

6

鏡に映ったわたしの顔。

泣きはらして跡になつたまぶたが、ようやく治つてきたようだ。

クラスの女子たちが、わたしの顔見るたびに、彼氏と喧嘩したんでしょ、別れたんでしょ、と鬱陶しくてしょうがなかったが、ようやく解放される。まったく、彼氏なんかないってのに、なんでみんな女が泣くと恋愛に結びつけるんだ。

洗顔をすませる。

タオルで顔をふいていると、お父さんが入ってくる。

「あ、洗面所、あいたから」

「おう」

わたしはすつと洗面所を出る。

まだどうにもぎくしゃくして、お父さんとともに喋れない。

この子供すぎる性格、ほっておいてもいずれ大人になっていくの
だろうか。それともそうなるべく努力しないと、なれないの
だろうか。

経験が人間を成長させる、というのなら、あのお祭りでの件で
わたしは成長したのだろうか。

とてもそうは思えない。

飯になにか収穫があったとすれば、ミットもほんの少しくらいは
良いところがあるってことを知ったくらいものだ。

廊下歩きながら、腰に手を回す。

なんかスカートがきつい。前は、指がずっと入ったのに。

太ったかな。

でも、お腹の肉は相変わらず、つまめるとこなんてないくらいし
まっている。

体重も変わっていない。

脂肪がついたわけではなさそうだ。

じゃ、前に久樹がいったように、筋肉がガツチリついてきたの
だろうか。

どっちにしても、嫌だな。

……どっちにしても嫌なんて、ならなんで筋トレなんかしている
んだ。

鍛えればそりゃ筋肉つくだろ。

フットサルやってれば、走ったり筋トレしたり、当然だろ。

でも、そもそも、なんでフットサルなんてやっているんだろう。
部長なんかになって、なにかいいこと、一つでもあったら
うか。

……ダメだ、また発作的に、負の連鎖に陥っている。

頭痛くなってきた。

「学校、休みたいなあ……」
呟く。

そもそも今日は生理二日目で体が重く気だるく軽い吐き気もあ

て、非常に辛い状態なのだ。

演技でフラフラと歩いてみる。こんなところで一人でやってても、誰も同情なんかしやくれないうちに。

「てんびん座のあなた、今日は健康運、金運、恋愛運、すべてが絶好調！ ラッキーアイテムはクマのキーホルダーです！」

「すべてが絶不調じゃ！」

めざましスタジオ七時ですの占いに文句を付け、途端にむなしくなる。

占いなんてくだらない。

ああ、今日も学校……憂鬱だな。

別に皆勤賞狙っているわけじゃないけど、休んだら休み癖がつきそうだしな。

しかたない。

いきますか。

……そういや、クマのキーホルダー、持ってたな。

第四章 友情事故

1

「骨エ削るつもりでいけやボケ」

高沢健一の野太い怒声が飛ぶ。フットサルでそんなことやるものなら、一発退場だ。サッカーとは比較にならないくらい接触プレーに厳しいのだから。

今日は体育館が使用できないため、グラウンドの端を使って練習をしている。外とはいえスペースは有限。各部活で配分も決まっている。今日は陸上部に少し分けてもらったスペースを、さらに男女で分けているから、普段体育館でやっている時よりも格段に窮屈だ。見上げれば、青い空は無限なのに。

体育館の時も男子部部長の高沢の声がこだまして鬱陶しかったけど、いまは今まで近すぎてストレス具合はさほど変わらず。

「そこ、へらへらしてんじゃないの!」

わたしも負けじと、というわけではないが怒鳴り声をあげる。

「フサエ、そんな程度の失敗して! 一年生に示しつかないでしょ。そんなんじや茂原藤ヶ谷に勝てないよ!」

「部長様、今日は激しいねえ」

「なんかいった?」

「いえ、別にいい」

久樹、頭の後ろで両手を組んですつとぼけた顔。副部長のくせに、なんだその態度。あとできつくいつてやる。

「ああ、だめだめ。ここは軸足で、こう」

フラインクの時のボール裁き、王子があまりになってないので、見本を見せてやる。

「ええと、こうやって、こう、ですか」

「そうじゃなくて」

後頭部にボガンと激しい衝撃、視界と意識がくるっと回る。振り

返ると、足元にボールが転がっている。

「すみません先輩」

篠亜由美。

ひよつとして、わざとか……。拝むように両手合わせて、へらへらと笑いやがつて。

「大丈夫。気に、しないで」

笑顔。もちろん作り物だ。ほっぺ、引きつっていたかも。

横目に王子の姿が目に入る。

「ああ、王子、違う違う！……だからそうじゃないってさっきから」

と歩みよろうとした瞬間、今度は二個のボールが両膝の裏にあたって膝力ツクン。地面にお尻を打ち付け、続いて後頭部を打った。

「すみませーん」

それぞれ離れたところから同時に声があがる。島田綾と衣笠春奈。

……二個同時って、なにこの奇跡的な偶然。ひよつとして、示し合わせて……

上体を起こす。次いで、お尻をさすりながら起き上がる。

「すみませんでした！ 本当に申し訳ありません！」

走りよってきた衣笠春奈が、深く頭を下げる。真剣なその顔に、わたしはついイライラしていたことを反省した。春奈の肩をポンと叩いた。

ぎゃっ！ という叫び声。佐治ケ江優の悲鳴だ。春奈、その声に驚いて間抜けな表情に。おそらくわたしもそんな顔だろう。

なんだよ、今度は。

声の主、佐治ケ江のほうを見る。佐治ケ江、突っ立ったまま硬直してる。彼女の向いている先に視線をやる。

端っこ、フェンス際、こちらに背を向けて並んだ五人の男子部員。

足の間から……

湯気が……

女子全員から、悲鳴があがった。

まさか。

ちよ、ちよつと、なにあいっらっ！

わたしは走り出した。

「男子！ やめてよ、こんなところで！ こっちには大勢女の子がいるんだからね！」

「だってトイレ遠いじゃあん」

「石沢ア！ 最中に振り向くな！」

たまたますぐ目の前に並んでいたボールの一つを全力で蹴る。石沢の頭にヒット！

「お前らも！」

わたしは次々ボールを蹴り、吉田も野々宮も加地原も寺井も血祭りにあげた。

「トイレ二分もかかんねえだろ！ 頭おかしいのかてめえら！ ボケが！」

わたしは完全な男言葉で絶叫してた。中学の時、周囲の影響でちよつと汚い言葉遣いをしてしまっていて、その時の癖が出てしまった。

「こっわ〜」

部長の高沢が手を自分の口に突っ込んで、こっち見てた。

一瞬で沸点に達した血液だが、反対に急速に温度が下がっていく。咳払い。

「……自分の部員くらい、ちゃんとしつけといてよね」

五人の男子、全然反省したふうもなく、手も洗わず、練習に戻っている。

もう、どいつもこいつも。いい加減にしてよね……

だいたい、同じフットサル部だからとはいえ、男女一緒に行動する機会が多すぎやしないか。顧問一緒だけでそれぞれ独立している部なのに。今度オジイに相談してみよう。……いや、余計にイライラさせられるだけだ。あいつ、日本語通じないから。

今度さっきみたいなおことしてたら警察呼ぶからね、と高沢に脅し

をかけて、さて、

「じゃ、練習再開！ さっき見た映像は忘れるように！」

「それじゃあ、しまつていきましょー」

春奈がのんびりした感じに叫ぶ。しまつてこうつて、野球部じゃないんだから。

しかし春奈がここまでまったく泣き言をいわずに続けるとは思つてもいなかった。

もう半年もやっているような者でも、相変わらず弱音をあげたり、体調不良で休んでしまつたりもしているというのに。

まだ一ヶ月しかたっていないから当然だけど、体力はまったくついていない。でも体はそこそこほぐれてきているし、ボール扱いにも慣れてきている。久樹がいつていた通り、筋はそんな悪くないのかも。ただ……

運動の辛さに関しては乗り越えるガッツがあることを認めよう。でもなんか昔のアイドルみたいな顔してるし、おしゃれに気を使つてるみたいだし、自分のこと可愛いと思つてるだろうし、きっとボールが顔面直撃でもすれば、こんなこと続けてちゃ美貌も台無しですう、つて逃げ出すに違いない。もちろんそんなこと願うわけにもいかないが。

しかしわたしが願わずとも、ことというのは起きてしまつたりするものなのである。

バチン！ 漫画の擬音のようだが、もうそうとしか表現できない、激しい、そして痛そうな音がした。空気パンパンに入れたサッカーボールやフットサルのボールは、本当に、至近距離でぶつけられるとこんな音がするのだ。

「ただ、大丈夫ですか」

佐治ケ江がすっかり狼狽してしまっている。

春奈は鼻をおさえている。

「大丈夫大丈夫」

「じゃけえ凄い鼻血が……あ、あの、春奈さん、保健室、いったほ

うが」

「大丈夫だつて」

春奈片手を上げる。もう一方の手で鼻を抑えている。抑えたその手の間から、鼻血がどろどろと流れ出ており、もう手は血みどろだ。春奈は自分のバッグがらポケットティッシュを一枚取り出し、血の出ているほうの鼻の穴に詰めた。

「これでもう平気。よし、続きやりましょう」

「平気じゃないでしょ！」

わたしは駆け寄った。

「すぐ止まると思いますから」

「もの凄い音でボールが当たったし、鼻血だつてそんな出てるじゃない。サジのいう通り、保健室いかなきゃ。……痛かったでしょ」

「はい。でも運動部だからしょうがないですよ。辛いのも痛いのもそんな呑気な表情で、なにを凄まじいことを。血まみれ顔のくせに。」

「このままで、大丈夫ですよ」

「保健室いっついて大丈夫だったんなら、それでいいんだよ。もしもなんかあったらどうするの？ さ、いくよ。久樹、あとお願いね！」

副部長に部を任せ、わたしは春奈の腕を掴み、歩き出す。

「あのう、お願いがあるんですけどー」

「なに？」

「今回だけでなく、今後のお願いでもあるんですが、もし怪我したとしても、親には絶対にばれないようにして欲しいんですが」

「怪我したら、内緒にしとくわけにいかないでしょ！ わたしや顧問の先生、学校には責任つてもんがあるんだよ。……で、なんでそんなこというの？」

「わたし小さな頃、体がとにかく弱くて、病気ばかりして……外で遊ぶのは禁止、運動なんてもつてのほかだったんですよ。でももう、それなりに強くなった、と自分では思っているんです。鍛え

て、もつと強くなりたいです。わたし、過保護に育てられてきたんで、そんな自分から脱皮したいんです。もう、また病弱に戻ってお父さんお母さんに迷惑かけたくないし。でも、うちの親、とくにお父さん、もういやになっちゃうくらい心配性で……」

「それで、怪我したなんていたくないわけか」

「はい。絶対、学校に乗り込んできますよ」

家庭はそれぞれとはいえ、確かに過保護すぎるよな。悪循環でますます不健康になっちゃうよ。

「あのさ、フットサル部に入ってたってことは……」

「はい、それは内緒にはしていません。絶対危ないことはしないし、無茶はしない、ということと許しを貰ってます」

「無理だよ、絶対危険ないなんて。いまだってたかが練習で、こんな目にあつてんだよ」

「わたしは覚悟してますけど、それでもいわないと、お父さんが承知してくれないですからね」

「そうなんだ……」

心の中で、ため息をつく。

ほんとにもう、嫌になる。

人には人の、色々な事情があるわけで。なんにも知らないくせに文句ばかりで。何様のつもりだったんだろう。

わたしって奴は。

2

わたしと景子と久樹の三人は、だいたいいつも一緒に下校する、そういう仲だ。

誰かに学校に残る用事や急いで帰る用事がある時まで付き合うことはしないが、特になにもない日にはまず一緒に帰る。

もう一年以上もそうしてきた。

最近なんだか、わたしと景子の関係がどうも気まずい感じになってしまっている。だから会話が少ない。

なんとなくそんな雰囲気になっている、というだけなので、避けて帰る理由もない。むしろ、喧嘩を売っていると思われるのが嫌で、別々に帰ろうとするなんて出来ない。おそらく、景子も同じ気持ちではないだろうか。

今日は久樹が用事があるとかで、走って先に帰ってしまった。

こんな時に、わたしと景子の二人きり。
最悪だ。

そもそもこの空気、景子にはまったく落ち度はなく、原因は百分百わたしにある。わたしが一人で、どうしてもなく嫌で最低な奴になっってしまっただけなのだ。

おっとりしている景子は何にもいってこないだろう。

どうせ、性格のねじけた、好戦的なわたしのほうから、キレて景子に突っかかっていくことになるのだ。悪いのはわたしだというのに、まったく冗談にもならない話だけだ。

と思っていたら、意外にも口火を切ってきたのは景子のほうだった。

「梨乃はさ、最近、余裕がなさすぎるんだよ」

ぼそりと、でもはつきり聞こえるように声を出した。

「……なんの話？」

などと聞いてみるまでもないことなのに。わたしはそのことであじうじと悩んでいたのだから。でも、景子の反応を見たくて、あえてとぼけてみせる。

様子見のためのジャブの打ち合いになるかと思ったら、驚くほど真っ直ぐに、景子はわたしへの思いをぶつけてきた。

「二年生はみな、半分友達みたいな、気の置けない関係になっているし、一年生にしても、基本は先輩たちがしっかり教えてくれたから、その流れに乗ればいいだけで、さして困ることもないのだから。部長になったことのプレッシャーやストレスを、そう思っでごまかそうとしていたけど、性格的相性の悪い春奈が入ってきたことで、とうとう耐えられなくなった。来年、新一年生がどっと入ってき

たら、どうすればいいのが不安で仕方ない。それだけじゃない。後輩の不甲斐なさを怒っているくせに、後輩の成長が怖い。部長なのに抜かれたらどうしよう、って不安になる」

血の気が引く、というのだろうか。多分わたし、そんな感じた。多分わたしの顔、青ざめて、冷たくなってる。多分いま、唇がぴくぴくと引きつっている。笑っているのだから怒っているのだから、なんだから分からない顔になっている。きっとそうだ。

「春奈の見た目がちゃらちゃらしているだの、貧弱そうだの、自分の気に入らないところを責めなくなる。……でも梨乃は、根はやさしい、というか真面目だから、そんな自分に我慢が出来ない。春奈、随分頑張ってるから、多分それも、梨乃が自分を責めることに繋がっているんじゃないかと思う」

「あのさ、知ったふうなこといわないでよ」

でも、全部正解。最後の、やさしいとか真面目とか、そこはどうだか知らないけど。

「自分が嫌な思いをしているから、周囲に、特に春奈に八つ当たりしている酷い奴、ってことだよ。景子、あたしのこと、そういつてんだよね」

「違う！ そんなこと、いつてないでしょ！」

分かっているよ。景子って優しいから。他人のことを心底心配してあげられる、そんな子だから。でも、わたしの口は止まらなかった。

やがてわたしは、怒号なのか悲鳴なのか自分でもよく分からない、声になっていない声をあげると、走り出し、その場から逃げ出してしまった。

景子は、追ってこなかった。

追ってきてくれなかった。

3

あの日からわたしは、一人きりで登下校するようになった。

教室でも、笑顔を見せることがまったくなくなった。だって景子がいる同じ教室で、笑い顔なんか作れない。

部活はきちつとやっている。いや、きちつとかどうかは分からないけども、毎日出ている。部長になってなかったら、きつと休んでいる。

いま、わたしは自宅の自分の部屋で学習机に向かっている。

今日の学校でのことを思い出していた。

部活終了後、部室で一人作業していて、遅くなり、すっかり夜になってしまった。

第一校舎、ほとんどの電気が消えている薄暗い廊下を歩いていると、笑い声が聞こえてきた。視聴覚室から、灯りが洩れている。声はそこから聞こえてきているようだ。ドアは二十センチほど開いており、そこから見たのは、

竹藤琴美……

先日フットサル部を退部した、竹藤。何人かの男女と、英会話をしている。たどたどしさはあるものの、とても上手だ。

結局、英会話部に入ったのか。

「違いますよ先輩、そこでイエスっていったら、逆の意味になっちゃいますよお」

「あーそっか、よく気づいたね、琴美」

「先輩のご指導のおかげです」

「ちよつとそれ嫌味？」

竹藤、笑っている。

とても、イキイキとしている。

楽しそう……

凄いな、英会話が出来るなんて。そっか。

竹藤は、あれでよかったんだな。

なんであの時、あんなに嫌な気持ちになってしまったんだろう。なんで、心から、頑張れっていつてやれなかったんだろう。

多分わたし、竹藤のことを見下していたんだと思う。努力はしているけど能力のないダメな奴、そう思っていたのだ。勉強劣等生のわたしがそんなこと考えるなんて、おこがましいにも程があるというものだ。人はどんな才能があるか、分からないのだから。とにかくあの日、そんな能力のないダメな竹藤が急に毅然とした大人びた態度で、わたしと対等に接してきているような気がして、それがどうにも不愉快だったのだと思う。

そういうことが分かるようになっただけ、わたしも成長したのだろうか。いや、そんなわけない。成長しているなら、なんだって景子にあんな最低な態度をとれるものか。

いま、わたしは自宅で学習机に向かっている。

すでに十月。関東高校生フットサル大会、千葉県予選の日が近づいていた。

正直いって勝ち負けは運だと思う。ただ、頑張れば頑張っただけ、チームワークの熟練度を見せることが出来ると思うし、自分たちも達成感を味わえるはずだ。いや、以前はそう思っていた。いまはどうだろう。わたしがいると、すべてをぶち壊してしまうんじゃないだろうか。頑張ろうとすればするほど、チームワークが崩壊していくのではないだろうか。

部長ノートには、部員一人一人の特徴、技術力、体力、判断力、など思いつく限り書き込んである。いま、そのデータを見ながら茂原藤ヶ谷対策を考えている。メンバーをどうするか考えている。

久樹と織絵と晶は絶対に外せない。やはり問題は、アラをどうするかに尽きる。

こんなこと、頭を悩ませながら一生懸命に考えていて、なんになるんだろう。

たかが、高校の部活じゃないか。

などとすっかり冷めきった考え、時々頭をよぎる。

以前はフットサルが好きであること、なんの疑いも持っていないかったのに。

いや、違う。

いまだって大好きなんだ。それは疑いのないことなのに、

それなのに……

わたしは……

東京にいる春江先輩に電話をかけた。

いまのモヤモヤとした感情を、漠然とした、カタチのないカタチを、言葉に出来る限り言葉にし、受話器の向こうにいる先輩へと伝えた。

春江先輩はひたすら話を聞いてくれた。

全然厳しいこともいわず、ただ聞いてくれた。

しばらく一方的に話し、そして電話を切った。もっと話したかったけど、春江先輩にまで嫌われたらもうすぐるものがなくなってしまう。そんな怖さから。

4

日曜日、お母さんの墓参りにいった。

お父さんの仕事の忙しさや、わたしの気持ちの問題などから、お彼岸を逃してしまい、次のお彼岸の時でいいやという話にもなっていたのだが、母方の叔父がお墓参りをしたいと声をかけてきたため、一緒にいくことになったのである。

そしていまは、その帰りの途中だ。

JR成田線の電車の中。わたしとお父さんは、つり革に掴まり、電車で揺られている。

混雑はしていないものの、座席はみな埋まっている。立っているほうが、お父さんとの距離を調節出来るからいい。もしちょうど二人分の空席でもあった時には、どうすればいいのか困ってしまうと

ころだ。

お寺には、叔父夫婦とその息子がきていた。

わたし、もともと親戚と接するのは苦手なだけど、こんな気分の時に会わなければならないなんて。でも、そんなこともいつたらない。お母さんの弟さんが、せっかく天国のお母さんと会う機会を作ってくれたんだから。あまりお母さんのことは悲しませたくないし。いや、でももう充分に悲しませているか。

わたしのそんな気持ちなど知らず、叔父は親しげにあれこれと話しかけてくる。

大きくなつて驚いた、子供の頃、あんなことやこんなことをしでかしていた梨乃が、

気が強いくせに泣き虫だった梨乃が、しばらく見ない間に……

……叔父は会うたび、同じことをいう。まるで、おじいちゃんだ。この前会った時から、さして身長なんか伸びてないっていうのに。仮に背が縮んでも、大きくなったというに違いない。

電車は少しづつ混んできている。むしろそのほうが有難い。

でもまあ、成田駅で、どどつと乗客が降りて空席だらけになつてしまうのだが。そうなったら、ちよつと離れて座ればいいだけか。

ガタンガタン、と電車は単調なリズムを刻んでいる。

田園、林、住宅街、見える眺めはこの繰り返しだ。

わたしはチラリとお父さんのほうを見る。お父さん、真っ直ぐ立って、ただ外見しているだけ。

うわ！ と心の中で驚きの声をあげた。カーブで電車が大きく揺れ、バランスを崩したわたしは、咄嗟に窓ガラスに両手を付き、なんとか難を逃れた。

「ど、どうも、すみません」

すぐ目の前に座っているおばさんを驚かせて不快な思いをさせてしまったことを謝る。おばさん、軽い会釈を返す。

「ちゃんとり革つかまってないとダメだぞ」

お父さんがこっち見ている。

「分かってるよ！ たまたま、ちょっと手を放しちゃっただけだよ」
まったく、子供に注意するみたいないかたするんだから。

でも、確かに子供だよな。それは間違いない。悲しいくらいに。

こんな自分の性格から、いつになったら卒業できるのだろう。

「成田でなんか食ってくか？」

また、お父さんが話しかけてきた。

成田駅から徒歩ですぐのところに、洋食屋があり、わたしがそこを気に入っているのだ。お父さんと成田を訪れた時や、お墓参りの後など、何度か連れていってもらったことがある。お父さんはその店で「なんか食う」か聞いているのだ。

「やめとく。あまりお腹すいてない」

お腹がすいてないというのは本当だけど。あとはまあ、気分の問題だ。

「そうか」

お父さんはそう一言いったきりだった。

成田で乗客が減り、予想通り一気に空席が増えた。
でも結局わたしは、お父さんの隣に座った。

5

ヒデさんと一緒に、自動車で豆腐配達の手伝い。大豆配合量など、一応こだわりの豆腐なんだからインターネット販売でもやって全国規模で商売すればいいのに。以前そういったらお父さん、顔の見えない相手と商売したくないだって。だから儲からないんだよな。それならそれでせつかく佐原なんだから土産物商売にでも参戦しろっての。

業者や個人宅など、一通り配達は終わった。香取のほうまでいった帰り道、利根川土手沿いの狭い道路を車は走っている。

なんだか無性に自分の足で走りたくなり、車から降ろしてもらっ

た。

運動したい、というより、肉体を疲れさせないと夜に眠れないから。

移動は車なので配達をちょっと手伝ったくらいじゃ、お客さんに気は色々とつかうけれども体はそんなに疲れるものでもない。

土手の階段を駆け上がると、一気に視界が広がる。だだっ広い平野に、公園、野球のグラウンド、テニスコート、ずっと向こうには利根川が流れ、対岸には田畑が広がる中に森林が点在している。利根川もかなり広いのだが、土地が広大なので相対的に狭く見えてしまう。

わたしは屈伸運動などで軽く体をほぐすと、土手の上の散歩道を走り始めた。

Tシャツにジーンズなのはいいけど、靴が運動靴じゃないので走りにくい。疲れさせるのが目的なんだからいいだろう、とあまり気にしない。マメが出来たら困るけど。

そういえば中学の時は部活でこの道を毎日走ってたっけ。練習でも後ろのほうになるのは嫌だ、っていつも先頭走ってたよな。たかが二年前のことなのになんか懐かしいな。三年生の頃には、陸上競技への熱意が減退してしまっただけのほうを嫌々走ってたけど。

金属バットでボールを打つ音。子供らの甲高い叫び声。グラウンドで小学生の男の子たちが野球をやっている。一人だけ女の子がいるみたいだ。

わたしもよく、男の子に混じって野球やってたな。バッティングは下手で空振りばかりだったけど、当たりさえすれば脚力活かして強引にヒットにしていた。だから途中から、バントばかり狙っていたっけ。

「くそう、見つからぬ〜！」

いきなり至近距離からどこかで聞いた声が。

土手の傾斜の草ぼうぼうの中、高木ミットが草むしりみたいにしてやがんでいた。

「なに探してるのよ？」

「わお、いきなり出てきて驚かすなゴリラ！　アホウ！」

「ほんと、口の悪い奴だなあ」

とお互いにいい合うようになって、もう何年だろう。

高木ミットは、草をつまんでは確かめ、また次の草を確かめている。

「だから、なに探してんの？　なんか大切なもの落としたんなら、手伝ってあげるからさ」

「……四葉、探してんだよ」

「四葉？　四葉のクローバー？」

「そ。ええと、ほら、もうじき予選開始だろ。男子は」

「女子も同じ日だってば」

「おれたちも、結構面倒なこと当たることになってさ」

「知ってる。松戸光陰でしょ」

「だから、おまじない」

「……あきれた。練習すりゃいいのに」

神様なんているのかいないのか分からないけど、とにかく勝ちたければ相手をよく研究し、とにかく練習するしかない。クローバーで勝てるなら苦労はない。って、なんか駄洒落みたいになってしまった。

などなど思いつつ、結局わたしも一緒になって探してしまうのだった。

「さっそく見つけた。しかも五つ葉だ！」

ミットより、わたしのほうがこういうの得意なんじゃないか。

「どれ」

そばに寄ってくるミット。おい、あんまりくっ付いてくんないよ。

「なんだこりゃ、裂いて五つにしているだけじゃんか」

「え、ほんとだ。誰だか分からんが卑劣な真似を……」

わたしは偽五つ葉を捨て、また本物を探し始める。

「お前からこそ、練習したほうがいいんじゃないの？」

「やってるよ。今日だって早朝からしつかり昼までやってたんだから。でも、あたしいないほうがチームまとまって、強くなると思うよ、多分。嫌味いつたり当り散らすだけの最低部長だからね」

「へ」

腹立たしいくらい関心なさそう。

「おっ！」

「見つけた？」

「クツワムシだ！　すげえ、こんなとこにいるんだ」

ミットは、小さいけどもちよつと太っているような緑色の虫をつかんでいた。バッタみたいな昆虫、足をばたつかせもがいている。

「うえっ、なにそれ？」

「だからクツワムシだって。キリギリスの仲間だよ。……あつちにクズが茂ってるから、それでこんなとこにいるんだろっな」

「そんな珍しいんだ」

「珍しいっていうか、環境の変化に弱い虫だから、人間の環境破壊の犠牲になって、どんどん少なくなってきたんだよ」

「そうなんだ。……なんか考えさせられるね。でも詳しいね、昆虫のこと」

「まあな。昆虫と川魚のことなら任しとけ」

「なんで川限定なのよ」

妙な趣味というか才能を持っている奴だな。

ミットはクツワムシを遠く放り投げ、四葉探し再開。
どれくらい時間がたっただろうか。

「四葉発見！」

ミット立ち上がり、右手を天高く掲げた。

「ほんと？　見せてよ」

わたしも立ち上がる。結構長いことしゃがんでたから腰が痛い。

「お前になんか見せたら、減るわ！　これにて任務完了。さらばじゃ！」

奇声を上げながら土手を駆け上り、散歩道を全力で走り去ってい

った。

はああ？　ちょっと、なんだよ、あいつ！

お祭りの時に打ち明けた悩みだつて、返事に一週間待てとかいつきながら、その後ひとこともないしさ。

ほんとに変な奴。

でも不思議と全然腹は立たなかった。ま、変な奴であることなんか、充分に承知しているし。

帰るか。

散歩道を、わたしも走り出す。

もう日は暮れかけており、薄暗い。

ゆらゆらと川に反射する真っ赤で巨大な太陽が、あまりに綺麗でびっくりした。

二年前まではしょっちゅう見ていた光景だというのに。すっかり忘れていた。

この眺めだけじゃない。

いろんなもの、捨ててきたんだな。

じゃ、かわりに得たものってなんだろう。

6

学校帰り。

ここ最近のいつものように、今日もわたしは一人で下校する。

いままでは付き合いで駅のほうまでいってから戻ってきていたので、通学が楽になっていた。

山林中腹の、わたしの家がある住宅街へと折れる道。丁度そこでお店のお得意さんである藤田さんという中年女性が車に乗ったまま話しかけてきた。話の内容はお店のこととは関係なく、他愛ない雑談。何歳になったんだあの、家族二人暮らしは大変だろうだの、うちの娘は東京の大学にいつてて寂しいだの。

十分ほども付き合わされ、やがて藤田さんは去っていった。代わりに、というわけではないが、景子とばったり出くわすことになっ

た。

久樹はおらず、景子一人きりだ。

内心飛び上がるくらいびっくりしたが、それを顔に出すのは絶対に嫌なので、瞬時にして表情を無理矢理自分の奥底へとしまいこんだ。

景子も少なからず驚いているようだ。

他人のようにお辞儀してはいさようならということも出来ず、かといって楽しく会話が出来るものでもなく、二人、硬直してしまっていた。

「まだ、怒ってるんでしょ」

今日は沈黙を破ったのはわたしのほうだった。

「なにに？」

景子は笑顔を見せる。苦笑いなのかなんなのか、どういう笑みなのかさがさっぱり分からない。

「いまの梨乃だとこつちから近づいても反発しそうだったから、様子を見ていたけど。最初から、わたしはなんにも怒ってないでしょ。梨乃のほうでしょ、怒っているのは」

「そうだね、あたしが一人で毒を振りまいてただけだもんね」

傍から見れば嫌な奴以外の何者にも見えないだろうな、わたし。

実際にそうなのだから、仕方ない。

「毒まくだなんて、そんなこと思ってないよ。ただ、もとに戻って欲しいだけなんだから」

「ほら……あたし一人変だっていつてる。景子ってさあ、優等生の立場からしかものがいえないよね」

「じゃあ、どうして欲しいの」

さすがに景子も弱った表情になってきた。

「別に、どうもして欲しくないよ。自分でもわけが分からなくなっ
てんだから」

「それじゃあ、一つずつ考えてけばいいじゃない。部活のことかなんだって相談してくれればいいじゃない」

「もうどうだっていいや、部活のことなんか」

「だったらなんで部長を引き受けたのよ！」

景子が怒鳴った。

そんな激しい声、初めて聞いた。いつもにこにこと笑っていたのに。暖かいお母さんみたいに、優しい顔しか見せたことなかったのに。

景子、いまにも泣き出しそうな表情。

初めて見た。そんな顔。

「梨乃に声がかかった時、久樹、もの凄く泣いていたんだよ。自分のどこが駄目なんだろうって。わたしたちと年季がまったく違う。経験も技術も遥かに上。だって十年以上もずっとフットサル頑張ってきたんだもの」

そんなこと、いわれなくなっただけ知ってるよ、久樹がどれだけ頑張ってきたかなんて。

「でも久樹、自分から立ち直ったよ。きっと、自分が悪いんじゃない、梨乃がいいんだ。部員をうまくまとめていたり、そういう自分にはない才能がたくさんあるんだ、って。だから頑張ってるサポートしてかなきゃな、って。久樹、そういつてたんだよ。それなのにフットサルなんかどうでもいい、部長なんかどうでもいい、って、金子先輩や久樹をどれだけ侮辱する言葉が分かってるの？ だいたい、この際だからいうけど梨乃は……」

「もう、うるさい！」

子供の金切り声のように喚き叫び、景子の言葉をさえぎった。

「悪かったね、いつも自分勝手に怒ってて、当り散らしている。こんなバカが部長になってごめんね」

「そういうことを責めてるんじゃない。辛い目にあっているのに、一人で閉じこもっていることをやめて欲しいだけだよ」

「じゃあ、もう構うなよ！ 優等生にそうやって見下されていると思うと、ますますなにもかも嫌になっってくるからさ！」

「梨乃……」

景子、ますます泣き出しそんな顔になってる。知ったことか。勝手に泣き喚きやいいじゃん。

「じゃあね」

わたしは早足で歩き出す。

ほんとうにバカで最低だよな。わたしって奴は。

救いようがない。

「梨乃！」

再び景子がわたしの名を呼ぶ。

絶叫にも似た……

背後で靴音。

景子が走りよってきて……

車のブレーキの音。

ぎぎいと耳障りな、鋭い、鼓膜の破裂しそうな、でもそれより、

景子の、

空気をつんざく甲高い叫び。わたしの名を叫ぶ。

わたし……

激しく、そして鈍い衝撃。全身に、

一瞬のうちに視界、くると回る、

一瞬、意識が肉体から吹っ飛びかける。

ブレーキ音。

どうん、となにかぶつかる低い音。

背後から突き飛ばされていたわたし、地面に転がった。

突き刺されたかのような、凄まじい痛み。足を捻ったようだ。

そして、

静寂……

静寂……

ほんの一瞬なのか、数秒、数十秒のことなのか分からないが、すっかり真っ白になっていた思考、戻ってきた。

両手を着いて、上体を起こす。

白い乗用車、

その車の前には……

わたしは目を見開いた。

嘘であつて欲しい。そう強く願つた。

でもどう思おうと、現実はなにひとつ変わることはなかった。

景子……

第五章 春江先輩

1

中学生の頃、部活は陸上部に入っていた。

短距離が得意、自分ではそう思っていたが、一年生の夏休みの時に、当時顧問だった先生の助言により中距離へと変更した。

その助言は的確だった。一年生のわたしは、いきなり、この学校の陸上部での千五百メートル走の最速記録を大きく塗り替えてしまったのである。

四百メートル、八百メートル、千五百メートル。あまり優秀な子がいなかったせいもあるが、わたしはいつもトップだった。別にお山の大將というわけでもなかったと思う。二年生の時には、全中陸上の千葉県大会で二位、全国大会で四位、という結果を出したのだから。

かなりちやほやと持てはやされて、天狗になっていたものだから、三年生では予選敗退という結果に終わったのだ。という陰口を叩かれたが、それは半分は正しいが半分間違っている。天狗、というよりは、どうにもやる気が出なくなってしまったただけだ。

わたしがそんな上がったり下がったりの変化に富んだ三年間を過ごしている傍ら、大きく張られた緑のネットの向こうでは三年間まったく変わり映えのしなかった男が一匹。小学校からの同級生である高木ミットだ。ネットの向こうにはサッカー部の練習場があり、高木ミットはいつもアニメみたいに技の名前を叫びながらボールを蹴っ飛ばしていた。「男子ってほんとにバカだな」と思っていたものである。そんなミットにゴリラゴリラいわれて、怒ってネットの向こうまで追いかけていくわたしも、まあバカというか、子供だったわけだが。

中学三年の七月。わたしたち、陸上部の三年生は引退することになった。

やり尽くした、燃え尽きた、という気持ちはまったくなかったけれども、とにかく、陸上にはまるで未練を感じなかった。もちろん陸上競技は素晴らしいと思うし、よい点を挙げるといわれればいくらでも挙げられる。でも、どうも走るだけというのが自分には向かなかったのだと思う。

はつきりいつて無趣味人間だったから、惰性で、引退時期になるまで続けられただけだと思う。家に帰ってもテレビ見るくらいしかやることがないし。

とにかくこれからは受験勉強に専念しなければならぬ身だ。なにせ、実力よりも遙か上の高校を目指そうというのだから。

将来のことを考えてというより、単に近くの高校がそこしかないから。駅までは遠いし、電車の本数があまりに少ないので、なるべく電車通学はしたくないのだ。自転車通学で良いのなら他にも高校はあるが、そこで決してレベルの低いとはいえないところ、どうせ勉強しなければならぬのなら徒歩圏内の高校がいい。どうせ滑り止めで私立も受けるんだし。本当は、我が家の経済状況を考えてと私立にいくともいいにくいものがあるんだけど。

引退したその翌日。放課後の時間を使って、ぶらぶらと学校内を歩き回っていた。

勉強漬けの日々は明日から。今日は、くだらない、無駄なことをして過ごすのだ。帰りは本屋で漫画を立ち読みし、家に帰ったらテレビ観ながらゴロゴロするのだ。お父さんと一緒に横になつて柿ピー食べながら。あと、長風呂するのもいいな。

と、そのようなわけで、校内をあてもなく散歩、というか単にうろろろ歩いていた。

校舎の四階、五階の廊下を歩けば、理科室や家庭科室、視聴覚室などで文化部が活動している様子が見える。よく分からないけど物理部とか手芸部とか漫研とかだろう。

グラウンドや体育館では、運動部が大声をあげている。いろいろ

な競技があつて、見て面白。ジャージ着て筋トレしているだけの部もあり、筋トレ内容から何部なのか想像するのも面白い。

しかしみんなよくやるな。こんな公立中学で部活なんか一生懸命になっちゃつて。見る分には楽しいけど、やれといわれても嫌だな、面倒くさい。

体育館では、女子がサッカーの試合をしていた。

わたしは出入り口のそば、壁に寄りかかつて、それを見ている。あれ、でも普通サッカーって外でやるものだよな。なんでわざわざ室内でやっているんだろう。サッカーなんて興味ないからよくは知らないけど、人数が少ない気もするな。そういや、ゴールネットも小さい気が。寄せ集めの用具で適当にやっているのかな、それとも屋内でサッカーやる時はそれ用のルールがあるのかな。ひよつとして男子は外でやって、女子は室内の小さなコートで、とルールが分かれているのだろうか。確か、ラクロスだかなんだかいう球技、あれも男女でルール違うらしいね。

一人、とても上手なのがいて、ドリブルで二人をかわして見事にシュートを決めていた。凄いいい動き、サッカー素人のわたしにも分かるくらい。

ルールはさっぱり分からないけど、要はあのゴールに入れればいいわけだろう。相手より多く入れりゃ勝ちつてことだろ。

「なんだ。簡単そうじゃん」

その無意識の一言が、後から思えばわたしの一生を決定付けるものだったのだ。

さきほどから上手なプレーを見せてた子が、プレーをとめて、こちらを見ていた。他の子もそれにならつて動きをとめた。

全員の視線が一方に集中、つまり全員がわたしを見ていたのである。やばい。また声に出しちゃったよ。本当にわたしの悪い癖だ。いや、でも、なんか悪いことだったか？

あの子が、こっちに向かって歩いてくる。

上下白いユニフォーム姿。後ろの子たちみんなもそうだ。

身長は、わたしより少し大きい。わたしが百五十六だから、百五十八、九といったところか。長そうな髪を後ろでおだんこのように束ねている。

「簡単そうに見える？」

ニコニコと笑みを浮かべている。

「あ、ごめんなさい。あたしの悪い癖で、つい口に出しちゃって。悪気はないんだけど」

わたしは意味もなくあたふたとした。

「そんなことは聞いてないよ。……簡単そうに見える？　って、それを聞きたいだけ」

なんであたふたとしてしまったのか、原因が分かった。威圧感だ。この柔らかな態度の奥から滲み出ている気に威圧されているのだ。

「簡単そうに思えた」

威圧感に負けそうになりながらも、精一杯の反抗を試みる。

「ふうん」

とニコニコしていた彼女の表情が、一瞬して変化、激高した。

「てめえ、寝ぼけたこといつてんじゃねえよ！」

声質までがらりと変わって、低い、ドスのきいた声になっていた。これが、わたしと春江先輩との出会いだった。

2

「ごめん。だから悪気はないんだって」

わたしは焦り、うろたえ、作り笑いが精一杯。だいたい、自分でもなにいったかはつきり覚えてないのに、そんな突っかかってこれても知らん。

「悪気もへつたくれもあるかよ、ドアホかお前。ドアホウ甲子園がコラ。来月であたしたち三年が引退すつからあ、これから一年二年だけでちゃんとやっていけるかどうか見極める大事な試合をやったんだよ。あたしたち三年生の魂を一年二年に引き継いでもらつための、大切な試合をやってたんだよ。それがなんだ、簡単そう？」

おめえ、やったことあつていつてんの、フットサルを」

「フ、フットサル？ …… なんですか、それ？」

なぜか敬語になつてしまつていた。同学年なのに。

「はあ？ ふざけんのも大概にしとけてんだよな。 …… じゃ、サッカーでいいよ、サッカーは知つてんのか？」

「名前くらいは」

「うわ、びっくりした。それで簡単そうに見えちゃうつて、お前どんだけ神様だよ。すげえな、まったく。奇跡の存在じゃん。じゃ、その神様なところを見せてくれないかな」

無茶なことをいつてくる。

「やったことないもの」

「それなのに、あたしやこいつらの何年もの努力を小馬鹿に出来るんだから神様仙人様なんだろっていつてんだよ。さ、はやく見せてくださいよ。ねっ、はやくはやく」

「悪気ないつていつてるでしょ。気にさわつたなら謝るよ。ごめんなさい！ それじゃ」

わたしもいい加減頭にきてしまつていた。怒つた表情を隠さず、軽くお辞儀をすると、きびすを返す。こんなところ、くるんじゃなかった。高校落ちたらこのバカ女のせいだ。

腕をつかまれた。

「帰さないよ」

また、ニコニコと笑みを浮かべてる。さっきまでの笑みは演技かも知れないけど、今度は本当に楽しそうな顔してる。性格最低だな、こいつは。

「どうすればいいの？ 謝つたでしょ」

「あたしと勝負しな。勝つたら、おとなしく帰してやるよ」

「だからさあ…… やつたことないつていつてんだろうがこのバカ！ 勝負になるわけないだろ！」

つい語気を荒らげて、というか思い切り怒鳴り声を上げてしまった。

でも彼女のニコニコ顔は、ピクリとも変化しない。

「やんなかったら負けとみなして罰ゲーム。ここにあるボールを全部、べろで舐めて綺麗にしてもらうから」

「ふざけんな！ 冗談じゃないよ、そんな一方的に決めんな」

こいつ、本当に殴りたくなってきた。

「なら、勝ちやいいじゃん。あたしが負けたら同じことしてやるよ。どうするかは、勝負の内容聞いてからでいいから」

「……どんな勝負だよ？」

「なに、簡単だよ。あたしがボールをキープする。お前はそれ奪ったら勝ち。時間は、そうだな、二十分やるよ」

「一度奪うだけでいいの？」

「出来るもんならな」

なんだこいつの自信満々な笑みは。

でもね、笑いたいのはこっちのほうだ。

バカだ、こいつは。

「あのさあ、さっきあたしのことを散々いってくれたけど、フットサルとやらを舐めてんのってそっちのほうじゃないの？ 二十分もあれば、素人だって一回や二回、奪えるでしょ。いくら技術の差があつたって」

「やるの？ やんないの？」

「やるよ」

こいつはいままで走り回っていたんだから、体力消耗しているはず。それにわたしは陸上競技をずっとやってきていたのだから単純な体力には自信がある。こいつ、フットサルをやっていない人間はみんな文化部だとも思っているんじゃないか。いやいや、文化部に入ってたって体力ある奴なんていくらでもいるぞ。

「あたしは、野木春江。あんたは？」

「木村梨乃」

広くもない中学で、学年も一緒だというのに、いままで名前も知らなかった。彼女、野木春江も同様のようだ。

勝負はハーフコート内で行うとのこと。フットサル用の競技スペースがあつて、そのさらに半分を使うということらしい。まあ要するに、白いラインに沿って点々と座っているフットサル部員たちの、その中がコロシウムというわけだ。

そのハーフコートの中央に、わたしと野木春江が向かい合つて立っている。距離、約一メートル。二人の間には、ボールが置かれている。フットサル用のもので、サッカーボールより少しだけ小さいらしい。

この空間に部外者はわたし一人だけ。でも別に緊張も恐怖もない。あるのは怒りと、そして、ほえ面かせてやれる喜び。

「笛の音で開始だからな、木村」
いきなり呼び捨てかよ。

「あのさ、部長さん。部長さんがまずボール持つてから奪えばいいの？　じゃないと、二人の間にボールがあつたらあたしが取っちゃうよ、笛鳴った瞬間に」

「うん、そしたら木村の勝ちだな」

「分かった」

「なんか、自信出てきたじゃんよ、木村あ。木村工務店。薄笑い浮かべちゃって」

うち豆腐屋なんだけどね。

「そりゃね。さっきもいったけども、やったことないんだから技術じゃ天地の開きがあるだろうけど、二十分あれば、マグレなんかいくらでも起きるでしょ」

バスケのスリーポイントシュートみたいなもんだ。ちょっと例えがおかしいか。

「お前さあ、二十分も動けると思つてんの？」

「あたしさあ、陸上部だったんだよね。持久走、得意中の得意。去年の全中陸上、日本で四位だったんだけど……って知らないか、全国レベルの大会なんて、あんたらにや縁がなさそうだもんね」

中二の時、全中陸上千葉予選八百メートルで二位、標準参加記録も当然クリアし、全国大会へ。香川県の丸亀陸上競技場では、千葉予選で一位だった子の記録をも破り、全国で四位の結果だった。競技が違かろうと、運動は運動、一回ボールを奪えばいいなんて単純なルールなら、走れるもん勝ちだ。なんてことない。

しかしそれを聞いた野木春江は、驚くどころか大笑い。頭きた。

「フットサルを舐めるのはダメでも、陸上舐めるのはいいのかよ！」

「陸上のことなんか舐めてないよ、お前のことを舐めてんだよ」

わたしの頭の中で、ブツ、ブツ、と血管が切れていく。耐える……こいつが調子に乗るほど、こいつが恥かくんだから。

「じゃ、はじめよつか。っと、そうだそうだ、その前に、その服。スカートじゃ動きにくいだろ。ジャージかなんか、着替えな。なかつたら貸すよ」

「いいよ。面倒くさい」

この格好で昼休みの校庭で遊んでいるんだから、特に動きにくいこともないだろう。

「勝手にしな。それじゃ、美紀子、秒読み！」

美紀子と呼ばれた子が立ち上がり、首からかけていた笛を手にした。

「二人とも用意はいいですか。じゃ、五秒前！ 四！ 三！」

二……

一。

なに考えてるんだか律儀に秒読みしてるよ。笛の音を聞くまでもない。楽勝だ。

しんと静まり返った体育館の中、高い笛の音が空気を震わせた。それと寸分の狂いもなく同時に、わたしは大きく右足を伸ばしていた。

ボールを踏みつけたはずだった。しかし、わたしの足裏は空気を踏んだだけだった。

前のめりになり、よろける。体勢立て直し、足元へと視線をやる。ここには一瞬前までボールがあつたはずなのに……

野木春江がニコニコと笑みを浮かべている。ボールは、彼女の後ろにあつた。いつの間に。まるで手品、いや、魔法を見せられたかのような。

気をもちなおし、野木春江の後ろに回りこむ。だが、すでにそこにボールはない。彼女はさして体や足を動かしたようには見えないというのに、今度はボールは彼女の前に。

正面に回り込もうと素早く動いても、彼女の背中がみえるばかり。ボールはそのすぐ向こうにあるというのに、遙か遠くにあるようだ。逆について、彼女の正面に回りこむことに成功、と思えば今度はボールは彼女の背後に。どうなつてんだ、これは。

「木村、強がつてたわりに、てんでダメだな。面白くないからチャンスやるよ。ほら」

野木春江はそういうと、かかとでボールを後ろに蹴った。ボールはそろそろと、ゆっくり転がっていく。こいつ……。わたし、完全に舐められている。

わたしはスカートを気にせず、三段跳びのように大股ダッシュ。野木春江の脇を抜ける。彼女が振り向いて追つてこようが、絶対にわたしのほうが早い。

貰った！ まさにボールを踏んづけようとしたその瞬間、わたしの足の間から野木春江の足がすつと出てきてボールを蹴飛ばした。わたしの後ろから、スライディングでボールを蹴ったのだ。ボールは体育館の壁に跳ね返り、また野木春江の足元へと戻った。

「どうした彼女、息、あがつてんじゃんよ。さっすが陸上部、スタミナあるう」

彼女のいうとおり、わたしは大きく肩で呼吸していた。そして彼女は反対にほとんど、いやまったく呼吸を乱していなかった。

プレー再開。わたしはまた野木春江のボールを奪おうと素早く踏み込む。でも彼女はまるで妖精のように、ひらりとわたしの突進を

かわす。何度かそんなことを繰り返しているうちに、ただボールを奪おうとしても、絶対に奪えないだろうということが分かってきた。しかし作戦を考えようにも、疲労がわたしの脳味噌から思考力を奪っていく。

中距離走で全国までいったわたしが、なんでこの程度で疲れるんだ。わたしってそんな体力がなかったのだろうか。いや、確かに三年になってあまり真面目にはトレーニングしてなかったけど、それでも陸上部にはわたしよりスタミナのある者はいないはずだ。

闇雲に体を投げ出し足を伸ばし、向かってはかわされ、追っては逃げられ、わたしの体力はいたずらに疲労していくばかりだった。すぐ目と鼻の先にあるボール一つ奪うことが、こんなに難しいなんて。

触れることも出来ないなんて。

股間の筋が痛くなってきた。なんだこれ、陸上やっていて感じたことのない痛みだ。

続いて足の裏の土踏まずのあたり、ふくらはぎ、腿の裏側、などが痛くなってきた。

そうか。陸上とは、使う筋肉がまったく違うのだ、少なくとも中距離走とは。朦朧としかける意識の中、そう理解していた。陸上、とくにわたしのやっていたような種目はただ前に走ればいいわけだが、ところがこのフットサルというのは、止まる筋肉、横に動く筋肉、というのにも必要とするのだ。そんな筋肉、意識して鍛えたことなんかない。

鍛えていない筋肉ばかり使って激しい運動をしているのだから、ちよつとやそつとのスタミナなんて意味がない。筋肉の疲労はあつという間にわたしの体力を奪っていく。

なんだか肺の内側が痛いような感覚。久しぶりの感覚。陸上で鍛えるよりもずっと前、小学生の頃、持久走大会でトップの子と張り合って無理をして、コースの半分もいかないうちに疲労限界に達してしまったことがあるが、その時以来だ。

「五分経過！」

美紀子という子が叫ぶ。

絶望感に、さっと血の気が引く。もうすでに死にそうなくらいふらふらだというのに、まだ五分なのか。もう一時間以上もたっているような、そんな気さえしていたのに。

無理……

絶対、勝てるわけない。なんて無謀な勝負、挑んでしまったんだ。なんなんだ、この野木って奴。わたしと同じ十四か、誕生日迎えてりゃ十五。しかし同じ年齢とは思えない。経験ではなく、なにか絶対的なものが違う。フットサルとか、陸上とか関係ない。そもそも人間か、こいつは……

降参だ。罰ゲームでもなんでも、やりやいいんでしょ。

……なに、考えてんだ。

アホかお前は！ わたしは、自分を叱咤する。

そんなんでいいのか。格好悪い。みっともないぞ、木村梨乃。

見た目のことや、勝負の結果のことではない。絶対に勝つと心に誓ったくせにそれを途中で放棄しようという、そんな自分がみっともない。あきらめたらそこで終わりだ。まだ十五分もあるじゃないか。

いくぞ！ 野木春江に体ごとぶつかっていく。獲物の突進を紙一重でかわす闘牛士よろしく彼女はひらりとよける。

わたしはよるけるがなんとか持ち直し、再度向かうが、彼女はひらり、ひらり、と掴もうとすればするほど掴めない木の葉のよう。足に縛り付けているんじゃないだろうか、と思えるくらい、ボールはピタリと彼女にくっ付いている。

絶対に諦めない！ ……三年生になってから、だらだらと気だるそうに陸上をやっていたくせに。わたし、いまなんでこんなに真剣になっているんだろう。どうしてここまで、負けたくないんだろう。野木春江の動きを読み、よける方向へとわたしもステップを踏んだ。捉えた！ 読みが当たったというよりは、単なる下手な鉄砲だ。

が、そんなことはどうでもいい。野木春江の足を蹴り碎いても構わない。そんな渾身の気迫を足に込めて、ついにわたしはボールを踏み付けた！……いや、すでにそこにボールはなかった。野木春江はボールをかかとで軽く後ろに流して、同時に体を回転させる。全身で、わたしからボールを守る。わたしは突進の勢い止まらず、彼女の背中にあごをぶつけた。そして、バランスを崩し、倒れ、転がった。

「大丈夫？ あのださ、気をつけないとパンツ見えそうだよ」

女子しかないんだ、どうだっていいよ。

相変わらず野木春江は呼吸を乱していない。必要最小限の動きしかしていない、ということなのだろう。そして、こういったゲームをするための筋肉がみっちり骨を包み込んでおり、その筋肉を動かすための持久力がしっかりと鍛えられている、ということなのだろう。

わたしは、床に手をつき、そして膝に手をつき、ゆっくりと、立ち上がる。

汗で腿にへばりついているスカートの乱れを直す。うつつしくなってきた、この服装。

肺が痛い。息が出来ないのも辛い、息していることも辛い、そんな状態だった。どんな懸命に呼吸しようとしても、酸素でないものばかりが体に入ってくるようだ。

「まだやる？ 負け認めるってんなら、許してやるよ。もちろんさつきいった罰ゲームはしてもらうけどな。木村意外と頑張ってたから、少しだけ甘くしてあげるよ」

「ボール、全部、舐めたって、いいから……」

野木春江を睨む。

「いいから、なんだ？」

「絶対勝つ！」

足を伸ばす。野木春江が余裕の表情でボールを後ろに引っ込める。回りこむ。野木春江もそれにあわせて回る。

さきほどまでと、なんの変化もない。同じことを延々と繰り返しているだけ。こんなこととしてなにになる。でも、他になにができる？　どのみち自分には技術なんてないんだ。なら時間一杯ガムシアラにやるしかない。

足を伸ばす。野木春江がボールを引つ込める。

おんなじことの繰り返し。たまの変化といえば、時折わたしが床に転がるくらいのももの。負けを覚悟したボクサーに三分間は地獄の長さというけども、全然覚悟しちやいないのに一分が永遠に思える一分ってこんなに長かったっけ？　一秒ってこんな長かったっけ？　でもありがたい。それだけ野木春江と戦える時間が増えるように。

……と自分の気持ちを奮い立たせるものの……やっぱり、疲労……限界……

嫌だ。負けたくない……

……あれ。視界が……。なんか、変だ。

上下、ひっくり返っている。

なんだ、気づかないうちに、転んでいたんだ。起き上がらないとよっと。うわ、やけに体が重いな。わたし、こんなに体重あったっけ。

もう、肉体の感覚が半分なくなっている。自分がいま、立っているのか、転がっているのか、歩いているか、まったく分からない。わたし、どこにいる。

ボールはどこにある。

野木春江、どこだ。

ゴツ、と鈍い音。おでこに痛みが。頭から転んでしまったらしい。視界が上下に、左右に、めまぐるしく回転している。ボール。どこだ。

苦しい……

胸が焼けるように痛い。手足の感覚はなくなってきたのに、この苦しさだけはどんどん増してきている。はやくしないと。時間。負けてしまう。

誰に？

自分にだ。

そんなの嫌だ。負けたくない。

情性で陸上続けて、だらけた走りして、自分と向き合うことから逃げていたくせに、なにをいまさら。

うるさいな！

いまは黙っているよ、もう一人の自分。

ボール……

野木……

ゴツ。痛い。また転んでおでこをぶつけた。安心した。転ぶということは、立ち上がろうとするとするということだから。寝たきりではないということだから。

よし。いくぞ。

野木……

春江……

絶対に……

負け……

朦朧とした意識の中、ピーー、っと鋭い音を聞いた。

「二十分経過。終了です！」

あ……

時間が、

……終わっちゃったよ。

完全に力が抜けた。

後ろへと倒れた。背中に鈍い衝撃。痛みも感じない。まだ、視界が回っている。

しんとした中、心臓の、どつくんどつくんという音が聞こえる。体育館中に、迷惑なくらい鳴り響いている。

あまりの苦しさに、胸を大きく膨らませて酸素を取り込もうとするが、期待するほどに酸素入ってこない。かわりに熱く焼けた変なものばかり胸に入ってくる。息をするのも辛いくらい疲れてるけど、

しないと死んでしまうからしかたなく呼吸している。

腕を横に伸ばす。大の字になる。

「だから、パンツ見えるっつーの」

すぐそばに野木春江が立っているようだ。

「知るかドアホ！」

と返したつもりだったが、おそらくほとんど声になっていないと思う。

それからどれくらいたっただろう。

ぐるんぐるん回っていた眺めが、ようやくとまった。まだ苦しいけど、ようやく呼吸が落ち着いてきた。吸い込めば酸素が入ってくるようになってきた。

思考がはつきりしてきた。

ここは体育館。フットサルのコート。

その中で、わたしは大の字に横たわっている。

そばに白いユニフォームを着た野木春江が立っている。彼女の足元にはボール。わたしが一度も奪うことの出来なかった……

そうだ……

負けたんだ。

実感がわいてきた。

また視界がぼやけてきた。さっきまでとは違う理由で。

わたし、泣いていた。ぬぐってもぬぐっても、涙があふれてくる。

「約束」

わたしは四つ足で、野木春江の足元にあるボールに近寄った。ボールに顔を近づける。舐めて綺麗にしないと。

わたしの眼前からボールが消えていた。野木春江が、足で後ろに回したのだ。

「おい、いいよそんなこと。てか、なに泣いてんだよ、バカかお前。初めてなんだろ。勝てなくて当然だろ。勝たれたらこっちの立場ねえよ。なにがそんな悔しいんだよ」

野木春江はしゃがんで、慰めるようにわたしの肩をさする。

「分かんないよ！　なんだか悔しいんだからしょうがないじゃない！」

「いや、木村、お前凄いのよ。……あたしのほうこそ見くびってた。ごめんな」

「全然凄くない。あつという間にへたばっちゃって、なにがなんだか分からなくなっちゃって、頭真っ白になっちゃって。……全然、凄くなんかない。みつともないだけで」

「陸上部だろうがなんだろうが、すぐそういう状態になるのは分かってた。陸上部だからって、百メートル走の勢いで何分も走れるもんじゃないだろ。だから絶対に二十分なんて無理だと思ってた。すぐふらふらしてきてたから、ほら見る大口叩きやがって、って心の中で小馬鹿にしてたんだよ。ところがお前、ふらふらしているくせに何度でも向かってくるんだもん。転んでも起き上がって向かってくるんだもん。ギリッギリした目エしながらさ。……なんなんだよこいつ、ってちょっと怖かったよ」

野木春江は立ち上がり、ストレッチをしている。

「ほめられてんだかなんだか分かんない。でも約束した以上、罰ゲームはやるよ」

「いいんだって、もう。こっちこそ悪かったよ。……半分……冗談だったんだよ」

野木春江は、ぼりぼりと頭をかいた。

「え……」

四つんばいのまま、啞然となつて野木春江を見上げていた。

見詰め合うわたしと野木春江。どれくらいそうしていただろう。ぷっ。

とわたしは吹き出した。

笑った。野木春江も声をあげて笑っていた。

わたしは、野木春江が差し出してきた手を握り、立ち上がる。その後も二人、笑いがなかなか収まらなかった。なにがこんなに可笑しいんだろ。自分でもまったくわけが分からない。フットサル部

のみんな、苦笑している。とどのつまり、野木春江というのは、そういう性格らしい。

「ひとつはつきりいつておきたいことがあるんだけど」

「なんだよ、木村」

「簡単そう、ってわたしいったかも知れないけど、バカになんかしてないからね。部長さんのこと、すごい上手だなんて感心して見てたんだから。入り込みやすくて面白そうだな、ってそんな感じに思ってただけなんだからね」

「そうか。ごめんな。……じゃ、あたしがボール舐めよつか」

「ボールが終わったら、床もピカピカにしてね」

「うそうそ、冗談だつて。勘弁してよ」

「分かってるよ。お返しただけ」

「ああびつくりしたあ。部長としての最後の大事な床舐めって、どんな部だよ」

「でも面白いね。フットサルって」

「面白いよ。でもいまのは別にフットサルでもないぜ。なんでもないつつつか、ほんの一要素。チームでやるゲームだから、いろいろあるんだよ。パスで組み立てたりとかさ」

フットサル部の練習終了後、誰もいなくなった体育館で、野木春江にボールの蹴り方など教えてもらった。もう疲れてへとへとだというのに、面白くて時間の流れるのも忘れてしまっていた。

翌日、わたしは全身酷い筋肉痛で、学校にいくのが辛くて辛くてたまらなかった。

3

「失礼しました」

進路相談室を出て、扉を閉めた。
ため息。

第一志望の千葉県立佐原南高校、やめといたほうがいいんじゃない

いかといわれた。もう少しレベルを落としたほうがいいんじゃないかといわれた。武田め。人のやる気を下げようなことしかいえないのか。

このダメ教師が！

お前んとも中二の娘がいて来年受験らしいけど、実の娘にもそんな突き放すようなこと平気でいうんかい！

しかしわたしのこれまでの成績を考えれば、確かにもっともなことではある。

わたしの成績がそれほど悪いわけではない、受けようという高校がわたしにとって高レベルすぎるだけだ。もちろん滑り止めも受けるつもりだ。でも自分が確実に受かりそうなところは、どこも通学に時間がかかり過ぎるのが痛い。我が家の財政を考えると、出来れば私立にはいきたくないし。

とにかく、そうやって滑り止めだつて受けようとしているわけだから、あとは第一志望校目指して頑張ればいいだけじゃないか。マークシートのはずだから、運で受かる可能性だつて充分にあるじゃないか。なのに周囲はどうして分かってくれないのか。

なにより佐原南高校には、女子フットサル部があるらしい。つい先日知ったことだが、これはかなりの魅力だ。女子フットサル部どころか男子サッカー部すらない学校だつて結構あるのだから。

周囲は色々いうけども、自分としては、もう大人の無理解と戦いながらも猛勉強していくしかないと決めている。悩むことなどないもない。

もう陸上部だつて引退したのだし、とにかくこれからは頑張つて勉強するぞ。一に勉強二にも三にも四にも勉強じゃ！

と決心したというのに、人間そう決めた通りには出来ない生き物だつたりする。

勉強そっちのけ、というほどではないものの……

わたしはフットサルの面白さにとりつかれてしまったのである。

野木春江のせい、いや、野木春江のおかげで。

先日、彼女との一件で、フットサル部のみんなとも仲良くなり、その後ちよくちよくと練習に混ぜてもらうようになった。野木春江がいてもいなくても。あまり頻繁にお邪魔するのも悪いので、週に二回ほど。

あとは一人で、児童公園や利根川の河原などでドリブルやキックの練習。時折、小学生の男の子たちと遊んだり。

成田市に素人ばかりの草フットサルのチームがあつて、そこにも参加させてもらった。土曜日曜の午前は、そこでおじさんたちにフットサルを教えて貰った。レベルはそんな高くないけども、だからステップアップには丁度よかった。

さて、中学校のフットサル部だが、そうこうしているうちにとうとう野木春江たち三年生も引退。でも野木春江は、わたしと同じように、しょっちゅう部に遊びにきてた。

と、フットサル三昧に思えるかも知れないが、それ以外はずっと勉強している。成田へのいき帰りだって、ずっと電車の中で勉強だ。平日は、だいたい六時頃に家に帰り、深夜二時くらいまで机に向かっている。

志望校と現在の实力とを考えると、こんな程度の勉強では生ぬるいのかも知れない。本当はフットサルなどやっている場合ではないのだ。でも、麻薬のように、すっかり全身侵されていて、どうにもやめることが出来なかった。

まあ最悪、電車通学すればいいや。

4

人間とは奇跡を起こすことの出来る動物なのだと知った十五の春。わたしはいま、千葉県立佐原南高等学校の体育館にいる。パイプ椅子に座って、他の数百人の男女と一緒に校長先生の話聞いている。

みんな硬い表情。制服もなんだかしつくりときていない。

当然だ。いま行われているのは入学式。わたしたちは、新一年生

なのだから。

そう、運か実力かは分からないがとにかくわたしは第一志望の高校に受かったのだ。

式は粛々と進み、無事に終わった。

新入生たちはそろそろと、校舎へと移動する。

周囲、知らない顔ばかり。

人が密集しているから、防虫剤のような新しい制服のにおいが強烈なおってくる。

だんだんと実感がわいてくる。

わたしは、高校生になったんだ。担任が絶対無理といていた佐原南に入ったのだ。

ザマミ口武田なんて気持ちは全然ない。むしろ感謝の気持ちで一杯だ。おかげで勉強に身が入ったのだし。本来受かるはずもなかったような、良い高校に入れたのだし。電車通学だつてしなくて済むわけだし。そして、はれてフットサル部に入部が出来るのだ。公園で遊んでいるだけじゃなく、ちゃんとした公式戦に出られるのだ。レギュラーになれるかどうかまだ分からないけど。

授業についていくのは大変かもしれない。でも頑張れば自分の身になるわけだし、頑張れる自信はある。ひたすらガムシヤラにやりきった受験勉強で、自分に意外なパワーがあることを実感したからわたしの未来は素敵なバラ色なのだ！

「お、ゴリラじゃん。なにがバラ色なんだよ」

背後から、どっかで聞いたような声。振り向くと奴がいた。

「高木ミット！」

「おっす」

同じ中学だった高木ミットの姿、と、やはり同じ中学だった山田浩二と花田義男。

「なぜ、なんであんたがここに！」

「この高校入ったからに決まってるだろ」

「でも、ここレベル高いんだよ」

わたしにとっては。いや、普通に考えてもそこそのレベルのはずだ。

「勉強面倒だったけど、でもま、そこまでの学校じゃないだろ」

なにこの嫌味発言。……しかしこいつ、バカだバカだと思って

たら、わたしよりずっと頭よかったのね。なんか凄いシヨックだよ

「それよりお前がいることのほうがびつくりだよ」

「ま、まあ、あたしの学力からすればもっと上を狙ってもよかったんだけどね。でもここ家近いから」

プツ、と高木ミットは吹き出した。

「失礼な。なにを笑うんじやい」

「秋の三者面談の日、トイレでお前のお父さんに会ったんだよな。でさあ」

「うわ、嘘ついてごめん！　こんなとこでそんな話しないでよ、他の人もいるんだから」

まったく、おしゃべりな親父め。帰ったら説教してやる。

「でもほんと驚いたよ、ゴリが同じ高校なんてな」

「あの、さしたる意味もなく子供の時のあだ名でいまだに呼ばないで欲しいんですけど」

「え、さしたる意味もないから慣れ親しんだ名前を変える必要がないんだろ」

ああいえばこういう。

「そもそもお前の本名なんていうんだっけ」

「木村だよ！　木村梨乃！」

「分かった。覚えとくよ、ゴリラ」

「ゴリラじゃねえ！」

周囲がみんな、驚いた顔でわたしのこと見てた……恥ずかしい。いさましくてかつこいいのに。ウホツて」

そしてミットと山田と花田の三人は中腰になって胸叩いてウホウホいいながら人込みを掻き分けて走り去っていった。

勉強が出来ようが出来まいが……男はみんな、死ぬまでアホじゃ。

「分かりません……」

高校生活三日目。現代国語の時間。わたしは、さっそくにしてやらかしてしまった。

「いまよ、先生がいったばかりだべ。理解できなくとも、ちゃんと聞こうとしてたんなら答えられるんはずだなあ、まんまでいいんだからよう」

モキチとかいうあだ名で呼ばれているらしい斉藤先生の声。ほんとに妙な訛りだよな。どこの出身だろ。って、そんな悠長なこと思っている場合じゃないのだ。ええと、いまさっき先生なんていつてたんだったけ。

先生、違うんだよ、ちゃんと聞いてなかったわけじゃないんだよ。必死にノートとってただけ。だって、先生すぐ消しちゃうんだもの。なんだっけ、ええと……

でもさ、分からないっていつてんのに答えさせようなんて、いじめじゃないのか。

「木村さん、これ、これだよ」

隣の女子のささやく声。彼女は自分のノートを指さしている。ノート一杯に、「体言止め」と書いてある。

「えと、からだっ……」

「からだ？」

「木村さん、違う」

隣の子、さっとノートにふりがな振ってくれた。そうだ、先生そういつてた気がする。

「あ……た、確か、体言止め……だと思います」

「正解。座ってよし」

わたしは恩人に、ゼスチャーで感謝の意を伝えた。
ふう。

無事というか、なんとかかんとか辛うじてというか、とにかく現国の授業が終わった。

休憩時間。

「さつきはどうもありがとう。ええと、畔木さん、だよね」

隣の子に改めてお礼をいった。

「気にしないで。なんだかノートとることに夢中になっているみたかったからね、しょうがないよね。木村さん、急に指されてびくってなつてて、笑っちゃったよ。なんだか可愛いくって」

「だってすぐ消しちゃうんだもん、あの先生。次のを書くわけじゃないくせにさあ」

今日が始めての現代国語の授業。入学して一週間もたつてないから、まだまだ次々と個性的な先生が現れてくる。

「わたしも授業の半分は上の空だったなあ。この先生どこ出身なんだろ、って考えてた」

「仲間！ そうそう、変な訛りなんだよね。それもあつて、余計に授業に集中できなくなっちゃって。黒板すぐ消すか訛るか、せめてどっちかにしろっつーの。……そうだ、話変わるけどさあ、畔木さん、部活決めた？ 確か明日まででしょ」

「まだ決めてない。運動部にしようと思っっているんだけど。木村さんは？」

「フットサル部に決めてる。知ってる？ フットサル。ちっこいサッカーみたいなの。授業の予習で精一杯で心の余裕がなくて願書も出せなかったけど、ようやく落ち着いたというか、要領が分かってきたというか。だから願書、今日出してくる」

「あ、この学校フットサル部なんてあるんだ。サッカー部がないって聞いて残念に思ってたんだけど、それじゃあ、わたしもそこにしようかなあ」

と、畔木景子のフットサル部入りは、実にあっけなく決まった。彼女は中学では卓球部とのこと。よくフットサルなんて知っているなと思つたら彼女、見た目が女の子っぽい女の子のくせに、なんと

小学生の頃は男の子に混じってサッカーチームに入っていたのと。運動が出来て、勉強も出来て、顔は可愛いし、完璧だ…… うらやましい。

ちなみにこの学校、畔木景子のいう通り、サッカー部がない。かつては存在していたが、随分前に廃部になった。一方フットサル部のほうは、何年か前にフットサル好きの女子生徒による同好会が発足、そこから女子フットサル部へと発展。現在は男女どちらもあるけど、そんなわけで女子部のほうが誕生が早いのだ。

ともかく、そうしてわたしと畔木景子と一緒に願書を出して、フットサル部に入ることとなった。

同じく新入部員である浜虫久樹とも仲良くなり、あっという間にわたしたち三人は親友と呼べるほどの関係に発展したのだった。

そうそう。春江先輩のこと、久樹は知っていた。試合をしたこともあるらしい。

「えっ、あの野木春江に勝負挑んだの？ なに考えてんのよ。勝てるわけないじゃん。十年たっても無理だね。梨乃が十年猛特訓してあいつが十年なにもせず怠けてたとしても、それでもどうか」

別にわたしから挑んだ勝負ではないのだが。それはともかく久樹ちよつと春江先輩を褒めすぎ、もしくはわたしを馬鹿にしすぎではなからうか。……でも、春江先輩ってそんなに凄い人なんだ。わたし、そんな人に気に入られたなんて、なんかくすぐったくなるな。先輩が本心からいつてくれたことかは分からないけど。

この頃、すでにわたしは同学年である野木春江のことを、春江先輩と呼んでいた。敬意を持っていたし、なんとなくほかのどの呼び方もしっくりこなかったのだ。部の練習に混ぜてもらっていた時も下級生ばかりで、みんなと一緒に彼女のことを先輩先輩呼んでいたというのもあるし。

当の春江先輩は中学を卒業するや否、春休みのうちに東京で一人暮らしをはじめた。そっちの高校に通うためだ。わたしと先輩は、離れたことによりかえって仲がよくなり、こまめに電話でやりとり

をするようになった。

佐原南での話に戻そう。仲のよい友達が出来たのはいいが、新入部員は最初の三ヶ月はまったくゲームなどをやらせてもらえなかった。それどころか最初の一ヶ月はボールすら蹴らせてもらえなかった。触っていいのは手のみ。要するにボール拾いだ。

ボール拾いに、筋トレ、有酸素トレーニング、柔軟、雑用。

一年生の初期段階のメニューはこれだけ。これしかやつちゃいけない。

ついついボールを蹴ってしまおうものなら、先輩にこっぴどく怒られる。未熟な新米のくせにまだ早い、と。わたしも何度か罰を受けたことがある。空気椅子をさせられたり、階段を何往復も走らされたり。

しかし新入りはボール蹴っちゃダメなんて、それは未経験者が多い中学での部活の考え方ではないのか。いや、中学でだって古臭い考えだ。一年にだって即戦力になる者や、きらきら光る逸材がいるかも知れないってのに、みすみす潰してしまうようなもので、部にとってもその一年生にとってもマイナスではないか。わたしはそう文句の声が出掛かるのをなんとか喉元でこらえていた。反対に、久樹はともその方針に従順だった。厳しい環境の中で長くフットサルをやってきてただけに、そうした先輩後輩の関係とか、伝統の重みとか、大袈裟かも知れないけどそういうものを大事にする気持ちがあるのだろう。わたしは小学生の頃は外で遊ぶくらいしか運動をしたことがないし、中学時代の陸上部ではかなりなあなああの上下関係だった。だから先に久樹の態度を見て感心していなかったら、きつと先輩と大喧嘩になっていたと思う。

学校で全然ボールを蹴れないものだから、我々三人は帰宅後、わたしの自宅近くの公園でよく練習をした。パス回しや、ドリブルなど。着替えるのも面倒で学校の制服姿だからあまり激しくは動けなかったけど。二人とも電車通学だから、あまりに土まみれ埃まみれで電車に乗るわけにもいかないし。

公園では久樹の技術を体で盗み、部活中はボール拾いをしながら先輩たちの技を目で盗んだ。隠れてボール蹴っているのがばれて先輩に怒られたり罰を受けたりもしたけれども、でも毎日がとても充実していて楽しかった。

夜のジョギングは日課にしており、雨の日も風の日も台風の日も先輩にしごかれて激しい筋肉痛に襲われている時だろうとかかさない。まあ台風の日はずがに少し手を抜くけど。

陸上部に入った頃からの日課なので、もう慣れっこでまったく辛くはない。ただ逆の大変さというのがあって、風邪引いて高熱が出た時に、今日くらいはジョギング休もうと思ったもののどうにも眠れず、結局普段通り走って体を疲れさせてようやく眠れたということがある。気持ちの問題かも知れないし本末転倒もいいとこだけどもとにかく走らないとどうにも眠れないのだからしょうがない。

わたしは結構骨太なんだけど、でも陸上やっている頃は贅肉もごつつい筋肉もまったくなかったから、かなり痩せているほうだった。でも最近、少しだけガッチリとした体つきになってきた気がする。先輩に鍛えられ、フットサルに適した筋肉が付いてきたからだと思う。

毎日ジョギングをしていると、たまに同じくジョギング中の高木ミットと出くわすことがある。一部共通のコースがあるためだ。家が近いから、ジョギングと関係なく会う時は会ってしまっけど。本屋とかコンビニとか。

しかしあらためて考えてみると、高木ミットというのはわたしの人生の中で、ちょいちょいと顔を出してくるキャラクターだよな。出会ってからもう十年以上にもなるぞ。ほんっと鬱陶しい。会えば決まってゴリラゴリラいつてくるしさ。

可愛い後輩たちも入ってきた。

自慢するわけではないけども、わたしはかなり成長したんじゃないかと思う。この一年で一番上達したのって、わたしではないだろうか。

足元の技術だけなら、わたしより上は何人もいる。わたしよりシユートが上手なものも、何人もいる。景子も、久樹もそう。でも総合的な能力を先輩が買ってくれたのか、わたしも久樹同様に、欠かさないレギュラーメンバーの一人になっていた。

二年になって、学校の勉強がますます難しくなった。

フットサルの合間に、全力で勉強し、

勉強の合間に、全力でフットサルをして、

全力蹴球の日々が過ぎていく。

勉強はみんなについていくのがやっとだけど、フットサルは頑張った分だけ成長出来る自信がある。

部の先輩たちも、浜虫久樹も、いつか抜いてみせる。

わたしは経験は少ないけど、それでここまでやれているんだから、努力を怠らなければ、もっともっと伸びるはずだ。

そしていつか野木春江を……

五月も終わりにになると、一年生たちがボールを使ったトレーニングに参加するようになった。

それまでは、一年生なんか絶対に抜かされてたまるか、と強気のような弱気のようなことを思っていたのだが、それは杞憂に終わるそう。

山野裕子、経験者というからどんなかと思ったけど、雑な感じで去年のわたしとそんなに変わらない。

佐治ヶ江優は感心するくらいリフティングが上手だが、ゲームになると、気が小さいのか全然勝負にいけない。試合というのは技術を自慢するものではなく、勝つためにするもの。このままなら、絶対に使われることはないだろう。中学の時も一度も公式試合に出してもらったことがないらしい。つまり新人だから、一番の後輩だから

ら、と縮こまっているわけではないのだ。試合は性格が出るからね、フットサルに限らず人生も一生そんな感じで終わるんじゃないだろうか。知ったことじゃないけど。

……またやってしまった。

向上心を持つのはいいが、他人を見下すような考え方をしてしまったら、他人の不幸を喜ぶような考え方をしてしまったら、そのたびにそんな自分が嫌になる。

「フットサルはチームスポーツだよ！」と春江先輩に怒られそうでもわたしは、聖人君子なんかにはなれない。

夏がやってきた。

三年生の引退も近いある日、わたしは金子部長に部室へと呼ばれた。そして、フットサル部の部長になるように頼まれた。

青天の霹靂とでもいおうか、まったく予期していないことだった。わたしは、自己を成長させたい気持ちで一杯で、わずらわしいことは御免だった。

ただひたすら、技術力を磨きたかった。

他人を蹴落とそうとも、レギュラーの座を手放したくなかった。内申点なんかどうだっていい。いま、フットサルが一番大事だ。

「浜虫さんのほうが適任だと思います」

即決で断った。

悔しいけどわたしより久樹のほうが遥かに技術がある。この世界での経験も長いし、教えるのも上手だし、優しいし。と、そのような理由で。

確かにそれは事実には違いないけども、実は部長なんか面倒で興味がないだけ。フットサル部に入ったんだから、ひたすら練習して他人を追い抜くことだけを目標にしたって文句をいわれる筋合いはないと思う。

でも、金子先輩があまりにくどいので、あらためて後日に返答することにした。

考えは変わらないと思うけど。

学校帰り、セカンドチキンバーガーで景子と久樹に相談してみた。相談というより、二人の驚く顔を見てみたいというのが本音だ。二人とも、たいして驚いてくれなかった。でも、しっかりと話を聞いてくれて、考えてくれて、なんだか悪いこととしてしまったな。どうせ断る話だというのに。

結局、景子の結論は、「梨乃の好きにしたら」。もちろん、景子らしい優しく暖かな意味で。

「絶対に受けるべき！」

意外にもわたしの両肩を掴んで迫ってきたのは久樹のほうだった。「大変に名誉なことだし、自分のためになるよ。評価されるし、成長につながる。フットサルの世界広がるよ」

「とかいって、久樹に話が回ってきたら面倒だからじゃないの？」
さすがに、わたしが話を蹴ったら、今度は久樹に声がかかるだろう。本来、誰がどう考えても立派な部長になれそうなのは久樹のほうなのだし。

「見破られたか。ほんと面倒だからね、部長なんて。中学の時に懲りたよ。あたしはただフットサルやっていただけだから。それに、親友が部長なほうが、色々と気が楽だし」

その日の夜。

例のごとくわたしはジョギングをしていた。

わたしたち三人がよくボール遊びをしていた児童公園の横を通る。切れかかってちかちか点滅している街灯。

ブランコに誰か腰かけている。

久樹だ。

学校の制服姿。

わたしには気づいていないようだ。

久樹のすぐそばには、ボールが転がっている。フットサル用の四

号球。

白かったはずのブラウスは、埃をかぶってすっかり茶色になっている。

ずっと、一人でボール蹴ってたんだ。

ブランコに座ったまま、久樹は下を向いている。

泣いていた。

誰もいないと思ってか、表情を隠すことなく嗚咽していた。口元を引きつらせながら、まるで小さな子供のようになり、泣いていた。

そう。後日になって景子にいわれるまでもなく、わたしは知っていたのだ。

久樹がどんなにフットサルに打ち込んでいたか。

小学校に入るよりずっと前からフットサルをやっていたんだから。

体は小さいけれども、その分俊敏だし、テクニックだって本当に凄い。

もしかしたら野木春江とも対等に渡り合えるかも知れない。

普段は謙遜しているけれど、自分の実力には相当な自信があったに違いない。

技術、経験、戦術眼、指導力、どれをとっても一番なのならば、これ以上に部長にふさわしい人材がいようか。つまり、部長に推薦されなかったということは、そのどれかを否定されたということになるのだ。

経験二年のわたしなんかが部長に推薦されたことで、きっと久樹の自尊心はスタボロに引き裂かれたのだろう。

考えてみれば、そうなるに決まっているよな。なんで気づいてあげられなかったんだろう。

面白半分に打ち明けたりして、本当に悪いことしてしまった。

わたしに部長になるようにあんなに強く勧めてきたのも、自分の心が崩れないようにするためだったのだろう。

もしもわたしが部長の座を辞退したら……

きつと、久樹に殺される。

そうならないまでも、久樹が自分を殺してしまう。きつと、フットサルを永遠にやめてしまう。

そんなの、嫌だよ。

久樹には、いつまでもフットサルを続けて欲しい。

わたし、これまで自分のことしか考えてなかった。それでなにが悪いと思っていた。

他人の欠点ばかり探して、心の中での自分の居場所を確保して安心してた。

反対に、久樹はあんなに傷つきながらも、人のことを考えてくれている。

やっぱりわたし、部長になろう。

久樹のためではなく、わたし自身のために。

わたし自身のために部長になり、頑張ることが、久樹や、他のみんなのためになるように。

どこまで出来るかは分からないけど、

やってみよう。

第六章 天気不安定

1

天気予報の通り、雨が降り出してきた。

物語なんかだと、わたしのような落ち込んだ気分にいる主人公にはシトシト雨と相場が決まっているものだ。しかし漫画でも小説でもない現実には、わたしの気分などお構いなし、この世の終わりかと思えるような、滝のような大豪雨。太平洋を大型台風が北上してきており、その影響らしい。

屋根の下だからとりあえず濡れることはないものの、湿気が肌にまとわりついて服に染み込んできて気持ち悪い。

わたしは駅のホームの待合室で、途方にくれたようにベンチに座っている。

四人がけベンチが二つ向き合うガラス張りのこの空間、けして広いものではないが、わたし一人だけだとがらんとして寂しい。激しい雨がガラスにびちびちと当たってきて、外がまったく見えない。あと四十分もここにいなければならない。

成田いきの電車に、タッチの差でいかれてしまったのだ。

時刻表を確認して余裕を持って家を出たつもりだったのだけど。

あの件があつて以来、ボーツとしてばかりいる。

なにも考えないようにしようと思っていると、かえってそのことばかり浮かんできくせに、じゃあそのことをとことん考えてやろうじゃないかと開き直ると、今度は頭が真っ白になってなにも考えられなくなる。どうであれ常に変わらないのは、自分がたまたなくみじめで不快な気分にいるということ。

いつそ本当になにも考えられなくなってしまうえばこんな気分には苦しまないですむのに。ちょっと辛い目にあつた程度で自殺するなんてバカのやることだと思っていたけど、いまは、気軽に自殺してしまえる勇気が羨ましい。

ガタガタと音を立てて待合室のドアが開いた。

「ライリライリライリ〜！」

能天気な歌声。

イヤホンで音楽を聴いている高木ミットだった。

「あれ、お前なにやってん」

イヤホンの片方を外した途端、シャカシャカとラテンっぽいリズムの音楽が洩れ聞こえてくる。どれだけのポリュームで音楽聴いてんだか。

「電車待つてんだよ」

わたしはぼそりと、つれない返事をする。

「当たり前だろが。駅のホームなんだから」

ミットはドアを閉め、「よいしょっ！」とうるさい声を出してわたしの隣に座る。どうせ、他が空いとんのになんで隣やねん、などと突っ込んで欲しいのだろう。

「なんで隣やね〜ん！　って突っ込めやコラ！」

「黙っててよ」

「ノリわる！」

静かになった。

何分経つても誰もこず、相変わらずわたしたちの二人きり。

ミット、膝をぱたぱたと開いたり閉じたりしていたが、突然立ち上がり、両腕を広げて伸びをする。

「あゝ今日もいい天気だ！」

雨じゃアホ。と思っただが、口には出さない。

「雨じゃない！」

また自分でツツコミ入れている。

「なんかノリが悪いな今日は。いつもならリアットかましてくるところだろ。ウホッって」

ダン！

と、わたしは床を踏み鳴らした。と同時に痛みに顔を歪めた。

「おい、大丈夫かよ」

「……だい、じょうぶ。……もう！ あんたがイライラさせるからだよ」

足を怪我していること、すっかり忘れていた。

普通にしている分にはそれほど痛みはない。歩くことも平気だ。しかしぶついたり、激しい運動をしようものなら、骨と骨を捻られるような、関節にヘラを差し込まれてねじられるような、そんなとてつもない激痛に襲われる。

「ねえ」

ミットの顔を見上げた。

「ひま？」

「ひまって、おれも用事があるから電車に乗ろうとしてんだろ」

「大事な用？」

「……そうでもない」

「じゃ、付き合ってよ」

2

成田氷崎台総合中央病院。

大きそうな病院を想像してしまう名前だが、古く小さな、単なる町の病院だ。

303号室に、景子が入院している。

ここから徒歩数分のところに景子の自宅がある。今後しばらく通院することになるので、それを考えてこの病院を選んだとのこと。

先日、景子は下校途中の道で自動車にはねられたのだ。

わたしのことを助けるために、身代わりになって。

しばらくして救急車が、少し遅れて警察の車がやってきた。

「大丈夫だから」

景子は担架で運ばれながら、わたしに笑顔を向けた。

激痛に顔を引きつらせながらも、それでもわたしに優しく笑ってくれていた。

でもわたしはなにもいえなかった。
ただ呆然と立っているだけだった。

わたしは、警官に色々尋ねられ、そして車に乗せられて警察署へいった。

そこから自宅に電話をして、お父さんと呼んだ。

自動車のスピード違反。

事故の原因は、そう片付けられた。

スピードを出しすぎていたため、ブレーキが間に合わなかったとでも、本当の原因はわたしの不注意だ。

わたしがつまらない意地を張って、景子と喧嘩なんてしてしまったから。

全部、わたしのせいだ。

警察署からの帰りに、景子の家に電話をした。景子のお父さんが出た。病院にはお母さんが付き添っており、命に別状はないとのこと。ただ、腰の骨に少しだけヒビが入っており、入院が必要らしい。店の車で、景子の自宅に向かうことになった。お父さんが、向こうのお父さんにお詫びしなければならいから、と。

景子の家に着くと、景子のお母さんも帰ってきていた。入院をするので、着替えなどの用意のためとのこと。

わたしは景子のご両親に頭を下げて謝った。

お父さんも一緒に謝ってくれた。入院費用はこちらで持つから、と。でも景子の両親は聞かない。うちの娘が勝手に飛び出したのだから。安静にしていれば後遺症が出ることもなく完治するとお医者さんもいつているのだから、と。

「それよりもうちの娘が、命の危険に身をさらしてまで友人を庇おうとした。景子が、そんな一生の友達を持っているということが嬉しいんですよ」

景子のお父さんの言葉、今後のわたしの人生にとって宝となるものだった。でもこの時のわたしは、なにも考えられず、ただごめんなさいごめんなさいと繰り返すことしか出来なかった。

それから何日も経ち、今日、初めてお見舞いをする。つまり、あれから初めて景子に会う。

いまわたしは、病院の前にいる。すぐ後ろには、無理矢理引っ張ってきた高木ミットが立っている。

すぐにお見舞いにいかない。と、そう思っではいたのだが、どうにも気が重く、まだ景子が落ち着いていないだろうとか、わたしも足を怪我しているのだからとか、口実を作っては何日も先延ばしにしてきた。今日だって、豪雨や、ちょうど電車にいかれてしまったことを理由に引き返してもおかしくはなかったのだ。

高木ミットと偶然会えてよかった。一応は共通の知り合いだし、わたしたち二人でお見舞いにいっても不自然なこともない。

でも、本当によかったといえるかどうか。

お見舞いにきて、景子が喜んでくれるかどうか。

担架で運ばれながら、景子は笑顔を見せていたけれど、内心はどうなんだか。あの時はそういう気持ちでも、いまは激怒しているかも知れない。

だって、わたしが景子をあんな目に遭わせといて、すぐにお見舞いにもいかなかったのだから。

恨まれていても、なにもいえない。すべてわたしが悪いのだから。「この303なんだな。じゃ、いくぞ」

ミットはわたしの手を強く握ると、ぐいと引っ張った。普段のわたしなら、気安く触んじゃねえとブン殴るところだが、今日はそんな気力はない。むしろ、リードしてくれて感謝すらしている。

病院の中に入る。

金網ガラス窓のある古臭いエレベーターに乗る。

ごうんごうんと低く唸りながら、ぼろエレベーターはなんとか三階へとたどり着いた。

303号室の前到了。

四人部屋らしい。

入院患者の名前が書いてあり、その中には畔木景子の名前もある。

「じゃ、おれここで待つてるからよ」

ミット、小声で呟きわたしの背中を押した。

「一人じゃ入りにくい。一緒にきてよ」

わたしはミットに今回起きたことの全てを話していた。わざわざ付き合ってもらうのだから、当然のことだ。

「ダメ。その、入りにくいってのを乗り越えるのが大切なんだよ」

こんな時だけ真面目なこといつちゃって。

でも、確かにそうかも知れない。

よし……

「じゃ、いつてくる。待つててよね。絶対、ここにいてよね」

「分かったよ。つつかそれほどのことじゃないだろうに」

「あたしにはそれほどのことなの」

ドアを軽くノックし、開けた。

しんとしているかと思ったら、少しだけ騒がしかった。四人の患者が入院しているわけだが、テレビがついていたり、お見舞いにきている人がいたり。

それぞれのベッドの周囲には、カーテンが引かれて、それぞれのプライバシー空間を確保している。

窓際の、わたしから見て右側のベッドのようだ。カーテンレールから、畔木景子と書かれた名札が下がっている。

わたしはゆっくりと進んだ。

カーテンは半分開いていたので、少し歩くとすぐにベッドが見えた。

景子の姿。

ベッドを折り曲げて、上体を起こしていた。

わたしと目があつた。

景子はわたしに気付いてもまったく驚くふうでもなく、目を細め、やわらかく微笑んだ。

「あ、あの……あの、ええと……」

わたしは景子にどんな言葉をかけようと考えていたのか、すっかり忘れてしまっていた。舞台上上がった新米役者のように。なんだってこんなに緊張しなくちゃならないんだ。

「お見舞い、きてくれたんだ」

「そ、そう。……遅くなつて、ごめん」

「きてくれてありがとう。嬉しいよ。でも、たいしたことないのに。腰の骨に、ほんのちよつとヒビ入っているから動いちゃダメなんだけど、でも一週間もすれば病院の中くらい歩いてもいいって。二週間で退院の予定。全治一ヶ月だから、当分は走ったりは出来ないけど」

「そう、なんだ」

よかったね、といってよいものか。

「梨乃のほうこそ、足、怪我したって聞いたよ。大変だったでしょう、ここまでくるの」

「たいしたことないよ」

「どんな怪我？ 骨折？ 捻挫？」

「右足の捻挫。膝と足首、どっちも。……景子が救急車で運ばれた後さ、警察の人が現場検証して、その時にいったんだけど、景子に助けて貰わなかったら、あたし、大怪我してたろうって。車の人走り寄る景子を見て、あたしたちに気づいてブレーキをかけたんだって。だから、景子、いなかったら、あたし、もしかしたら、死んじゃってたかも知れない」

「そうだったんだ。でも、それなのに二人とも命に別状なくてさ、よかった」

「よくないでしょ！ 景子、関係ないじゃん。……あたしなんか、助ける義理なかったじゃん。……なのにな……ほんと……バカじゃないの！ そっちこそ、死んじゃってたかも知れないんだからね！」

涙が出てきた。

ポロポロと。

腕で拭っても拭っても、大粒の涙が零れ落ちてくる。「うるさい

よ！」という中年女性の苦情に、済みませんと謝るものの多分口が引きつって言葉になっていなかったと思う。

「確かにわたし、バカだよねえ」景子はのんびりとした口調でいう「でも、体が勝手に動いちゃったんだもの。しょうがないじゃない……それで、全然後悔してないんだから、ほんとどうしようもないね。……まあ、要するにわたしたち、友達ってことだね」

しみじみと、景子はそういった。

わたし、もう少しクールで、自分勝手な、嫌な奴だと思っていたのに、

こんなことで、

涙がぼろぼろと、

ぼろぼろと、

こぼれてきた……

景子……

ほんとうにありがとう。

大好きだよ。

酷いこと色々といってしまったけど、でも、最初から、全然嫌ってなんかいなかったんだから。

わたしは鼻をすすった。

「友達、なんかじゃ、ないよ」

「じゃ、なに？」

景子、おかしそうに笑っている。

「親友……違うな、大親友！ あたしと久樹と景子は、大大大大親友だ！」

「そんな大袈裟な。……あ、済みません高柳さん」

「景子……ごめんね、色々と、本当にごめんね。それと、ありがとう」

「なにがよ。さっきから気持ち悪いなあ」

「見捨てないでくれてさ。縁切られることも覚悟してた」

「なにをいまさら。親友なんですよ」

「そうだね」

「それにさ……」

「なに？」

「ハナキヤのイタリアンジェラート、まだおごつて貰ってないからね。それまでは、簡単に縁なんか切れますか」

「まだ覚えてるよ、せこつ。……じゃあ、縁切れたら困るから、絶対おごらな〜い！」

嘘だよ。もつと美味しい物、そのうち食べにいくよ。

「うわ……初めて梨乃にやり返された」

どちらからともなく笑い出した。

高柳さんごめんなさい。

3

わたしと景子の仲は、完全に修復され、これまで以上に絆の強固なものとなった。

しかし、ことはそう簡単には終わらなかった。

教室で、わたしは孤立してしまっていた。

わたしと景子とがギスギスとした感じになっていて、そしてあんな事故が起きた。そのため、わたしが景子を事故に遭わせようと突き飛ばしたのでは、そんな噂が流れているらしい。

事実を話しても、みんな半信半疑。刺激的な噂話のほう広がるスピードが圧倒的に速く、結局、半信半疑は無信全疑へと塗り変わる。

でもどうせ、もともとこの件、悪いのは全部わたしなのだ。あまり釈明めいたことをしたくもなかった。景子が悪くいわれているわけでもないし。放って置けばすぐに元通りになるだろう。

というのは自分にいい聞かせようとした嘘で、やはり、いままで仲の良かったクラスみんなに冷たい態度を取られるのは辛かった。でも、弁解しようとすればするほどかえって疑われたり、もしかしたら景子のこと悪くいわれるのではないかと、それが怖かった。

放課後。

教卓のそばで、田島秀美と石川直子が、わたしのことを見ながらひそひそと話している。時々によりと笑ったり、嘲るような表情が混じる。

ここ数日の、もう慣れっこの光景のはずなのに、耐えなければならぬことのはずなのに。疲れていて自制心を失っていたのだろうか。プツ、とわたしの脳の血管が切れた。

席を立ち、二人のほうへゆっくり歩いていく。

二人は、怪訝そうな表情でわたしの近づいてくるのを見ている。「楽しい？」

わたしはニツと微笑むと、次の瞬間、教卓を蹴り倒していた。ガチャンという音が響き、田島たちはひっと悲鳴をあげた。

蹴った足よりも、軸足のほうに強烈な痛み。右足を怪我していることを忘れていた。そして、その痛みで我に返った。

わたし、なにやってんだ。

その様子を、たまたま廊下を歩いていたカマバロンに見られてしまい、職員室に呼ばれて怒られた。

おとなしく小言を聞いて反省のそぶりを見せていた効果か、説教の時間はとても短く済んだ。それでも部活には三十分ほど遅刻することになってしまったけど。

でも、どのみち怪我人のわたしはみんなの練習を外から見ているだけだ。ある程度怪我の具合が良くなるまでは、副部長の久樹に全権を任せている。

わたしは部室でトレーニングウェアに着替え、体育館に向かった。通路の窓から、フットサル部の練習が見える。

浜虫久樹の大きな声が響いている。

ここ数日間の久樹の指導は実に素晴らしいもので、紅白戦を見ても、回を追うごとに、連携が良くなっているのが分かる。

現在ゴレイロを置かないでＦＰだけで紅白戦をしているところだ。

隣では、武田晶が衣笠春奈にゴレイロの指導をしている。ゴレイロの練習をしたことのあるわたしと景子が、揃いも揃って怪我してしまったものだから、そのための臨時の措置だ。せめてルールと、ポジショニングのコツくらい覚えてくれればいいと思っている。四秒ルールやバックパスでいちいち笛を吹かれていてはゲームにならない。

「はい、ちよつと休憩！」

壁際に置いてあるタオルや水筒を目指し、つまりこっちのほうに向かつてぞろぞろと歩いてくる。

「……ん？ 梨乃がどうしたって？」

篠亜由美と真砂茂美がわたしのことを話題にしていたようで、それに夏木フサエが興味を持ったようだ。

「聞いたことありません？ 木村先輩が景子先輩のこと突き飛ばしたんだって話」

「ああ、知ってる知ってる」

「あたしも、聞いたことあるよ」

脱力感。

なんだ……

ここでもか。

ここも教室も、どこも結局、同じなのかな。

と思つたら、

「そんなはずないのにねえ」

「そうそう、二人がどんなに仲がいいか知らないはずないのにね」

「部長のこと勝手に犯人に仕立て上げて、無視したりしてるらしいよ」

「ほんと頭くるよね！」

みんなの言葉に、体の奥からじわつと温まってくるような、くすぐったいような、そんな不思議な感覚に全身を包まれていた。

「え、あたし全然そんなこと知らなかった！ ふざけやがって。部長の教室に殴りこみかけてやる！」

山野裕子が髪の短い頭をパシパシと叩きながら叫んでいる。

「ほんとに、全員で抗議にいかないか」

「やめときな！ くっだらなない！」

久樹の一喝に、ざわざわした空気が一瞬で静まり返った。

「女つつーのは、こういう時の結託というか、行動力が凄いからねえ。ほんと、おっかない。あのさあ、部の人間が余計なことしようもんなら泥沼だよ。そんなくだらなない疑いなんて、すぐ晴れるからいま部長のために出来ることは、ひたすらトレーニングすることだけ！ あ、あと王子は赤点取らないように頑張ることもね」

「久樹先輩、一言多いス」

山野裕子、慄然とした表情。どっと笑いが起きた。

「よし、それじゃ休憩終わり、練習再開するよ！」

すごい、久樹。大人の対応だ。

勉強しないから成績悪いだけで、とても賢い子なんだな。

みんなにも、本当に感謝だ。

元気出た。

わたし、この学校入って良かった。

この部活に入って良かった。

みんなと知り合えて良かった。

4

お父さんが配達にいったのを見計らって、

「ヒデさん……」

声をかける。

今日はヒデさんが店番だ。お店の掃除をしているところだ。

「手伝おうか」

「ありがとう、梨乃さん。でもいまは、ぼく一人で大丈夫ですから。上で勉強してて下さい」

なんかまだ、お父さんとは話しくくて、お店を手伝うのはヒデさんしかない時にしている。

「ヒデさんてさ、ほんつとに仕事好きだよね」

わたしはヒデさんのいうことを無視して、サンダル履いて床に降りる。

「好きですよ。豆腐を作って、売って、お客さんに食べていただいて。そしてまた豆腐を作って。楽しいじゃないですか」

「真面目だよなあ」

「そつでもないですよ。ここに雇ってもらつまでは、まあ荒れた生活してましたから」

「嘘だあ。想像出来ないよ」

お客さんが入ってきた。中年の女性。吉岡さんという近所の主婦だ。

ヒデさんを押しのけて、わたしが袋詰め、レジ打ちをやつてしまふ。

「ありがとうございます！」

吉岡さん、出ていった。

「最近よくお店を手伝ってくれますね」

「……お父さんに、あんまり借りを作りたくないんだよね」

「借り？」

「親なんだから、そりゃ娘を養う義務はあるんだろうけど、だからつて世話になりっぱなしなのもなんかさ」

でかいことの一つもいいにくくなるし。

「でもそれ、黙っていちゃ意味がないじゃないですか。まあ、ぼくが全部いつちやつてますけどね」

「やだ、やめてよ！」

ヒデさんの肩を軽く叩いた。

「親の手伝いなんて、素晴らしいことじゃないですか。でもね、養ってもらつたことを借りをすることだと思う、その考えはよくないですよ」

「分かつてるよ。……ま、単純にいうと、愛されてなかったらどうしようなんて思つたりして、その予防線張つてるだけ。仕事の手伝

いしとけば、すこし自分の気持ちが楽になる気がする」

「血の繋がってない親子みたいじゃないですか。そういう悲しくなるようなことというのはやめて下さいよ」

「だってさ、娘にあまりお金もかけたくないみたいだし」

「梨乃さん……お父さんのこと、本当にそんなふうに思っているんですか？」

ヒデさんの表情に変化はないのだけど、なにか空気が変わった。

ほんの数秒だけど妙に長く感じられた沈黙の後、ヒデさんは、

「なにをいつているんですか。逆ですよ！ お金、ためてるんですよ。梨乃さんのために」

「え……」

貯金、

お父さんが、

わたしのために。

「それ……本当？ ヒデさん」

ヒデさんは頷いた。

「嘘いつてどうするんです。いくつか分からないけれど、大学の学費につて。それと最近、結婚貯金も始めましたよ。早すぎるんじゃないかっていいましたけど、儲けてる商売じゃないしのんびりしてたら間に合わないから、つて。だから最近、お昼は自分とこの豆腐一丁の日もあるくらいです。収入が同じなんだから色々と削らないと貯金なんか出来ないでしょう。それを、自分に愛情ないからなんて勘違いもいいところです！……このこと全部、内緒にしてくださいね。ぼくがクビになっちゃいます」

お父さん、そんなことしてたんだ。

わたしなんかのために。

バカだな。

豆腐だけなんて。

体壊したらどうすんだよ。

「そっか。……ヒデさん、教えてくれてありがとう」

わたしはサンダルを脱いで、家上がった。
二階の自室へ。激しい脱力感に襲われて、階段昇るのが一苦労だった。

まだ夕方だというのに、わたしは布団を頭からかぶって寝てしまった。

5

「お前ら、こいつがどんな気持ちでいるか、想像も出来ねえのか！」
突然、高木ミットが切れた。

今日はわたしでなく高木ミットが教卓を蹴飛ばした。クラスの全員がいる、帰りのホームルームの時間に。

先週と変わらぬ、みんなのわたしへの態度に。

何故か、高木ミットが切れた。

担任もびつくりして、言葉も出ない。

「畔木を突き飛ばしたなあ？ なにそれ？ バツカじゃねえの。なんでそんなことしなきゃいけないの？ あおう、病院にお見舞いについて、部活の試合の作戦考えてたり、二人仲良しなんですけど相変わらず。畔木、今度の週末に退院するから、またこれまで以上に仲良しなところをお見せすることになると思うんですけどねえ。……どうでもいいんじゃないの、本当のことなんて。単に面白がってるだけなんだろ。でもそれでさ、こいつがどんな嫌な気持ちになるか、考えたことある？ 喧嘩しちまって嫌な気分になってる時に、親友が事故に遭って入院しちゃったんだから辛いよな。じゃ、支えてやりやいいじゃん。なに反対に、ネチネチいじめてんの？ だいたいお前らよ」

「もういいよ！」

わたしは声を張り上げ、ミットの言葉を遮った。

せっかく、ほとぼり冷めるまでおとなしくしていようと思ったのに、台無しじゃんか。バカミット……

なんでなのかわからないが、不意に涙が零れ落ちてきた。

最近わたし、すぐ泣くよな。しかも、大嫌いなあいつの前でばかり。

涙、見られるのが嫌で、机に突っ伏してしまった。
でも、泣き声が洩れてしまう。

堪えようとしているのに、嗚咽が、涙が止まらない。
悲しいわけじゃないのに、なんだこの涙は。

「まったく余計なことを」

放課後。わたしとミットは、校舎裏の人気の少ない場所にきていた。

「まあな。……あんなの、おれのキャラじゃねえよなあ」
なんだよキャラって。

「景子が退院すれば、全部元に戻ったのに」

「そうだけだよ。でも、なんかやじゃん」

「嫌もなにも、あたしのことなんだから。……でもさ、ありがとうね。あたしなんかのために」

「お、おう！」

「ブスで粗暴なゴリラなんかのためにさ」

わたしはようやく、笑顔を作ることが出来た。

面食らったような顔のミットだったが、やがて済ました顔に戻って、

「バカだな。お前ひょっとして、自分で気づいてないの？」

「なにが？」

「お前……あの……あのよう……お前さあ……」

なに、モジモジしてんだ、こいつは。

「早くいいなって、うわっ！」

ミットがいきなり、わたしの両肩に手を置いた。そして声を裏返らせながら、

「お、お前っ、むちゃくちゃ可愛いッ！　と思うー！」
え？

いま……

なんて……

ええっ？

わたしの頭はすっかりパニック状態になっていた。

「ちよ、ちよっと、冗談なら……」

「冗談なんかじゃねッ！」

そんなこといわれても。

なんて返せばいいんだ。

そもそも、わたし、なんて思えばいいんだ。この状況を。どう考えればいいんだ。

なんなんだ……この展開。

「わお、ついにいつちまった。ああすつげえ恥ずかしいな、おれ。きつといま宇宙で一番恥ずかしい男だ。……恥ずかしいついでにいつちまうぞ、聞けよ……」

またわたしの顔をまじまじと見た。

「おれと……」

ミットの顔、真っ赤になっている。

わたしたちは、一瞬、見つめあった。

そしてミットの口が、ゆっくりと動く。

6

「おれと、付き合ってください……」

最終章 天使の羽

1

朝。

なにもしなくとも毎日勝手にやってくるものだが、でも今日の朝は普段となんだが違う。

それはそうだ。

関東高校生フットサル大会、千葉県地区予選の日なのだから。茂原藤ヶ谷との試合の日だ。もしも勝利したならば、午後にもう一試合、二週間後の千葉県決勝大会への進出を賭けて勝負することになる。

わたしはいま、フットサル部用の黒いジャージ姿。

洗面所で、顔を洗っている。

鏡に映る自分の顔を見る。

なんととはなしに、いろんな表情を作ってみる。

鏡って、いつも自分に都合の良い角度からばかり見てしまうから、客観的な自分の顔ってよく知らない。記念写真なんかも、あまりあとから見ることもないし。

自分、すごいブスなんじゃないか。

いやいや、結構いけるんじゃない？

その日の気分で、自分の顔への自己評価って激しく変わるよな。結局、自分がどう思うかってことだ。

顔だけじゃない。それは人生においても同様。遭遇する様々なこと、良いと思うか悪いと思うか、それは自分の脳が決めるのだ。

それなら、何事においても良い方向に考えるのがいいよね。

……と、分かっちゃいるものの、それがまた難しいのだけだ。

なんだかとりとめのないこといつまでも考えているな、わたし。もう一度、鏡に映った自分の顔をまじまじと見てみる。

幼い顔してると思ってたけど、

ちよつと大人の顔つきになってきたかな。

心は相変わらず子供なのにさ。

体が大人になっていくから、心も成長していくのだろうか。

心が成長するから、大人の顔になっていくのだろうか。

どうなんだろうね。

「空いたか？」

お父さんが入ってきた。

「うん」

タオルだけ手に取って、場所を譲る。

今度はお父さんが顔を洗いはじめる。お父さんのは綺麗にするための洗顔というより、単に目覚ましのためだけだ。

それが済むと、朝食の時間。

以前は特に、ご飯を誰が作るとは決めておらず、夜の残りだけの日もあった。最近は、すべてわたしが作るようにしている。お父さんの昼ご飯もだ。最近といっても、数日前にやり始めたばかりだけだ。

お昼豆腐一丁、なんてしなくたって、しっかり工夫して料理すれば、節約しつつも栄養だつてちゃんと摂れるんだから。なら工夫しなきゃ損だ。

「強いんだろ、そのなんとかって高校」

ちゃぶ台を挟んで、お父さんとわたし、畳の上に腰おろして向かい合っている。

お父さん、味噌汁をすすっている。

「強いっていうか、とにかく体がデッカイんだって。みんな男みたいに筋肉ガツチリしてて、殴ってもビクともしないような体してるって話。サッカーと違ってガツと当たったりは禁止だし、だからそれがそれほど向こうに有利とも思わないけどね。フットサルなんて、基本は床の上をボール転がすスポーツだから」

サッカーもよく知らないお父さんに説明してもしようがないんだけど。

「ふうん」

なんか、分かったふりしてるよ。

わたしも、味噌汁にする。大根とダシだけのシンプルな味噌汁。わたしは親子はすっかり通常の関係に戻れた。もともと、わたしが一人で変な方向に暴走して遠くへいってしまっただけで、お父さんは最初から元の場所にいたのだ。

お父さんの再婚の話はまったく進展がない。その件、現在となつては伯母さんよりもむしろわたしのほうが急かしているくらいだ。するなら早くしてしまえ、と。お父さんには幸せになつてもらいたいし。

「あのさあ……あたし、大学、いこうと思う」

「そうか」

特に驚いた様子もない。

「かなり勉強やないとダメだけど、千葉国立とか。あとどつか奨学生で、なんてのもあるし、とにかく無理して貯金なんかしないでもいいんだからね」

「無理も貯金もしてねえよ。ん、ヒデの奴、なんかいつてたか？」

「なぐんにも。……あと、スポーツ特待生なんて制度もあるじゃん。どこの大学がどうで、なんて全然調べてないけど。だからとにかく、今日の試合は負けられない」

まあ、スポーツ特待生よりは猛勉強して千葉国立のほうが遥かに可能性高いと思うけど。春江先輩くらいのフットサルの実力があればともかく。

最近わたし、食育、スポーツ栄養学というものに興味を持っている。漠然とだけど、そんな仕事に就けたらいいなんて考えている。結構子供が好きなんで、スポーツやっている子に食のこと、教えられればいいと思っている。でも、そのためには、最低限、大学くらいは出ないと。

浪人、留年しない限りは、五年後には就職か。景気、どうなっているだろう。わたしのような落ちこぼれが好きな仕事に就くために

は、よほど雇用情勢が良くないとならないから、気になるところだ。……いやいや、景気がなんだ、自分が頑張ればいいだけの話じゃないか。

「ま、とりあえずは今日の試合に集中だ」

「ふうん」

また、味気ない返事して。

「お父さん……」

「ん？」

味噌汁口に含みながら、ちらりとこちらに目をやる。

「大好き」

ブーツと味噌汁吹くオヤジ。

「な、なんだよおめえ、いきなり妙なこといいやがって！ 気持ちわりいな！」

わたしはなにも言葉返さず、ただ笑ってた。

いいにくい言葉ほど、いってしまえば世界が変わる。最近悟ったこと。

つい、お父さんで実践してしまった。まさか味噌汁吹かれるとは思わなかったけど。

食器を洗い、歯を磨き、天国のお母さんにお線香をあげ、忘れ物チェックをし、トイレを済ませ、バッグを背負う。

そうだ、占いの時間だ。とテレビをつけたが、「めざましスタジオ七時です」はやってなかった。今日、日曜日だよ。すっかり忘れていた。そもそも試合の日なんだから平日なわけないのに。

「それじゃ、いつてくるから」

「おう。ま、悔いないように頑張ってこい」

「もちろんそうしますって。足のことあるから、あたしが出るかは分からないけどね。部長として、悔いの残らないようにやってくよ。いつてきま〜す」

などとだらだら喋っている間に玄関から靴を持ってきて、お店の

ほうへと移動する。

「おい、ちゃんと玄関のほうから出るよ！」

「こっちのほうに近いし。……じゃあね」

お店で靴を履くと、わたしは外へと出た。

今日は快晴、青い空がどこまでも広がっている。

「おはよう」

向かいの精肉店前の電柱の横に、久樹が立っていた。わたしと同じ、黒いジャージ姿。集合場所は佐原駅なんだから、わざわざこちらにこなくてもいいのに。

「おはよう」

わたしたちはパシッと手のひらを叩き合つと、そのまま強く握り合った。

2

畑、

田んぼ、

小さな山、

林、

畑、

田んぼ、

点在する民家、

田んぼ、

バスからの眺めは、延々とこの繰り返しだ。JR成田駅近辺は高い建物も自動車も多いけど、ちょっと離れるともうこんな感じ。成田って空港もあってそこそこ有名だと思うけど、佐原に負けず劣らずの田舎だよな。まあ、だからこそ空港が出来たわけだけど。実にわたし好みの街並みだ。

しかし本当にこんなところに体育館があるんだろうか。確かバスで二十分って話だけど。

いまわたしたちが揺られているのは、普通の市営バス。フットサ

ル大会千葉県地区予選に出場するために、会場に向かっているところだ。車内の空間のほとんどを、わたしたちが占領してしまっている。

ずっと試合のこと考えて緊張していたけど、牧歌的風景の中ガタゴト揺られているうちになんだかりラックスしてきて、ちよつと眠くなってきたくらいだ。

「男子は松戸光陰らしいね」

「そうなの？ 初めて聞いたよ。そこ、優勝候補じゃん」

「男子は初戦で玉砕かあ。……オジイがこつちばかり構ってくるようになつたら、鬱陶しいな」

「あたしらが勝たなかつたら同じでしょうよ」

「あらあ、勝てないと思つてんの？」

緊張気味で無口になっている一年生とは反対に、久樹たち二年生はうるさいくらいにお喋り。自分たちのため、そして力チ力チになっている一年生のため、意識してそうしているのだ。

そついえば、すっかり忘れていたな。男子、松戸光陰なんだよな。あっちも今日が初戦。

会場は、確か千葉市のどこか。幕張だかなんだか。

相手、優勝候補か。

どんな試合になるんだろうか。

勝てるだろうか。

高木ミット……

そついえばわたし、告白されたんだよな。

実感、まったくない。

なんか以前から、景子も久樹もうすうす気づいてたみたい。ミットってばさりげなくわたしのこと色々聞こうとするし、だからきつと気があるんだろうな、って。

フットサル部に入ったのも、わたしとの接点が増えるからじゃないか。と久樹は予想しているのだが、確かにそうだよな。合同練習したり、かなり接点あった。

じゃ、同じ高校に入ったのも、もしかして……。通学が楽だからっていったけど、でもあいつなら、もっともつと上の高校だつて充分に狙えたんだし。

でもなあ、いまさらあんなこといわれてもなあ。そもそも、わたしのこともブスだのゴリラだのつて、名前で呼んだことないくせに。

あ、そういえば……。お祭りで三人組にからまれて逃げる時、確か呼んだよ、「梨乃」つて。あいつ、自分でも気づいていないんだろ
うなあ。

とりあえず、付き合っの付き合わないのといったことは保留。
いまはとにかく、目の前の大会に集中したい。

というかあいつ、「付き合ってください」といった直後、真っ赤な顔両手で隠して、女の子みたいにキヤーつて叫んで内股で走つて逃げちゃうんだもの。

それで、それきりだよ。

中高生で付き合うなんてガキが見栄張ってるだけだ、なんていつていたくせに、他人にいうことと自分のやっていること、まったく違うじゃんかよ。

教室でも絶対にわたしと視線合わないように、いつもそっぽ向いてるし。ほんと、わけ分かんない奴。「あれ、なかったことにして」なんていわれても、なんの不思議もない。

でも多分、

あのバカと……

付き合うことに、なるんだろうな。

……ハツカレかあ。

「え、なに？ カレシ？ ハツカレ？ あのバカつて……。もしかして相手、高木ミット？ やったじゃん！」

変なとこに飛んじやつてたわたしの意識、織絵の声に一瞬で我に返された。

「え、え、あたしいま喋つてた？ ど、どこまで……。どこまで喋つ

「たあ？」

「うわ、やつぱりそうなんだあ！」

一同、大爆発！

「梨乃おめでとう！」

「先輩、あたしらのことも忘れず構って下さいね！」

「結婚しちゃえ！」

「うらやましい！」

夏木フサエがわたしの頭を掴んで、ヘッドロックでグイグイ締め付けてきた。

「マックスコーヒーおこれ！」

「やったね梨乃お！」

わたしはみんなに振り回され、ド突かれ、髪の毛をぐちゃぐちゃにかき回された。

「やめて〜〜〜！」

3

ようやくバスは目的地に到着した。

成田市立山陽台中央公園第一体育館。周囲を田んぼに囲まれた、広大な運動公園施設の一角にある。この体育館で、これからわたしたちの戦いが始まるのだ。

曲がりくねった道を進み、体育館が近づいてくるにつれ、また、緊張感が戻ってきた。

体がふるえてくる。誰も注目などしていない、勝とうが負けようが目立つこともない、ただか県の地区予選だというのに、

「気分は決勝戦だね」

わたしの気持ちを代弁したわけじゃないのだろうが、久樹がそう言ってわたしの肩を叩く。久樹は単純に、自分のテンション高めて楽しんでるのだろう。

しかし実際のところ、我々には楽しんでいられるだけの余裕はない。技術力がどうこうというよりも、駒の数が絶対的に不足してい

るのだ。かなり厳しい戦力状態だ。

まず、わたし。だいぶ右足の状態は良くなったけど、まだ激しく踏み込むと痛みがある。出なくて勝てるなら、出たくないところだ。まあ、わたしが出れば勝てるというものでもないけど。

それと、畔木景子。腰の骨を骨折している。昨日、ようやく退院したものの、もちろん試合など無理。会場に同行したかったらしいが、わたしが許可しなかった。退院したばかりだし、家でゆっくり入院の疲れを落として欲しかったから。

楠見留美子。練習中に左足首を捻挫。全治二週間。

篠亜由美。親族に不幸があり、こられない。残念だけでも、お葬式に出るななんていえるはずない。

さらに、王子こと山野裕子が離脱。0157でダウンしてしまい、ようやく回復したと思ったら、生理を遅らせる薬をすっかり飲み忘れていままさに真っ只中。もともと生理の時にかなり辛い体質らしい彼女だが、0157での体力消耗の影響か、かつて経験したことないくらいに酷い吐き気に腰の痛みとのこと。でも薬飲み忘れは自分のミスだから、せめてもの罪滅ぼしにと、青ざめた顔しながらも同行してくれている。薬飲み忘れるなんてこのドアホウと叱咤してやりたくもなるが、辛そうな顔見ると哀れでなにもいえない。おとなしく休んでりゃいいのに。わたしも生理の時はかなり吐き気や腰の痛みが酷くなるほうだから、彼女の辛さはよく分かる。

「しかしまあ、茂原藤ヶ谷の奴ら、黒魔術だかなんだか知らないけど本当に呪いかけてんじゃないかね」

久樹の軽口。肩すくめて苦笑している。確かに我々のこのチーム状態、もう笑うしかないといったところだ。

「ぐうえええい」

王子がふらふらしながら、妙な声出している。

「王子、大丈夫？」

わたしは、背中を軽くさすってやった。

「男でも生理になるんだな」

ぼそ、つと久樹。

「男が生理になるわけないでしょ！……あの、あたし、部に迷惑かけちゃってますけど、だからムードだけでも盛り上げようとうしてきてるんだし、あたしだって落ち込んでいるんだし……つうか、だいたい久樹先輩のほうがガサツでガニマタでよっぽど男じゃねーか！」

……確かに。そういえば、久樹という名前、両親が男の子が生まれることしか考えてなかったからって聞いたことがある。名は体を表すとはよくいったものだ。

「なんだとこら！　だいたい拾い食いなんてしてつから、0157なんかにやられるんだよ！」

「してませんよそんなこと！　先輩のうちの食事じゃないんだから！」

「うちのごはん知ってるのかよ！」

「どーせ道に落ちてるキャベツの葉っぱとか、そんなところでしょ！」

また漫才始まったよ。

「まあ迷惑かけちゃっているのは事実ですから、これ以上はなににもいいません。先輩んちの食事の話ももうしませんよ。だからさ、先輩、今日、絶対に勝ってくださいよね！　二試合とも。そしたら、あたし決勝大会ではゴール量産してやりますよ」

「お、よくいった。えらいぞ男の子」

久樹、王子のツンツン頭をなでる。

みんな、笑っている。

体育館の玄関に着いた。

重たいガラス戸を開き、中へと入る。

とうとう、ここまでできた。いや、予選の予選だから参加すれば誰だってこられるのだが、なぜだかそんな気分になる。

館内の雰囲気は、それほど賑やかでもない。むしろしんとしていて、ちよつとした人の声も反響してよく聞こえてくる。

たかだか高校生の地区予選だ。選手、関係者がほとんど、あと父

兄らしい人がちよつと、とそんなところだ。

あと二十分ほどで、本日の第一試合目が始まる。

ピッチ内では、出場校の選手たちがウォーミングアップを行っている。

二階のガラガラを観客席で、太ったおばさんが両手をぶんぶん振り回して「マナちゃん！ マナちゃん！」と叫んでいる。きつとコートの中の、一人顔を真っ赤にしているショートカットの子がマナちゃんだろう。

「親ってほんと恥ずかしいよね。あんなのにこられたら、試合どこじゃないよ」

と、久樹。確かにそうかも。

わたしたちがいるのと反対の端に、この第一試合目とは関係なさそうな、ジャージ姿の集団がいる。茂原藤ヶ谷だ。背中プリントされた校名を見るまでもなく、体つきで分かる。噂通り、みんな大きい。

背を向けていた一人が、振り返ると同時にニツと笑ったような気がする。

「絶対笑ったよね、あいつ」

久樹も気づいていた。

「たぶんね」

「確か、あいつが内藤だよ」

「あ、主将の」

内藤幸子、三年生。身長百六十九センチ。主将のくせに、一番フールや退場が多いらしい。

茂原藤ヶ谷のフットサル部は強制引退がないので、この時期でも三年生がゴロゴロいる。三年が多ければ勝てるというわけではないが、大きな優位点であることは間違いないだろう。しかし三年がこの時期にフットサルやってられるって羨ましいな。うちも強制引退なくすよう、オジイに相談してみようかな。

「あたしらの体型を見て、舐めてんだよきつと。……面白い。今日

の試合、絶対に勝つよ！ 茂原藤ヶ谷、ぶっ潰す！」

「ちよつと、久樹！」

いきなりとんでもないこと叫ぶなよ。さすがに茂原藤ヶ谷の人たちみんな、びっくりしてこっち見てる。

「おー！」

と勇ましく返すのは、春奈だけ。他のみんなは、別に戦意がないわけじゃない。単に人並みの常識を持つていただけだ。

久樹は面白いところがあつて、舐められるのを喜ぶのだ。要するに、格下と思わせといてコテンパンにやっつけるのが大好きなのである。それで負けてしまった時には、人一倍悔しがるくせに。

でも、向こうの主将、内藤幸子が侮るのも無理はないかも知れない。あつちと比べてなくても、普通に見たってわたしたちの体型はちよつと貧弱に見えるところがあるからだ。春奈や、佐治ヶ江、久樹などは特に。俊敏さや技術で勝負すればいいとはいえ、やはりある程度の頑丈さは必要だ。

茂原藤ヶ谷と、わたしたち佐原南とでは、平均身長が十センチ以上違う。あちらは反則すれすれの、ガツガツと当たってくるようなプレーをしてくるということだけど、今日は果たしてどんな試合になることが、まったく想像がつかない。

想像つかないといえば、向こうの二年生、ともみずき巴和希。百六十四センチ

チで、茂原藤ヶ谷の中では一番身長が低い。しかし相当なテクニシャンと聞く。特に、ボール奪取とボールキープといった足回りの技術が並外れて高い。最近転校してきたそうで、向こうの部員たちは彼女のことを「遅れてきた最終兵器」と呼んでいるとのこと。これは、春江先輩からの情報だ。もちろんうちのメンバーにもしっかり伝え、対策も講じたつもりだ。

「では、第一試合、時間通り十二時より開始します。準備して下さい」

審判用の黒い服を着た人が叫んでいる。

今日、この会場で試合を行うのは四校。

第一試合 私立流山はとがや高等学校 対 県立印西木下高等学校
第二試合 県立茂原藤ヶ谷商業高等学校 対 県立佐原南高等学校
それぞれの勝者同士が、第三試合を戦う。それに勝つことで、二週間後に幕張で行われる千葉県決勝大会に出ることが出来る。決勝大会では二位までが県代表として、代々木で行われる関東大会へと出場できる。

先日わたしたちが練習試合を申し込んでボロ負けした県立我孫子東第三高等学校は、わたしたちと同じ地区に当たるのだが、去年千葉県決勝大会二位通過しているシード校のため、地区予選は免除されている。

さて、審判の笛が鳴り、流山はとがや対印西木下の試合が始まった。

わたしたちも、茂原藤ヶ谷も、二階の観客席からこの勝負を観戦している。この二校のどちらかと戦うことになるからだ。自分らが勝ちさえすればだが。

試合、どちらのチームも上手だ。個々の技術があるだけでなく、チームとしてもしっかりしている。話に聞いていた通りに、攻撃の流山はとがやに守備の印西木下というのがよく分かるゲーム内容。

「やつべ、忘れたあ！」

隣の久樹、バッグをガサゴソやってたかと思うと唐突に立ち上がった。

「どうしたの？」

「携帯プレイヤー持ってくんの、忘れちゃった」

「なんだ、そのくらい」

久樹はいつも試合前に音楽を聴く。イエローモンキーというちょっと前のバンドの、サイキックNO9とかいう曲を聴いて、気持ちを高めるのだそう。いつからの習慣か知らないけど、ゲン担ぎにもなっていて、とにかく絶対にかかせないのだとのこと。

「王子、久樹のそばで歌って盛り上げてやりな」

わたしは山野裕子の脇腹を肘で軽くつつく。

「ええ、あたしイエモンなんて全然知らねえっすよ」

「いいよ、王子の歌なんか耳に入れたら、得点出来ないどころか試合に負けちゃうよ」

久樹、諦めてバッグのファスナーを閉じている。

「あつたまくるな、あたし歌上手いんですよ。じゃ、先輩、今度力ラオケ勝負しようよ。成田にでつかい店出来たから、キャンペーンで安いうちに」

「いつもどっからくるんだよ、その自信は。分かった、勝負しよう。だからいまは歌わなくていい。ヘタクソな歌声は成田のカラオケ屋までとっておけ」

などとやっている間にも、眼下では実に集中した引き締まった試合が展開されていた。

そしてスコアレスのまま、前半が終了した。

二校とも、ある程度の戦力は分かった。この後に試合を控えているわたしたちは、一階へと降り、体育館の端でウォーミングアップを開始した。わたしは、右足の怪我を気にして少し控えめだ。

第一試合の後半戦が始まった。

今度は上からは見下ろせないが、間近で迫力ある試合を見ることになる。

後半は、なんだか子供の喧嘩みたいな、面白い結果になった。まず、後半八分、印西木下が自慢の守備を崩されついに失点。開き直ったのか、印西木下は守備かなぐり捨てたような怒涛の反撃を開始。予期せぬ事態にリズム狂わされたか、流山はとがやたまらず失点、さらに失点、また失点、また失点。印西木下、ラスト五分の怒涛のゴールラッシュで、四一と快勝。第三試合への出場権を得た。

余談だが、マナちゃんは流山はとがや高校。彼女も、他の子たちも、衝撃的な逆転負けをしたものの、みんな悔いのないすがすがしい笑顔。実力拮抗で、勝てるチャンスも充分あっただけに、悔しいだろうに。なのに、ああいう顔が出来るって素晴らしい。見ていても気持ちがいい。わたしや久樹なんか、どんより落ち込んでし

まうところだ。ボトル蹴飛ばしたり。

「では、予定通り一時より第二試合を開始します。茂原藤ヶ谷と佐原南の両校は準備して下さい」
どくん。

心臓が大きく鼓動した。緊張が、血流に乗って一瞬にして全身に回る。

いよいよ、この時がきたんだ。

「佐原南！ 勝つぞ！」

わたしは力一杯に声を張り上げた。

「おう！」

全員声を合わせ、力強く叫ぶ。

わたしは右手を胸の高さで突き出す。その手を、楽山織絵が自分の手のひらで強く叩く。パン、と鳴り響く。続いて、夏木フサエ、浜虫久樹、根本このみ、武田晶。スターティングメンバーは次々とわたしの手を叩き、ピッチの中に入っていく。

茂原藤ヶ谷の選手たちもピッチに入ってくる。両校、十人の選手が並ぶ。茂原藤ヶ谷、本当にデカイ。身長が十センチ高いだけでなく、横にも奥にも、とにかく肉の量が我々とは天地の差だ。織絵ですら華奢に見える。

最終兵器こと巴和希は、ベンチにいる。どんなタイミングで投入されてくるのが気になるところだ。

わたしと島田綾、衣笠春奈、佐治ヶ江優、真砂茂美の五人はサブメンバー。みんな、パイプ椅子に腰を降ろす。

しかしまあ、わたしを含めて控えの層の薄いこと。怪我人に、初心者……サブのゴレイロもないし。控えは七人まで置いておけるといふのに、五人しかいないし。まあ、仕方ない。サブどころかスタメンだって層が薄いのだから。とにかく、このメンバーでやるしかないのだ。

組織でしっかり守ることが出来れば、絶対に久樹が点を取ってくれる。

みんなを信じよう。

そしてついに、

わたしたちの試合が始まった。

4

予想していた通り、話に聞いていた通り、ガツガツと当たってくる。

フットサルでは基本的に接触プレーは禁止。従ってサッカーほど「文字通りガツガツ」でもない。ただ茂原藤ヶ谷の選手、体の寄せ方が非常に巧み。ファールを取られることもなく相手の体力だけをガリガリと削り取っていく。そんな感じを見るものに与える。

佐原南のユニフォームは上下とも青。茂原藤ヶ谷は上下赤だ。

しかしよくもまあ、こんな大きな選手ばかり揃ったものだ。平凡な県立の商業高校で、特に外から選手を集めているわけでもないのに。ある意味奇跡だ。

対する佐原南も、よく戦っている。普段とはスタメンががらりと異なっているため、まずはピヴォの久樹はバランスを取ることに徹している。ピヴォ一人というのはいつも通りだが、あまり前に張らず、若干中盤に吸収されていて、実質中盤三人横並び。左から、夏木フサエ、浜虫久樹、根本このみ。中央後ろにはベツキの楽山織絵。最後部には守護神、武田晶。

フォーメーションはいつもの通りダイヤモンド型、だけど今日はいま説明したようにその変則型。

深刻な駒不足ではあるものの、出来ることならばわたしは出たくない。せっかく治りかけている足を、悪化させたくないからだ。今日の二試合、勝てば決勝大会は二週間後。たぶん完治していると思う。楠見留美子の怪我也治っているだろうし、山野裕子だって出られるだろう。景子は、残念ながらまだ無理だけど。とにかく、まずはこの試合に勝つことだ。

試合開始前はこのメンバーで大丈夫だろうかと不安だったが、なんだんとそんな思いは払拭されていた。勝機、充分にあるぞ。そう思うようになっていた。もともと聞いていた話ではあるけども、相手はそれほど技術があるわけではない。とにかく体格に恵まれていること、その有利さを活かす術を知っていること、それを露骨なまで徹底的に実践してくること。ただそれだけのようだから。

あと、しいていうならば、三年生がいることによる経験の差か。でも、現在の高校フットサル、しかも女子では、それほど気にする要素でもないかも知れない。わたしのように、経験が二、三年という選手が非常に多いからだ。単純に子供の頃から一年一年経験を積み上げてきた子の多い、男子の野球部やサッカー部とは大きく異なる点だ。

「レフェリー、交代お願いします」

わたしは立ち上がり、ライン際に立つ第一審判の許可を得た。普通、フットサルの選手交替に許可はいらない。素人審判が多い予選大会で、正確に記録を残すためのローカルルールだ。次にプレーが切れた時に、選手交代だ。

わたしたちの座るパイプ椅子のすぐ後ろでは、真砂茂美がいたりきたり、足を高く上げたり、とアップを行っている。

少ない観客数ながらも、どっと歓声が沸いた。久樹が織絵のスループースに反応し、抜け出したのだ。しかしすかさず、茂原藤ヶ谷のベッキの選手が妨害に入る。久樹、ボールキープしたままくりと反転、ポストプレーで、味方の攻め上がりを待つて……と思いきや、再度反転、シュート！ゴレイロ、意表を突かれたかまったく反応出来ない。しかしボールはゴレイロ正面、肩に当たり、跳ね返った。中盤から上がってきていた根本このみが、跳ね返りに反応して、倒れこむようにヘディングシュート。決定的なチャンスだったが、しかし運悪くボールは大きく枠を外れてしまった。

いい攻撃だった。いまのシュート、決まってもおかしくない。このみのシュートが外れてボールがゴールラインを割ったので、

相手ゴレイロのゴールクリアランスによる試合再開だ。ゴールクリアランスとは、サッカーでいうゴールキック。蹴るのではなく投げ
る点が異なる。

「選手交代！ このみ、茂美とかわるよ！」

このみ、戻ってくる。

「茂美、まかせたよ！」

「……」

茂美、交代ゾーンでこのみとハイタッチをかわすと、コートの中へ小走りに入っていた。こんな時でも相変わらずの無口の茂美。でも、亜由美がいつていた通り、誰より心は燃えているのかも知れない。

「このみ、惜しかった。よかったよ」

「ありがと。決まったと思ったんだけどな。練習足らんわ」

このみ、椅子には座らず、ストレッチで能動的体力回復かつ筋肉を冷やさないようにしている。数分後に、また出番がくるからだ。

フットサルのは試合は、何度でも選手交代が可能だ。それを利用し、全体的なバランスを考えつつ疲労対策をしたいと考えている。とはいうものの大半の選手には全後半フルで出てもらうつもりだ。うちの事情というものが、仕方がないのだ。本来であれば、控えの選手が七人おり、何度でも交替が出来るものだが、うちは現在五人しか控えがいない。さらにそこそこ使えそうなのとなると……いま交代で入った茂美くらい。

ピヴォの久樹、ベツキの織絵、ゴレイロの昴、この三人はフル出場させ、アラの選手を頻繁に変えようと思っている。

久樹はスタミナがあるし、例えへたばっていても久樹は久樹だ。織絵は、いないとやはり守備が安定しない。

アラの選手はなるべく上下に走り回って、久樹と織絵にあまり体力消耗させないよう打ち合わせてある。このみもフサイもあまり体力のあるほうではないが、まあ、そのためのこまめな交代だ。使う選手はこれだけだ。

わたしは右足の怪我があるからなるべくなら出たくないし、春奈はまだ初心者過ぎて使うのは怖すぎる。島田綾は二年生だが、能力的に春奈と大差がない。佐治ケ江優は体力がないから使うなら後半から使いたい、というか、いつもあまりにも気弱なプレーばかりするから出さずに済むなら出したくない。アラの体力温存のための口ーテーションは、控え一人いればなんとかなる。

と、これが今日のうちの面子を考えると正攻法なやり方だと思う。景子や久樹と案を練りに練って、プランB、プランCと、いくつか奇策的なことも考えてはあるのだが、これらはあまりに不確定要素が多すぎるため、他に打つ手がなくなっただ場合の最後の手段だ。でも試合はどんな事態が発生するか分からないし、いざとなれば奇策だつてやるし、島田綾、佐治ケ江、春奈だつて使うつもりだ。技術の無さなんて本人の根性と周囲のフォローがあればなんとかなる。それがチームスポーツだ。その時点で勝利の可能性が高い方法を選択していくだけだ。

ともかく、現在は現在のやり方でやる以上、試合に出る選手たちの疲労は相当なものと思うが、頑張ってもらおうしかない。

「そう、そこです、いけえ！」

「ぶつとばせ！」

春奈と王子がひっきりなしに叫び声を上げている。王子、体調不良で試合には出られないけど、勝たせようと必死になっているのが伝わってくる。

試合は非常に均衡しており、現在は若干だが佐原南が有利にゲーム運びをしている。交代枠の問題からくる疲労が心配だ。早めに得点してくれればいいんだけど。

「フサエ先輩、ナイスカット！」

春奈、本当に一生懸命応援している。屈託がなくて、本当にいい子だよな。なんであんなに嫌っちゃったんだろう。いまは怖くて試合に出せないけど、これからしっかり面倒見て、鍛えてあげよう。わたしたちが引退した後、主力になれるくらいに。本人はとにかく

やる気いっぱいなんだから、すぐに上手になるだろう。

「絶対に勝つぞお！」

わたしも春奈や王子に刺激を受けて、指示ではない単なる応援の言葉を叫んでいた。

二階の観客席には、さつき戦っていた二校が野次馬となって、春奈に劣らずの黄色い歓声を上げている。

なんか……悪くないな。

女の子の子した、いままで毛嫌いしていた世界。

結構、いいかも。

だって、せつかく女の子なんだし。

せつかくまだ十代なんだし。

などと思っていたら、なんだか体の奥底から、ぞくぞくするような気持ちよさがこみ上げてきた。

「よし、決める！」

久樹、一人かわして冷静にシュートを放った。

相手ゴレイロの古野敏江ふるのとしえ、なんとか反応し腕にボールを当てる。

宙に浮いたボール、落下地点に久樹が待ち構えるが、先に相手主将の内藤幸子にヘディングクリアされてしまった。久樹は背が低い。相手との身長差二十センチは、こういう時に大きく響く。

クリアボールを向こうの二番、名倉明美が拾った。

名倉明美なぐらあけみとゴレイロの晶、一対一になってしまった。名倉明美、

まだ距離があるためシュートは撃たずに猛然とドリブルを開始する。二人の距離、予想より遥かに速く、一瞬にして詰まった。晶のほうから詰め寄ったためだ。名倉明美がボールを持ったその瞬間に、一対一になってしまったと感じたその瞬間に。晶、スライディングでボールを弾き飛ばしていた。フットサルは基本的にスライディング禁止だが、ゴレイロによる守備のためのスライディングは許可されている。名倉明美はバランスを崩し、尻餅をついた。

晶……凄い。ほんとの確な判断力。冷静なくせに、大胆にいく時はいくし。顔も体もコロコロと丸っこく見えるのに、まあ俊敏なこ

と、迷いのないこと。

クリアボールはラインを割ることなく、フサエが胸でトラップ。

「フサエ、逆！」

わたしは短く指示を送った。フサエは視野が狭いこともあってか、ボールを持ったあとに考えてしまうところがある。しかし、わたしの声にすぐに状況を理解してくれたようで、トラップしたボールが足元に落ちる前に、反対サイドへと蹴った。

そこにはマークから外れてフリーの久樹が。決定的なチャンスになるところだったが、フサエのパスが少し精度悪かった。久樹、さっと走り寄って腿でトラップしたはいいが、すぐ相手二人に囲まれてしまうことになった。

奪われる！……いや、大きな二人の間から、久樹するりと抜け出した！ 足にはしっかりとボールが吸い付いている。

久樹はとても小柄、相手からしたら一瞬消えて予期せぬところから現れたような錯覚に陥ったことだろう。わたしだって練習で久樹に抜かれるとそういう感覚を受けるくらいなのだから、さらに体の大きな茂原藤ヶ谷の選手ともなればなおさらだろう。久樹は、大きな相手と戦うにはどうすればいいか、どう動けば小さな体格であることが武器になるか、常にそれを考えて練習している。

飛び出した久樹、独走だ。

相手ゴレイロ、我慢出来ずに飛び出してしまふ。巨体を横倒しにしてなんとかドリブルを止めようとするが、久樹はそれを難なくかわす。フットサルでは体を横にしてのセーブはしないものの、に、サッカーでもやっていて癖が出たのだろう。それも致命的な。

久樹の目の前には、がら空きのゴール。流し込むだけ。

先制だ。

いや……

久樹は転倒した。突然バランスを失い、膝から崩れ、転がった。ボールはひとりで転がり続けて、ポストの右横、むなくゴールラインを割った。

苦痛に顔を歪めている久樹。受身の取れない倒れ方でもなかったと思うけど。しかし、わたしの気のせいだろうか……相手のゴレイ口が、久樹の足首を掴んだような……

試合、一時中断。二人の審判が久樹の状態を確認している。許可を得て、わたしもコートの中に入る。

「久樹、大丈夫？」

久樹はゆっくりと立ち上がった。

そして茂原藤ヶ谷のゴレイ口、古野敏江を睨み付けた。

「こいつ、一瞬、あたしの足首凄い力で掴んで引っ張りやがった。レフェリー、見てたでしょ！ 得点機会阻止！」

……やっぱり。

「いや、なにもなかった。試合再開。さ、控えの選手は外へ出て」
第二審判が、わたしの肩を叩く。

「はあ？ なにもないじゃないだろ！ てめえら、その目は節穴かよ！ それか、ひよつとしてルール知らねえのかよ！」

「久樹、落ち着いて！」

わたしは久樹の両肩に手を置き、なだめようとした。

下手したら、審判への暴言で一発退場だ。

しかし、

遅かった……

レッドカード。

浜虫久樹に、退場が命じられた。

「ちよつと、冗談じゃないよ！」

「あの、わたしも見てました！ 確かにゴレイ口、足掴んでだと思います」

はじめから、二人で猛烈に抗議するべきだったのだろうか。
でも、いまさらもう遅い。

第二審判、興奮するわたしたちと反対に、冷静に口を開く。

「仮にそうでも、もう覆らないよ。ビデオジャッジなんかやっていないし、もう決定された後だし。それになにがあるうと、審判への

暴言は許されないこと。ルールを知らないわけじゃないよね」

その言葉に、今度は久樹ではなくわたしが切れそうになった。あんな目に遭わされて、得点機会潰されて、退場までさせられた久樹の気持ちを考えてみる。

わたしが審判にさらに激しく詰め寄ろうとした時だ。

「ごめん」

久樹、ぼそりとそういうと、うなだれたまま佐原南ベンチのほうへ歩き出した。ピッチの外へ出た。

わたしは、なにもいえなくなってしまった。

「試合再開。ほら、君も早く出なさい」

この、ヘボ審判……

わたしも久樹に続いて、外へ出た。

そして、試合は再開した。

もともとこちらが圧倒していたというわけでもないものの、形勢は完全に逆転、佐原南は防戦一方になった。

一人少ないのだから、当たり前だ。

前線でボールキープの出来る久樹がいなくなったのだから、当たり前だ。

相手の波状攻撃を、織絵を中心になんとか持ちこたえている。晶のファインセーブにも何度も助けられた。もう、見ているだけで汗がどくどくと、河の流れのように吹き出してくる。向こうのシュートが放たれるたび、心臓が悲鳴をあげる。

さっきまでうるさいくらい大声を張り上げていた春奈や裕子も、すっかり黙ってしまったている。祈るのに精一杯で、声を出さなければと考える余裕もないのだろう。二人とも痛々しそうな表情で、いようにシュートを打たれ続ける仲間たちをただ見ている。

このまま頑張っても、点が取れなければ勝てない。そして、このままでは、どう考えても点は取れっこない。人数が少ない以上は、引いて守ってカウンターで攻めるしかないが、そのカウンターを狙う隙を相手がまったく与えてくれない。

でも、防戦一方というこの状態、それならそれでいい。

現在、退場者が出て、三人のFPでプレーしているが、退場から二分経過することにより、選手の補充を行うことが出来るからだ。変に攻めようとして失点するより、二分粘ったほうがいい。

みんな、よく耐えている。こういう時にしつかり我慢出来るのも、わたしが守備重視のチームを作ってきた効果だと思う。もちろん戦術を理解してくれるみんなの能力あってこそだけど。

でも、四人に戻った後、どうやって点を取ればいいんだ。もちろん普段から、久樹に頼らない攻撃のパターンだってしつかり練習している。でも、実際、一番得点あげているのは久樹だし、堅守だっていつも前線で頑張ってくれている久樹のことを無視しては語れないし、なによりもピヴォの位置からゲーム全体をコントロールしているのが久樹だった。……前々から、普段冷静なくせに試合の時は切れやすいところがあつただけで、よりによって今日、こんなことになるなんて。

とにかく、残った選手でやるしかない。

あと十秒ほどで、補充できる。

予定を変更し、島田綾を入れよう。織絵の守備負担減らしたいから、慣れてないけどフォーメーションをボックスにしよう。綾では技術的にも経験的にも少し頼りないけども、とにかく走り回って相手をかく乱させ、疲れさせてくれればいい。

本当は久樹の意見も取り入れたいところだけど、久樹、頭抱えてすっかりふさぎこんでしまっている。とても話せる状態じゃない。

あと少しの辛抱で、FPの人数が四人に戻る。耐え忍んだ分、こちらに勢いが戻るかも知れない。

決定機を逃し続けた側にはピンチが、我慢し続けた側にはチャンスが巡ってくる。それが鉄則のはずだ。そう、信じる。……でなければ、とても精神がもたない。

あとほんのちょっとだけ、持ちこたえてくれ。
だけど……

本人たちは手を抜いているつもり、気を緩めているつもりはまったくないのは分かる。しかし、なにかことが起こるのは、えてしてこういうタイミングだったりするものである。

織絵がボールキープに失敗、ガリツと骨肉えぐりとなるかのような荒っぽいボールカットをされた。相手の五番、確か桜木美紀、これもまた体の大きな選手だ。織絵倒され、尻餅をつく。笛はない。桜木美紀は自分の味方二人の待つ前線へと鋭いパス。夏木フサエが懸命に足を伸ばすも届かない。

主将の内藤幸子にパスが繋がってしまった。彼女はまったく迷うことなく、後ろへ反動つけた右足、激しく振りぬいた。

誰も晶を責めることは出来ないだろう。だって、三メートルほどの至近距離からのシュートに反応して、ドッジボールのようにボールを抱え込んでみせたのだから。しかし、キックの威力が凄まじかったのか、完全にキャッチ出来ず、ボールを前へ落としてしまった。向こうの二番、名倉明美はそのチャンスを狙っていたのだろう。躊躇なく一瞬にしてボールに詰め寄り、つま先でボールを蹴飛ばした。

晶、今度はなにも反応出来なかった。気づいた時にはゴールネットが揺れていた。そんな晶の表情だった。

この数分間、まさに神憑り的な活躍を見せていた晶だったが、そう何度も神様は降りてきてはくれなかった。

失点……

笛が鳴った。

喜びを爆発させる茂原藤ヶ谷の選手たち。

がつくりと膝を付く晶。

晶だけではない。ほかのみんなも、肩を落とし、絶望的な表情。久樹、顔を上げていた。顔の前で両手を組み、呆然としたふうに、ただ目の前で起きた光景を見つめていた。

絶対に相手に与えたくなかった先制点、とうとう与えてしまった。二分持ちこたえることが出来ずに失点した場合には、即座に選手

の補充が出来る。

島田綾が入った。

「ボックスでいくよ！ フサエ、綾、前！ 織絵、バランスとって！ まだ一点差だ！ くよくよすんな！」

わたしは声を張り上げ、指示を出し、叱咤をした。

普段は、ダイヤモンド型のフォーメーションなので、ボックス型はやりにもいかも知れない。でもこのメンバーでは、仕方ない。守備が織絵一人では、織絵が潰れてしまう。

「王子も声出せ！ それでも応援団長か！ 春奈も、いつもみたいに！」

わたしは二人を睨み付けた。

「はい！」

「団長じゃないけど。……負けんな、佐原南魂見せろ！ ブチ殺せ！」

他人に応援を強制しときながら、わたしが一番気落ちしている。

この後、どうすればいいんだ。

負けたくない。負けたくはないけど、じゃあいまのわたしになにが出来る？ みんなを信じて応援する以外、なにが出来るというんだ。

なにより落ち込むのは、この失点のタイミングだよ。あと数秒で補充が出来たのだ。あまりに虚しくなるじゃないか。ならいっそのこと、さっさと、わざと失点しときゃよかった。FP三人きりで、無駄に体力と気力を消耗しちゃって。

……わざと失点だなんて、スポーツやる者として最低の考えだよな。それは分かっている。絶対にそんなことしない。とにかくそう考えてしまっくらい、この失点が悔しくて、残念でならないということだ。

でも……

なにが出来るなんて、考えている場合じゃないよな。

やること、やれること、悩むまでもなく決まってるじゃん。

「茂美、もう少し中入って！ 綾、もつと走れ！ うまい、その調子！」

状況を把握し、叫び、指示を出し、そして鼓舞すること。

負けたくないのなら、いまわたしが出来ることを精一杯にやるだけだ。

簡単なことなのに、ようやくそれに気づいたよ。

頼むよ、みんな。

5

前半終了の笛が鳴った。

とんでもなく長く感じられた二十分だった。

失点は、運良くあの一点だけで済んだ。

十分間のハーフタイム。

みんなが戻ってくる。

少ない控え選手を順繰りで回していたため、みんなかなり疲労が顔に出ている。ただ一人だけ二十分フル出場の織絵なんて、大口開けて見るも情けない表情で大きく肩を上下させている。反対に、茂原藤ヶ谷の選手たちは七人の交替枠を有効に利用しているため、さほど疲れの色はうかがえない。

「お疲れ。みんな、よくやってるよ。まだまだこれから。巻き返してこっ！」

わたしは出場しているメンバー全員の肩を叩いていく。

でも、みんなの表情は暗いまま。非凡な攻撃センスを持つ久樹が退場してしまったのだから、仕方のないことかも知れない。

でも、こんなじゃ、勝てる試合だって勝てないし、勝てそうもない試合ならなおさらのことだ。

「みんな、表情が硬いよ。よくやってんじゃん。ほんと、凄いよ。

……あのね、失点してそんなふうに気分が落ち込んだり、悔しかったりするってことはね、真剣に打ち込んでいるからなんだよ。毎日頑張っているからなんだよ。フットサルが好きだからなんだよ。中

途半端じゃないから、いまのそういう気持ちになれるんだよ。自分たちがどれだけ頑張ってきたのか、試すいいチャンス、がむしゃらにぶつかってこうよ！　うちは強豪校じゃないし、失うものなんてなんにもないんだよ」

わたし、なんだかいつになく饒舌になっている。

「あたしと景子が喧嘩してたの知ってるでしょ。売り言葉になんとかってやつなんだけど、あたし、フットサル部なんかどうでもいい、なんて叫んじゃってさ。こんな素晴らしいみんながいるのになって、ほんとと後悔した。そしたらさあ、今日試合が始まってみたら、素晴らしいどこの話じゃない、そんな時に思ってたよりも、みんなずつとずつと凄いいんだもん。技術のことだけじゃなくて、負けない気持ち、向かってく気持ち、王子たちの応援もね。あたし、この部に入ってたよかったと思ってる。部長になれてよかったと思ってる。……失点してがっくりくる気持ちは分かるよ、でもまだ後半が残ってたんだよ。そんなんじゃない、奇跡だって起こせやしない」

奇跡もなにも、そこまで圧倒的に向こう有利なわけでもないのだが。でもみんな、絶対に勝てっこないような顔してるから。

「そうはいつでも、久樹いないんじゃない戦力ダウンどこじゃない。まして、一点ビハインドなわけだしさ」

フサエの言葉、きつと全員の気持ちでもあるのだろう。

なんていつてあげたらいいんだろう。

勝ち負けは神のみぞ知ることだけど、とにかくみんなには持てる力の限りを尽くして悔いないように試合を楽しんで欲しいのだけど。こんな時、なんといつてみんなを励ましてあげたらいいんだろう。

春江先輩なら、こんな時……

「みんな、本当にごめん！」

久樹が深く頭を下げた。

「ついカッときて、なにがなんだか分からなくなっちゃって。試合ぶつ壊しちゃって、なんて謝ればいいのか……」

その目には涙が浮かんでいる。

ただでさえ小柄な久樹だが、さらに小さく縮こまってしまっている。

久樹の辛さ、どれほどのものかは、わたし程度には想像も出来ない。でも、あの久樹が落ち込み、泣いて謝るくらいだから、それは相当なものなのだろう。

でも、

だからこそ、わたしはあえていう。

「あのさあ、自分いなくなった程度で、そこまで戦力ダウンすると思ってるの？ …… 一番経験があるんだか知らないけどさ、あんまり自惚れないでくれる？」

「梨乃……」

「あたしたちと一緒に頑張ってきた他の二年生、信じられない？ 久樹が手取り足取り教えて鍛えてきた一年生の成長、信じられない？」

「そうそう、あたしらだって日々成長してんすから」

と、山野裕子。

「あんたは試合出てないでしょ！」

根本このみがさりげなくツツコミを入れる。

少し雰囲気是和んだか、晶が、

「久樹先輩、退場のことそんな気にしないで下さい。……あたしだってボールをキャッチしそこねてゴール決められてんですから」

「絶対勝つ！」

と唐突に力強く叫んだのは……

「茂美が喋った！」

本人以外のほぼ全員が、同時に同じこと口に出していた。

そして、お互いの顔を見ては、笑い始めた。

いつまでも笑いがおさまらないので、さすがに茂原藤ヶ谷の選手たち、不気味なものでも見ているかのような表情をこちらに向けている。

「どうやら、復活したようだね。……ほら、久樹、みんな遅いで

しょ」

「梨乃お……。大好きだあ！」

久樹はわたしに抱きついて、大泣きを始めた。よしよし、と頭をなでてやる。

「先輩たち、恋人同士みた〜い」

春奈と王子が口を揃えていう。

「バカ、梨乃には高木ミットという彼氏がいるんだから！」

久樹がとんでもないこと叫ぶ。

「まだ彼氏じゃないよ！」

慌てて訂正するわたし。

「まだ、ね」

また、どつと笑いが起きた。

「大泣きしてたくせに、こいつ」

わたしは久樹のほつぺを両手で引つ張った。

ま、なにはともあれ、みんなに元気が戻ってよかった。

「よし、じゃ、後半の作戦会議だ。景子と病院で考えた作戦なんだけど……驚かないでね。まず、メンバーだけど、ボックスで前がサジとフサエで、後列が織絵と晶で」

「晶？」

やはり驚かれた。当然だ。ゴレイロ登録が晶一人なのに、その晶をFPで使おうというのだから。

「で、ゴレイロは春奈」

「えー！」

さらに驚かれた。まあこの反応も当然だろう。

始めて間もないながら、春奈は晶からゴレイロのコーチを受けている。そして晶はFPとしてもそこその技術を持っている。全員の疲労、それとバランスを考えれば、この、プランCでいくの、悪くないと考えている。もちろん、博打要素も強いが、それがダメなら、じゃ、どうすればいいのかという話だ。

「分かりました。頑張ります」

当の春奈、案外あつけなく了承する。緊急事態であることを理解しているにしても、意外と肝が据わっている。顔に似合わず大物なのかも知れない。

「疲れてたつて、こっちのほうが身は軽いんだから、徹底して機動力を活かすよ。パスは動きながら。なるべく相手は無駄走りさせる。晶とサジ、二人は疲れてないんだから、とにかく走り回れ」

「はい！」

「晶の守備で問題なさそうなら、ダイヤモンドに戻して、晶一人をベッキにして、織絵をこのみと交替させる。織絵も、少し休ませてあげたいからね」

フットサルはかなりハードなスポーツとはいえ、本当は、ここまです選手の疲労を心配するものでもない。我々の場合、選手が少ないし、連携不足を走力で補っているし、どうしようもないところだ。

部員全員で、円陣を組んだ。試合に参加出来ない裕子も久樹も加わっている。

「佐原南、絶対勝つぞ！」

「おー！」

わたしの音頭に、全員の気持ち一つになる。

「佐原南、全魂全走！」

「おー！」

魂を全部つぎ込み、最後まで全力で走れ。という、何年も前に先輩たちの作った言葉。円陣での掛け声は、これで終わるはずなのだが、

「部長もういつちよ！」

「燃えろ！ 青い弾丸！」

久樹につられて、無意識に妙なこと叫んでしまった。咄嗟のことに、みんな「はい……」「おお……」とチグハグな反応。

「梨乃先輩、それ、なんです？」

晶、無表情な顔で素朴な疑問をぶつけてくる。

「恥ずかしい言葉」

「青春ドラマかよ」

「漫画でもいわんよな」

みんな、くすくす笑ってる。

「あ、あの、前の部長、金子先輩が一年生の時、この掛け声で、夏千葉の準優勝までいったって聞いたことあつて。掛け声、覚えてたんだけど、でも、なんでいま、そんな言葉出てきたのか、自分でも分かんない。なんか恥ずかしい！もう、久樹が変なこというからだよ！」

「おお、それじゃあ少なくとも準優勝までは確実に進めるってことだね。……木村部長の恥ずかしい掛け声のおかげで」

「久樹い、そんな、いじめないでよあ」

大切な試合の、大事なハーフタイムだったのにさ、これで何度目の大笑いだろう。

傍から見たら、わたしたち変な集団だな。

気づくとみんなの顔から疲労の色が消えていた。もちろん疲れてはいるのだろうけど、体の奥からこんこんとパワーが湧いてきて疲れを忘れている。そんな表情に思えた。

「……あのさ、恥ずかしいついでに恥ずかしい提案なんだけど。今度さあ、クリスマスパーティーでもしない？この大会での労をねぎらつて。もしかしたら、優勝祝賀会になっちゃうかも知れないけど。まあ名目なんか、どうでもいいんだけど、みんなでわいわいやるのもいいかなって思つて」

「お、いいね」

久樹と王子が乗る。

「もちろん強制じゃないし、彼氏のいる子なんかはそっちのほうがいいだろうし」

「じゃ、梨乃も参加無理じゃんよ。いいだしっぺのくせに」

「だから、ミットとはまだどうなるか分からないだつてば」

でもまあ、クリスマスまでには分かっているはずだよな。

……そうなつてたらなつてたで、ミットも強引に呼んじまえばい

いや。加地原とならくるだろ。

「やるんだったら、あたし参加するよ。ミットどうでもいいし」
心と裏腹なこと、いつてみる。

もうそろそろ、ハーftimeも終わり。

茂原藤ヶ谷の選手たち、そろそろとピッチに入っていく。

ハーftimeだというのに、試合以外の話のほうで圧倒的に長くなってしまった。でもまあ、普段から練習でやってきたことをやるだけなんだし、それすら出来そうもないような精神状態になってしまっていたから、別にそれで構わないと思っている。

「勝つぞ、佐原南！」

わたしは右腕を前に突き出し、手のひらを広げた。

「点取るぞ！」

夏木フサエが、パン、とわたしの手を叩き、ピッチへと入っていく。

「燃え尽きてくるわ」

梁山織絵が、わたしの手を叩いた。

「……頑張ります」

佐治ヶ江、相変わらずの小さな声で、弱々しくわたしの手を叩く。ほんと、頑張れよ。ポテンシャルは久樹並みに高いはずなんだから。続いて晶、いつも通りのクールな顔で、無言のまま素通り。と思ったら、いきなり一歩後退するやバシツと強烈なタッチをかましてきた。そして悪戯小僧のように、にかつと笑った。うわ、珍しいな、晶がこんな笑顔を見せるなんて。やる気になってるな。FPとしてのプレー、期待してるよ。

最後に春奈、

「全力でやってきます！」

タッチと同時に、わたしはその手をぐつと握った。

「精一杯やってくれば、それだけでいいから。なにがあっても恨むようなこと誰もしないから。せつかく出場すんだから、楽しもうよ」

そしてフットサルをもっとも好きになつてくれ。

「はい」

「あのさ、今度、なんかお洒落な服、教えてよ。渋谷でもいってさ」
「……はい！ 静岡から転校してきて、まだ東京に遊びにいったことないんで、連れていって下さい」

「連れてくから、いい服選んでよね。あたし全然センスなくてさあ」
「こんなところする会話じゃないよな。」

春奈もピッチの中へ。

さあ、いよいよ後半戦。

絶対に勝つぞ。

わたしはパイプ椅子に腰を降ろした。ユニフォームに、ジャージの上だけ羽織っている格好なのだけど、無意識に手を入れていたジャージのポケットの中に、なにか硬いものがあるのに気づいた。

取り出してみると、それはパスケース大の、薄く透明なカードのようなもので、中に葉っぱが挟んであるのが見える。

「四葉のクローバー」

押し花みたいに、丁寧に薄く潰して乾燥させてある。

高木ミット。

先日、河原で四葉を発見するや否や、奇声あげて走り去ってしまったけど……

あれ、わたしのために探してたんだ。

昨日、擦れ違った時、ポケットに入れたんだな。今日このジャージを着るかなんて分からないのに。気付くかどうかなんて分からないのに。

……ほんとにバカだよなあ、あいつ。

6

うまい！ ナイスキャッチ！

春奈、前方へ倒れこみながら、ドッチボールのように両腕と胸の間にガッチリとボールをおさめた。……と思つたら、腕の間からボ

ール、するりとこぼれてしまった。名倉明美の巨体が信じられない瞬発力で、転がるボールへと詰め寄る。春奈も四足で懸命ににじり寄り、紙一重の時間差でなんとかボールを守りきった。危なかった。

心臓止まるかと思った。

「春奈、キャッチよりブロック！」

晶の叫び声。

「はい！」

晶のいう通り、フットサルは至近距離から鋭いのがズドンとくるから、キャッチは難しい。ましてや素人が短期間で実戦レベルのキャッチング技術に達するなど無理だ。キャッチ出来るのならばそれに越したことはないが、まずは、相手シュートの軌道上に立って自身が巨大な障害物となることを意識したほうがいい。フットサルのゴレイロはサッカーよりもハンドボールのそれに近い。

春奈のキックで試合再開。フサエにボールが渡る。

さて、問題はこれからだ。久樹がいる時でさえ攻撃のバリエーションが多いとはいえないうちとしては、ましてやこんな状況だし、ここからどう攻めていけばいいのか。ちんたらパス回してても変な取られかたして危機を招くだけだし。

諦めちゃあ、なにもかもおしまいだ。

そう、わたしたちには可能性があるのだから。

以前、宣伝で見たただけなんだけど、八十歳で生まれてどんどん若返ってく人生なんて洋画が上映してた。それを受けて、景子と久樹とつい話し合ってしまったことがある。

八十歳でいきなり生まれてきて、どんどん若返って、ゼロ歳で死ぬのと、

八十歳でいきなり生まれるが、そこからは普通に年老いていき、いつ死ぬかは分からないのと、

どちらがいいか。

わたしたち三人とも、選んだのは後者のほうだった。八十年と分

かっているより、よほど可能性を感じたから。もちろん、本当にそんなふうに生まれることが出来て、自分に選択権が与えられるなら、あらためて悩んでしまうところだけだ。

とにかく、可能性というものがあるから、挑戦心というものが生まれる。諦めずに挑戦をするから、奇跡が生まれるのだ。

現在のこの不利な状況を引いて耐え、様子をうかがい、チャンスを狙う。恥ずべきことでもなんでもない。可能性を信じるが故の、挑戦心だ。

だが、チャンスは実にあっさりと、そして意外な形で訪れたのだ。しかし、そのチャンスを活かすどころか、逆にあんなことになってしまふなんて……

相手のプレッシングに、フサエ慌ててパス。浮き球になってしまったが、練習時の佐治ケ江ならば難なく受けられたはず、しかし右腿でのトラップに失敗して、ボールを蹴り上げてしまった。まったくこいつは、と誰もが思ったんじゃないだろうか。ボール扱いが一番上手なくせに、試合では全然それを発揮出来ないんだから。

だが……

佐治ケ江が蹴り上げたボールは虹の弾道を描き、茂原藤ヶ谷ゴールに向かって飛んでいった。ボールはいきなり失速しストンと落下、相手ゴレイロ五メートルほど手前に落ちた。なんてことのないボールだが、ミスプレーから生まれたということに相手の反応が遅れたのだろうか。たまたま上がり目になっていたベツキの晶が、ごちゃごちゃ密集した中をするりと抜け出して、そのボールを受けた。

一瞬のためらいも見せず、足を振りぬいていた。

ボールは枠を捉えた。ゴール左上隅。普段ゴレイロをやっている晶、ゴレイロの嫌がるころはよく分かっている。

しかし相手ゴレイロ古野敏江の広げた腕にボールが当たり、惜しくもゴールインはならなかった。

大きく跳ね返ったボールをフサエが胸で受ける。

茂原藤ヶ谷のベツキ、梨本麗が奪おうと襲い掛かる。フサエ、佐

治ヶ江にパスを出した。パスアンドゴーだ。綺麗なワンツーで、ま
たも相手守備陣を抜けた。フサエ、上達したな。佐治ヶ江も頑張っ
た。

ただ、抜けたはいいが、トラップにもたついてしまい、前半から
鬱陶しい存在である名倉明美に追いつかれてしまった。この絶好の
チャンスにすっかり思考がハイになってしまっているのか、フサエ、
普段やらないようなシザースフェイント、失敗したら失笑ものだが、
なんと大成功、名倉明美を華麗にかわしたフサエは、ドリブル独走
！……と思ったら、突然よろけて、転んでしまった。せっかくの
チャンスだったのに勿体ない。

第一審判が笛を吹き、イエローカードを出した。

わたしには見えてなかったけど、きつとフサエ、引っ張られてた
んだな。

やった、名倉明美、二枚目で退場だ。

と思つたら、なんとイエローカードは、フサエに対して出された
ものだった。

ファールを誘うためにわざと転んだ。そう判断されたのだろう。

そんなアホな。

「抜けりや一対一だったんだから、わざと倒れるわけないでしょう
！」

わたしは抗議したが、判定は覆らなかった。

フサエ、自分が警告を受けたことも知らず、まだ痛みに激しく顔
を歪めてごろんごろんと転がっている。しきりに左足首を抑えてい
る。

……なんか、様子が変わだ。

引っ張られて倒れたくらいで、こんなになるなんて。

おかしい。

「フサエ！ フサエ、大丈夫？」

わたしの声、全然届いてないみたいだ。審判も最初はフサエに対
して「これ以上演技すると警告出すよ」などと言っていたのだが、

やつと演技でないことが分かったようで、会場の係員に担架を要請した。

「あいつら……またやってくれたよ……」

わたしの隣で、吐き捨てるような呟き声。

「久樹、それ、どういうこと？」

「どうもこうもない。フサエがターンしようとした瞬間、足の甲を踏ん付けやがったんだよ。それで思い切り捻ってしまった。……痛いよ、あれは。関節だからね。死んだほうがマシってくらい、痛い……あたしにも、あれがわざとかどうかは分かんない。でも、自分が踏んだこと気付いてないわけなのに、まるで平気な顔してるつてのがね、あいつら最低だよ。すげえムカツク」

そんなこと起きていたなんて。

「フサエ！ フサエ……フサエ！」

担架で運ばれていくフサエに呼びかける仲間たち、だが痛そうに呻いているだけで、まったく返事はない。

フサエ……

畜生、平常心なんか役に立つか！

わたしは茂原藤ヶ谷の選手たちを睨みながら、心の中で叫んだ。昨日電話で春江先輩に、「試合、絶対荒れるよ。平常心失ったら負ける」と助言されたことを思い出したのだ。こちらもカツとなっているのにもかかわらず、向こうが一方的に荒っぽいプレーをしているだけ。平常心なんか、なんの意味もない。

でも、ここで感情的になったら、それこそ相手の思うツボだ。

冷静にならないと。

しっかりしろ、木村梨乃。

主将なんだから。

わたしはどうしてもこみ上げてきてしまつドロドロした陰湿な気持ち、なんとか体の奥深くへ押さえ込んだ。

「頭は冷たく、ハートは熱く」。春江先輩が好きな言葉だ。

わたしは大きく深呼吸をした。二回。

よし。

「レフェリー、選手交替！」

夏木フサエ アウト 木村梨乃 イン

後半戦、残り十五分。

この状況で、足の怪我が不安だのといっているらしい。

「梨乃、無茶はしないで」

久樹がわたしの足の心配をしてくれる。

「ありがとう」

久樹の肩を叩く。

わたしの右足、ソックスで分かりにくいがテーピングで腿から足首までぐるぐるだ。そして右膝はサポーターで、ぐっと関節を固定している。動きにくいけど、おかげで痛みは感じない。

夏木フサエは既に担架で運ばれピッチの外に出ている。わたしは一人、交代ゾーンから中へと入った。

わたしはまず、茂原藤ヶ谷の主将、内藤幸子のところへ真っ直ぐ向かった。

「ラフプレー、いい加減にしてよね」

どうでもいいけど、一言いってやりたかった。善良だけでもどうしようもないバカで自分のプレーの荒さに気づいていないだけ、という可能性もゼロではないと思ったし。

でもやっぱり、反応、予想してた通り。

「全部ルールの中でやってること。笛を吹かれるも吹かれないもカード出されるも出されないも。ころころ倒れるのはそっちが貧弱だからだろ。もやし集団はもっと鍛えてから試合に出なよ。迷惑だから」

内藤幸子はそういって、唇吊り上げて笑った。

あきれた。ギャグ漫画だ、ここまでくると。本当にこんなのがいるんだな。千葉は広いようで、やっぱり広かった。

こんな相手には、絶対に負けたくない。あらためて、強くそう思った。

しかし、実戦どころかボール触ること自体が久々のわたしである。どこまで役立てるのか、はたまた迷惑かけることになるのか、想像もつかない。とにかく、フサエの負傷によりみんなに広がっている動揺、これをなんとか落ち着かせたい。

審判の笛。試合再開だ。

どこまで出来るか、様子を見ながら、少しずつ体を動かしていこう。

晶からパスがきた。わたしは右足の内側で、感触を確かめるようにしっかりと受ける。ファーストタッチだ。などとしみじみ思っている余裕もない、相手が激しい足音とともに迫ってきていたからだ。慌てて、織絵へとボールを戻した。なんだこいつら、でつかいくせにこの寄せの速さ、迫力は。外から見ていたのとは大違いだ。……みんな、こんなのと戦っていたのか。控えメンバー中心だというのは、よく一失点で済んでいるものだ。わたしが思っている以上に、みんな成長しているんだな。

わたしも、負けていられない。

「織絵！」

わたしは走り出した。

織絵は、佐治ケ江へとパス。それでいい。危うく相手にカットされそうになったが、佐治ケ江、なんとか上手く体を入れて、ボールをキープした。そして、反転して前を向くなりパス。ちよつと浮き気味になったボール、わたしのほうに飛んでくる、脛で受けた。いまのところ、足は順調。すかさず相手の四番、登悦子のぼりこが襲い掛かってくる。なんと身長百七十六センチ、両チームで一番の長身、バレーボールの選手のような体型だ。でもサッカーならともかくフットサルでそこまでの長身にさして意味もない。しかも情報では、足元はそれほど上手ではないらしい。ここを抜けば、大チャンス。わたしは迷うことなく仕掛けた。やることは単純なフェイント、右に左に揺さぶって、バランスを崩した相手の横を抜けるだけ。

難なく成功。抜けた。……その瞬間、視界が急速に回転した。わ

たしは肩を当てられて、吹っ飛ばされていたのだ。背中から落ちた。笛が鳴った。

登悦子のファールだ。

わたしは晶に手を引っ張って貰い、立ち上がった。よかった、足はなんともないようだ。そのかわり、肩が無茶苦茶痛いけど。

プレーの切れている間に選手交代だ。審判の許可を貰った。

楽山織絵 アウト 根本このみ イン

晶でもそれなりに対応できることが分かったから、五分ほど、織絵を休ませてあげたい。織絵、ここまでありがとうね。

予定通り、陣形を変えた。ダイヤモンド型。ピヴォが佐治ケ江、アラがわたしとこのみ、ベッキが晶。ゴレイロは引き続いて春奈だ。様子を見て、わたしと佐治ケ江とでポジションチェンジするつもりだ。佐治ケ江をこのままやらせてどうなるか、不安だからだ。いまのところよくやっているものの、緊張からいつなにをやらかすか分からないところがあるから。場合によっては、とっとと交代させるかも知れない。

佐原南のキックで再開だ。わたしはさっきファールを受けた場所にボールをセットした。

直接FK。

茂原藤ヶ谷の選手たちが、ボールとゴールとの間に壁を作る。でかい選手がずらずら並んで、まさに山脈だ。

上手に綺麗な弾道を描くキックを見せる久樹も、ズドンと大迫力大砲のフサエも、どちらももうピッチにはいない。ここはわたしが蹴るしかない。

審判の笛を待つ。

わたしの気迫を感じ取ったのだろうか。さっきまで騒々しかった二階席の子たち、しんと静まり返って試合の様子を見ている。

笛の音。鳴ったと同時にボールに走り寄り、こすり上げるように蹴った。

いい感触！

気迫と技術と偶然とがごちゃまぜになり、スピードに乗ったボールは絶妙の弧を描き、山脈を越え、そして落ちる！

ゴレイロの古野敏江、逆をつかれて反応出来ない。

ガン、と音を立て、ボールはポストに弾かれた。

落ち切らなかったか。

ボールは向こうの六番、梨本麗が拾った……いや、その前を晶が疾風のように駆け抜け、ボールを取り返した。

すぐ晶に、名倉明美がつく。晶はボール保持に固執せず、あっさりと放した。しかもヒールパスという憎い演出で。どうやら久々のFPを楽しんでいるようだ。ヒールとはいえ、正確で優しいパス、わたしはそのボールを右の足裏でトラップ。FKからの流れだからまさに混戦といった状態で、瞬時にして内藤幸子と梨本麗がわたしへと飛び掛ってきた。まず、猪のように突進してくる内藤幸子をルーレットでいなすようにかわす。ルーレットなんて実戦でやったの久しぶりだ。梨本麗は慎重で、飛び込んでこない。わたしは右足を振り上げ、強引にシュートを狙う。と見せかけ、右足を下ろすと同時に、左足のインサイドキックで真横へパスを出す。晶がボールを受けた。

久樹の鋭い叫び声が聞こえてきた。久樹もピッチの外で、戦ってるんだな。

晶、ドリブル。内藤幸子の猪突猛進をボールを切り返してかわした。……晶、FPとしてもムチャクチャ上手じゃないか？ だけど次の一手は読めなかったようだ。相手のゴレイロ、古野敏江が渾身のスライディングで強引に晶からボールを奪った。鈍い音とともにボールは上空へ弾けとんだ。

みな、宙に舞うボールを見上げる。

くるくると、回転しながら落下してくる。

足音。

……え？

気のせいだろうか。自陣でゴールを守っているはずの春奈の顔が

……すぐそばに……走り抜け、

落ちてくるボール、

春奈の、胸だかお腹だかに当たって、

跳ね返ったボール、ゴレイロ古野敏江の脇を抜け、

ゴールライン、

……越えた。

ネット、小さく揺れた。

ボール……

ネットの中……

……ええ？

なんだ、いったいなにが起きたんだ？

夢？

なんで、なんで春奈、ここに。

わけ分かんないよ。

笛が鳴った。

ちよ、ちよつと、これって……

これってさ、

もしかして……

ゴール？

同点？

両校の選手たち、同じように呆然とした表情だったのだが、時間がたつにつれ段々と、はつきりと、違いが現れてきた。

「やった！ やったよ春奈！ 同点！ 春奈！ 春奈、凄い！」

わたしは思わず春奈に抱きついていた。

なんだか分からないけど凄すぎる、偉すぎる。もう、ほお擦りしちゃいたいくらい。

「春奈、やるじゃん！」

「おいしいところ、もってくんじゃねーよ！」

晶とこのみが、春奈の髪の毛をグチャグチャにかき回している。
「えへへ。久樹先輩のおかげですう」

わたしは、久樹のほうを見た。椅子から立ち上がっており、「ほら、まだ追いついたただだよ！」と厳しい顔で両手を叩いている。わたしの視線に気づくと、ちよっとだけ笑みを見せた。

そうか。

そういうことだったのか。

さっき聞いた久樹の叫び声、あれ、春奈への指示だったんだ。混戦から、ボールがこぼれる時、あの時間帯マンマークを徹底していた茂原藤ヶ谷は、奇襲に対して一瞬判断にもたつくだらう。そう予想し、絶妙なタイミングで春奈へゴーサインを出したのだらう。大きなリスクはあるけども、相手の混乱を誘えるし、一瞬の数的優位を作れる。でもまさか一発で、しかも春奈本人が決めてしまうとはさすがの久樹も予測出来なかっただらうけど。

まだまだ素人同然のくせに、ゴレイロのポジションで得点してしまふ春奈もたいしたもんだけど、

久樹も、本当に凄い。ピッチに立ってなくても、点取っちゃうんだから。

「君たち、早く戻って！」

なおも春奈の頭をみんなでポカポカ殴ってたら、さすがに審判に注意されてしまった。

失点によるショック、ハーフタイムで立ち直ったものの、まだ心の奥に不安や自信のなさがあったと思う。でもいまは、希望、あきらかな自信、顔から、全身から、溢れている。

まったくもう、いくら一年生が多いからって、気持ちの浮き沈みが激しすぎるだろ。でもそれだけに、調子に乗らせるとどこまでも乗っていきそうだな、こいつら。

「バカか！ あんな初心者みたいな、ふにやふにやした奴に決められて、恥ずかしくないのか！ キーパーだぞあいつ！ 生ぬるいこをやってんじゃねえよ！ ブチ殺せ！」

内藤幸子主将のまるで獣の咆哮のような、なんとも凄まじい怒号が、わたしたちの歓声を吹き飛ばし、館内に轟き渡る。

「少しは気迫見せる。全然足りてねえんだよ。お前ら下手だから、ブチ殺す気でやらなきゃ勝てねえんだよ！ 分かってんのか！」

「はい！」

「生かして帰すな！」

「はい！」

なんだこいつら……

「きみ、あまり過激なことというと、警告ものだよ！」

さすがに見かねた審判が注意した。

「分かりましたよ！」

相当カリカリきているようだ。

茂原藤ヶ谷の他の選手たちも、主将に叱られるまでもなく、恥ずかしさ、悔しさに興奮しているようだ。

「みんな！ 平常心！」

わたしは笑顔を作り、そしてそう叫んだ。

「あっち、怒ってるから、そうとうガツガツ当たってくるよ。なにがあっても冷静でいよう。こっちはあくまでフェアプレーでいこう。我慢してれば、相手にバンバンとカードが出る！」

「フェアじゃないじゃないですか」

晶と春奈が声揃えてツツコミを入れてくる。

「最後のは冗談。とにかく、気を引き締めて、あと十二分、戦い切るよ！」

内藤幸子がプルプルと手を震わせながら、こちらを睨んでいる。実はわざと、向こうに聞こえるよう大きな声で話したのだ。向こうが、ラフプレーをやりにくくなるように。あまりの怒りに我を忘れてより激しく当たってくるようなら、それはそれで思うツボだ。いままでだって、ファールぎりぎり、警告ぎりぎりといったプレーばかりをしていたのだから。

しかしうちの選手たち、みんな、凄いやつてくれている。駒の数が不足どころか、役立つ駒が皆無だなどと思っていた。自分の見る目のなさが恥ずかしい。

このチーム、最高だ。

わたしも追い抜かれないう、練習を頑張らないと。

自分のポジションへと戻っていく春奈。なんだか足引きずるように歩いている。

「足、どうしたの？」

「さっき全力で走った時、ちょっと躓いちゃて。一人でバカみたいですよえ」

無邪気に笑っている。

「痛む？」

「それほどでも。でもさっきみたいには走れそうにないです」

「そうか。分かった。無理そうならいつてね。また晶に戻すから」

「はい」

春奈をFPで使うのは無理か。場合によっては、と考えていたんだけど。このままゴレイロで使うしかないな。

審判の笛で、試合が再開された。

予想通りというべきか、わたしたちは暴風雨のような凄まじい攻撃に身をさらすことになった。

こちらにも気迫を持って臨もうにも、なにせ体格が違う。平均身長が十センチ以上も違うのだ。砂浜トレーニングをやっているだけあって、大きな体のわりに驚くほど俊敏だ。交代出来る選手が多いので、こちらより遥かに体力が残っている。

相手の中で特に怖いのが、主将の内藤幸子。鬼気迫る形相で、猪のように突進してくる。その攻撃から身をかわすたび、風の唸りを聞くかのようだ。

偶然なのか、実は才能があるのか、春奈も三回ほど素晴らしいセーブを見せている。

この数分で、すでに向こうには何枚かのイエローカードが出ている。残念ながら、立て続けに貰う選手はおらず、退場者は出ていない。

しかし、この猛攻、さすがに耐え切れなくなってきた。

佐治ヶ江が相手のクロスをなんとかクリアー。ラインを割って試合が切れたタイミングで、織絵を戻した。

根本このみ アウト 楽山織絵 イン

ボックスで、晶と織絵に守備をさせる形に戻した。

しかし、この暴風雨はやむことを知らなかった。

向こうの集中力が切れる瞬間、絶対くるはずだ。

この猛攻、凌いでいれば、絶対チャンスくるはずだ。

……だけど、

わたしの右足、痛くなってきた。

やばいな。

気のせいかと思っていただけ、いまのターンでビキビキッと電流が走った。

どこまでやれるか。いや、やれるかじゃない、やらなければ。

野木春江と出会ったあの日……

疲労して、意識が朦朧としてきて……勝負の結果より、自分に負けるのが嫌で……

結局あの時、自分に勝ったのかどうかは分からない。

あの時のことは、もうどうでもいい。

いま、自分に勝つ！

猪が突進してくる。わたしはちらりと右に視線をやり、パス、と見せて体を左へ反転させる。さすがに向こうの主将、フェイントに気づき、慣性の法則を筋力で強引に捻じ曲げてわたしの進路を妨害しようとする。でも読めてたよ、その動き。左へと体を流しながら、踵でボールを後ろに蹴りだす。素早くターンし、ドリブル続行。ボール、簡単には渡さないよ。

梨本麗なしもと りんが立ちふさがる。これは単純なフェイントに弱い選手だ。

右に、左に振り、そして抜く！

右膝に、ぶつとい針突き刺されたかのような痛み、でも構わず、抜き切る。

次は名倉明美。五十センチほどの距離を置き、わたしと名倉明美

は睨み合った。一瞬の我慢比べ、耐えられなくなったのは向こうだった。ボールを奪うべく、ぶん、と足を横薙ぎ一閃。しかしすでにその位置にボールはない。ボールはわたしの右足のすぐ後ろ。凄い鼻息でボールを奪おうとする名倉明美だが、わたしは体を回転させ、腕を使い、足を使い、背中や腰を使い、ボールに触らせもしない。

二年前、こんなふうなボールを、わたしは二十分かけて、一度も春江先輩から奪えなかった。触ることすら出来なかった。でもいまは違う。ボールを奪うことも出来るし、一度奪えばこのように、そう簡単には奪われない。

「織絵！」

駆け上がってきた織絵に、パスを出した。

転がすつもりだったが、名倉明美に審判から見えないような角度で引つ張られて、精度の低い浮き球になってしまった。でも織絵は冷静に胸でトラップ……するつもりだったのだろうが、相手の寄せが早い。織絵、飛び出してきたゴレイロとの間で挟み撃ちにあってしまう。さらに猪主将、内藤幸子が地響きたててそこへ参戦。織絵、冷静にトラップなどして完全に三方から囲まれることよりも、胸トラップからボレーで直接わたしに返すことを選択した。本当はトラップして、相手かわしてシュート、といって欲しかったけど、あれじゃあ仕方がない。

山なりに、わたしへと戻ってくるボール。ちょっと高いよ。

わたしの胸をどんと押しながら、梨本麗が体を割り込ませてきた。競り合いになる。

わたしは渾身の力を込めて跳躍していた。勝った。鍛えた脚力と気力があれば十センチ以上背の高い選手にも余裕で競り勝てるのだ。というのは嘘で、実は見えないように梨本麗の背中をド突いてタイミングずらしてやったのだ。この程度の仕返し、バチは当たらないと思う。

競り勝ったものの、冷静にボールを操作することは出来ず、頭のてっぺんでさらに高く放り上げただけになった。

着地する。全身のバネでクッションをきかせたつもりだったが、着地姿勢が悪かったのか、想像以上に足が悪いのか、予想を遥かに上回る痛み、心の中で絶叫ともいえる悲鳴を上げた。心でいつてる程度じゃ、まだ大丈夫だ。そう強引に自分を納得させる。

遅れて梨本麗も着地。バランスを崩し、わたしを巻き込み、もつれあって倒れた。

ボールは床へ落ちた。フットサルのボールはあまり弾まないものだが、かなりの高さから落ちてきたので、ちよつと高いバウンドになる。

梨本麗が暴れる。もつれ、ごちゃごちゃと体のパーツがからみあう不快感。顔面に肘を入れられた。審判、これファールじゃないのか。もつれてて分からないのか。

上等だ！

徹底的にやってやる。

バウンドしたボール、落ちてくる。

わたしは横になったまま、もつれあつたまま、懸命に足を伸ばした。

茂原藤ヶ谷の選手が二人、倒れているわたしたちのほうへと駆け寄ってくる。全体のバランス崩そうとも、とにかくボール奪取しようという強い執念、気迫が感じられる。しかし残念でした、落ちてくるボールに触れたのはわたしのほうが早かった。倒れた姿勢のまま伸ばした右足が届いたのだ。そして、軽く蹴り上げた。

蹴り上げた瞬間、あまりの痛みに、足の骨が折れたかと思った。

走り迫ってくる二人の間を抜けて、ボールは晶のほうへ飛んでいく。

「速攻！」

倒れたまま、わたしは力の限り叫んだ。

ボールは後方へ戻る形になったが、相手陣形は乱れ、バラバラだ。からみつく梨本麗の手足を振りほどいて、なんとか立ち上がる。晶、いきなりのことに、普段のクセで手を伸ばしかけたが、はっ

と我に返り、地に叩きつけるようなヘディング。バウンドする前に、織絵が足で踏みつけた。

「サジ！」

佐治ケ江優への、低いロングパス。

通った！

佐治ケ江は腿を上げ、わたしから晶、織絵へと送られたメッセー
ジ、受け取った。そのはずなのに、

パスを出せる相手がいないか、探す佐治ケ江、

技術はあるはずなのに、体力と、積極性に欠ける佐治ケ江。
予想通りといえばそれまでだけ。

もたもたしている間に、内藤幸子が地響き立てて佐治ケ江に迫る。
巨大な津波に飲み込まれる。それほどに、佐治ケ江、か細く、頼
りなく見えた。

だけど、

わたしたちの目の前で、想像もしなかったことが……いままでの
彼女を知る者ならば、とても信じられないような光景が……

佐治ケ江、右足でちゃんとボールを蹴り出すと、そのままドリブ
ルで内藤幸子に向かっていった。

対峙する二人。

勝負は一瞬で決まった。内藤幸子の股の間をボールが抜ける。佐
治ケ江、内藤幸子をよけて右側から回り込む。足を突っかけられ、
バランスを崩し倒れそうになりながらも転がるボールに向かって走
っていく。

ゴレイロ、古野敏江が先にボールを奪おうと飛び出してくる。

佐治ケ江と古野敏江が、ぶつかりあった。弾け飛ぶ佐治ケ江の姿
が見えたのはわたしの不安な気持ちからくる幻想だった、だって佐
治ケ江は古野敏江をかわして誰一人いない最前線へと抜け出して
いたのだから。足元には文字通りボールが吸い付いている。

佐治ケ江の眼前には、誰も守る者のいないガラ空きのゴール。
右足でちょん、と蹴られたボール。

すると転がり、

そして、小さくネットを揺らした。

ボール、止まった。

人って、信じられないことが起こると、なぜこう静かになってしまっただろう。

佐原南の全員、なにが起きたのか理解出来ず、呆然と突っ立っている。

いや、なにが起きたのかは分かる。

ただ、それが現実なのが信じられない。

いま、目の前で起きてること、これ、本当のことなんだろうか。

夢なんじゃないだろうか。

目が覚めたら、「やっぱりな」な佐治ケ江や春奈なんじゃないだろうか。

わたの足、ズキズキと痛い。

夢じゃないよな。

これ、夢なんかじゃないよな……

わたしたちはおもむろに顔を見合わせると、にい、と傍から見れば不気味この上ない笑みを浮かべた。

全身が、ぶるぶると震えてきた。

「やった、逆転だ！」

みんなが、儚い夢なのか歓喜の現実なのかを疑って混乱している中、織絵が一人抜け駆け、両手を天に突き上げた。残ったわたしたちもそれに遅れて、ようやく逆転したことを確信し、喜びを爆発させた。

佐原南の、ピッチ内の選手たちが、佐治ケ江優を取り囲んだ。当の本人、まだ自分の行動の結果を信じられないのか、うつろな表情で突っ立ったまま。

「サジ、ナイスゴール！」

晶が背中を叩いた。

「やったね！ だから、とにかく自信だっていったでしょ」

織絵が肘で佐治ケ江の顔を軽く小突く。彼氏出来ていきなり成長した織絵がいうと、実に説得力がある。

「サジ……凄い、よかったよ。勇気もって、仕掛けたところ。……ほら、やれば出来るんだから」

わたしは佐治ケ江の顔を見つめ、肩をポンと叩いた。

彼女は我に返り、わたしの顔を見つめ返してくる。

「先輩。……あたし……あたし……」

目に、じわつと涙が浮かんでいた。

小さく鼻をすする。

うわあん、と大声をあげて泣き出した。

ボロボロとこぼれる涙をこらえようと上を向くが、それでも涙はとめどなくこぼれ続けた。

わたしに抱きついてきた。

むせび泣きながら、強く、わたしにしがみついていた。

以前にフサエがいった通りだ、佐治ケ江の体、ふわつとしてて柔らかい。

わたしも、ぎゅつと抱きしめてやる。

……なんてかわいいんだ、こいつは。

ひねているようで、驚くほど純粹で。

なんて、素敵な涙を流すんだろう。

「まったくもう、試合まだ終わってないんだよ」

わたしは佐治ケ江の背中を手のひらで軽く叩く。両肩に手を置いて、突き放す。

試合でゴール決めたくらいで、わんわん声あげて泣く高校生がどこにいるか。

「はい。すみませんでした」

佐治ケ江は涙を拭った。

時間稼ぎしてねえでさつさと試合始めろ、と内藤幸子が誰にともなく叫んでいる。審判がちゃんと時間を止めてるってのに。

審判の笛。内藤幸子の希望通り、試合が再開される。

残り時間、約七分。

相手の攻撃を抑え切ることが出来れば、わたしたちの勝利だ。

先ほどから佐原南は防戦一方ではあったが、点を取らねばならない状況での不本意な防戦一方と、守ればよい状況でのある意味狙った防戦一方では、心身へかかる負担がまったく違う。

絶対に守り切って見せる。そしてあわよくば、追加点を。特に示し合わせたわけではないが、全員がそんな共通の意識のもと全力で茂原藤ヶ谷に挑んでいた。それはみんなのプレーを見ればよく分かることだった。

そんな気持ちが空回りしたというわけではないと思うが、織絵のなんてことのないパスを、晶が受け損ない、名倉明美に奪われてしまった。春奈と名倉明美とが一對一になってしまふことを直感的に恐れたのだろうか……笛が鳴った、織絵が、名倉明美をスライディングで引つ掛けて転倒させてしまったのだ。

名倉明美はまったく痛がるそぶりも見せず、立ち上がる。演技の必要などないのだ、フットサルは基本的には危険かどうかを問わずFPによるスライディングタックルは禁止なのだから。

「ごめん！ ついやっちゃった」

織絵、両手合わせてわたしに謝ってくる。

「抜けられたら危ないとこだったから、仕方ないって」

とはいえ、やばいな……後半六つ目だ。

第二PKか。

フットサルは直接FKになるようなファールは前半後半それぞれ五回まで許される。六回目からは、相手に第二PKを与えることになる。

ペナルティマークよりも少しセンターライン寄りに下がったところにもマークがある。ここにボールをセットし、キッカーがゴール目掛けて蹴るのだ。相手選手が壁を作ることとは出来ない。これが第二PKだ。距離の遠いPKとも考えられるし、壁を作れないFKともいえる。

ゴレイロが晶ならいいけど、春奈だからな。ここだけ晶と交代出来ればいいんだけど、大会ローカルルールで、PK決定後に、その対策のための交代は出来ないと定められている。確かに利になつたルールだと思っていたけど、わたしたちが、それでピンチを迎えることになるとは。

茂原藤ヶ谷のキッカーは、第二PKを得た名倉明美本人。
対するゴレイロは、衣笠春奈。

体重が倍は違うのではないだろうか。それくらい、名倉明美は骨も肉もがっしりとしており、春奈は小学生のように貧弱に見える。腕相撲をするわけではないので、肉の量など直接関係ないが、やはり相対的に名倉明美に圧倒的な迫力を感じ、威圧感を受けてしまう。でも、確かにピンチに違いないが、第二PKなどそうポンポンと決まるものでもない。ましてやこのような状況、焦って大きく枠を外すことだつて充分に考えられる。

「春奈、頼むよ！」

サイドラインぎりぎりのところから、王子が声を張り上げる。多分聞こえていないだろう。晶のアドバイスを聞くので精一杯、いや緊張のあまり、それすら耳に入っているかどうか。

審判の注意を受け、晶は春奈のそばを離れた。

春奈と名倉明美、向かい合う。

しんと静まり返った中、他の選手たちは緊張した面持ちで対峙する二人を見つめている。

笛が鳴った。その瞬間、名倉明美は待ちに待っていたかのように短い助走をし、ボールに足を叩きつけていた。精度よりも勢い、破壊力重視のトゥーキック。ドン、と大砲のような低く鈍い音が聞こえたと思った時には、ボールは既に春奈の脇を抜けてゴールネットに突き刺さっていた。

春奈は、ぴくりとも反応することが出来なかった。

せっかく佐治ヶ江が逆転弾を決めてくれたというのに、次に喜びを爆発させたのは茂原藤ヶ谷のほうになった。

「春奈、ドンマイ！」

夏木フサエの声だ。無念の負傷退場となった彼女、ピッチの外、パイプ椅子に座っている。足首にぐるぐる巻かれたテーピングが痛々しい。

その隣の久樹も、

「まだまだ、これからだよ！」

と声を張り上げている。

「振り出しに戻っただけ！ 一点取るぞ！」

織絵も、ピッチの中で味方を励ます。

経験の少ない一年生が多いので、意気消沈してしまわないか不安になったのだろう。二年生が次々と、手を叩き、味方を鼓舞する言葉をつき出していく。

でも、そんな心配はいらなそうだ。

しょんぼりしている一年生なんて、一人もいない。

顔見れば分かる。

自分たちは、まだまだやれる。そんな自信に溢れた、そんな最高の表情を見せていた。二年生たち、それに気付いたか、なんともくすぐったいような笑顔を作った。普通逆だろ、もう。二年生が、一年坊主の態度に勇気や元氣貰うなんてさあ。嬉しくて、なんだか全身がムズムズとしてくる。

……分かってきたよ、春江先輩。仲間成長を喜ぶということがお互いに高め合っていく気持ちよさというものが。……少しは近づけたかな、先輩。

佐原南のキックで試合再開。わたしは最後列の織絵へとボールを渡す。織絵から晶、また織絵、そしてまたわたしへとボールがくる。全体的な押し上げを期待し、わたしがポストで粘る……というつもりでいたが、「先輩！」とわたしの背後つまり相手ゴールのほうから佐治ヶ江の声が。振り向いた瞬間、走る佐治ヶ江の姿が目に入り、その軌道の先へとパスを出していた。佐治ヶ江、一見地味に見えるが、味方に易しく敵に難い、最高の動き出しだ。

佐治ケ江、足裏トラップ。名倉明美が襲いかかる。が、柳に風で、佐治ケ江は軽妙なフットワーク、ボール捌きで相手を翻弄する。内藤幸子が加勢し、二人で佐治ケ江を挟み込もうとするが、佐治ケ江はあっさりボールを手放す。晶にボールが戻る。その隙に、佐治ケ江はすーっと前にいってしまふ。内藤名倉両名が、どっちにつくべきかほんの一瞬迷った次の瞬間には、佐治ケ江、晶からのループパスを胸トラップ。ドリブル独走、そしてシュート！ゴレイロの古野敏江が、なんとか体に当て、こぼれたボールを抑え込んだ。

茂原藤ケ谷、素早いリスタート。ボールはいきなり最前列の内藤幸子に。そして、さっと上がってくる梨本麗へとパス……いや、絶妙の読みで佐治ケ江がカットした。前後から、内藤幸子と梨本麗が足を出してボールを奪おうとするが、佐治ケ江、どんなマジックを使っているのか、足にボールがぴたりくっ付き、まったく奪われない。飽きたとばかりに、ヒールリフトで内藤幸子の頭上を抜く。ドリブルから、サイドを上がってきていた織絵にパス。角度のないところから狙った織絵のシュート、残念ながら枠を捉えることが出来なかった。

この逆境か、ゴールを決めたことが、なにがきっかけなのか分からないけど……

佐治ケ江が、ついに自分の殻を破った。

技術があるのはよく知っていたけど、しかしこれほどとは。わたし、実戦の場でヒールリフトを見るなんて初めてだ。

「おい！　どうなってんだよ。佐治ケ江がこんな凄いなんて聞いてない！　明美、ちゃんと佐原南のこと調べたのかよ！　なんなんだあいつ、華奢そうな体してるくせしやがって……一年のくせしやがって」

内藤幸子が自制心を失い始めている。

現在同点だし、人数の問題から体力的にはあっちに分があるというのに。

内藤幸子は審判にタイムを要求。認められた。茂原藤ケ谷の選手

たちは内藤幸子のほうへ、佐原南の選手たちはわたしのほうへと、それぞれ向かっていく。内藤幸子は佐治ヶ江と擦れ違う時に、肩に手を置いて、止めた。

「鬱陶しいんだよ、チョコマカしやがってこのボケが！」

なんだあいつ！

わたしは危うくキレるところだった。相手の肩に手を置いたり、威嚇したり、問題行為だろそれ。それにまた佐治ヶ江が萎縮して元に戻ってしまったら、どうしてくれるんだ。

なんとか自制したものの、佐治ヶ江を守るためになにか一言いわなければ、と口開きかけた時、

「ありがとうございます」

佐治ヶ江、大きくお辞儀した。

内藤幸子が目を白黒させている間に、佐治ヶ江はわたしのほうに歩いてきた。

わたしはなんだかおかしくなってきた、一人で大笑いしてしまった。

「やり返すなんて、凄いいじゃん。あいつ、大激怒してるよ」

「……怒らせちゃったんですか？ 対戦相手に鬱陶しいだなんていうもんやけ、もしかして褒めてくれているのかなと思って……」

あくまで真顔で応じる佐治ヶ江。

「天然か！」

織絵、佐治ヶ江の頭を叩く仕草。

佐治ヶ江以外、大爆笑だ。

「サジ、凄くいいよ。残りの時間もその調子で頼むよ」

「はい！」

「いい返事じゃん」

ほんとにうちの一年は全員、調子乗り世代だな。そういうのって、王子だけだと思っていたのに。

さて、茂原藤ヶ谷のゴレイロ古野敏江のゴールクリアランスにより試合再開になるわけだが、ひとつ向こうに大きな変化が。ついに、

というべきか、「茂原藤ヶ谷の最終兵器」こと、巴和希がピッチに入ってきた。ボール扱いの非常に巧みな選手と聞く。残り時間あと五分というこのタイミングでの投入。スーパーサブとしての働きを期待されているというよりも、次の相手に研究されないように温存しておきたかったのだと思う。強豪校には結構弱い茂原藤ヶ谷、この試合に限らず、勝っている限りは出したくなかったのではないだろうか。

ゴールクリアランスのボール、前線にいる内藤幸子が胸トラップ。織絵が強引に体を入れて、そのボールを奪い取った……いや、織絵の裏に回り込んでいた巴和希、織絵の足の間からボールを蹴った。前へ転がるボール、慌てて織絵は追うが、出たばかりで体力のある巴和希は一瞬で織絵を抜き去り、ボールを奪った。

さすがに上手だ、こいつ。

あと数分というこんな時間に入ってきたのは、我々にとって運がよかったと思うべきなのか悪かったと思うべきなのか。

余裕の表情でボールキープする巴和希の前に、佐治ヶ江が立ち塞がった。巴和希の行動にまったく迷いはない。右、左、右、と揺さぶって、一気に抜けた！ しかしその足の先に、ボールはなかった。振り返る巴和希。小さくなっていく佐治ヶ江の後ろ姿に、驚きを隠しきれない表情。慌てて後を追いつ始める。

ドリブルしながら駆け上がっていく佐治ヶ江、ゴールライン一杯のところから、梨本麗をかわして、地を這うマイナスのクロス。

わたしはそれに反応して飛び出した。右足でシュートを撃った。決まっと思ったが、ボールは真上に飛んでいた。ゴレイロが闇雲にふりまわした手足にボールが当たったのだらう。古野敏江、ジャンプしてボールをキャッチ。

「サジ、とてもいいパスだった」

完璧なクロスだった。決められなかったのは、わたしの技術不足。もっと練習しないと、一年生に笑われちゃうよな。

佐治ヶ江、ゲーム経験なんてほとんどないくせに、天性の才能だ

ろうか。戦術理解も完璧だし、咄嗟の判断も素晴らしい。

茂原藤ヶ谷は、巴和希にいったんボールを集めてから展開する作戦のようだ。ピヴォ当てとも少し違う、巴和希はポジションに捉われずにかなり流動的に動いているようだから。確かにあのボールキープの上手さなら、彼女をキープレイヤーに考えるのは当然だろう。しかし個人技を計算しての作戦というのは、当然だがその個人技が通用して、はじめて成り立つもの。向こうの計画は、向こうがまったく計算に入れていなかった佐治ヶ江優という存在により、完全に破壊されることになった。

巴和希がボールを持っても、あつという間に佐治ヶ江に取られてしまう。

しかたなくワンタッチでボールを捌こうにも、佐治ヶ江が巧みな動きで誘導してパスコースを限定させることで、あつさと佐原南ボールへ。

完全に巴和希が無力化していた。いや、無力化どころではない。超高校級選手のはずの巴和希が、佐治ヶ江の前にはまるで子供扱い。決定的な仕事を期待されてピッチに入ったというのに、決定的な仕事どころか簡単な雑用すら出来ていないという状況に、巴和希自身の顔色がどんどん青白くなっていく。

自分がたいしたことなかったのか。

それとも相手が凄すぎるのか。

迷っているのだろう。顔を見れば分かる。

後者に決まっているし、迷ってたってなにも変わらないんだから策を講じるなり、ガムシヤラに挑むなりすればいいのに。ほら、佐治ヶ江、またあなたからボール奪っちゃったよ。

サイドを崩した佐治ヶ江から、わたしに横パスがくる。シュート体勢に入りつつ、それをスルーした。背後から織絵が駆け上がったきているのを感じたから。

しかし織絵のシュートは惜しくもクロスバーに当たり、山なりに跳ね返った。名倉明美が落下地点に素早く移動し、胸で受けようと

する。しかし佐治ケ江が全力で走りこみながら高く跳躍。ヘッドでボールを奪った。空中で、そのまま体を反転させて右足でシュート！　ボールは、大きく枠を外れた。

なんだ……いまの技……

観客席から、どよめきがあがる。

わたしは、驚愕のあまりなんの言葉も発することが出来なかった。だってそうだろう。空中でトラップして、そのまま体ひねってボレーなんて、人間技とは思えない。

佐治ケ江、天才かも知れない。それとも世の中、こういうのがごろごろいるのだろうか。

単なるまぐれかも知れないが、わたしなら、一万回やったってそんなまぐれは起こせそうにもない。

やばい……

いきいき躍動する佐治ケ江が、とても輝いて見える、惚れてしまいそうだ……。まさに、そっちのほうの意味で。またゴールなんか決めたら……思わず抱きついてキスしてしまうかも知れん。いや、そこまでいかないまでも、さっきみたいにもう一度ぎゅっと抱きしめたい。だって佐治ケ江の体、すごいやわらかくて、気持ちよかつたんだもの。って、いかんいかん、なに考えてんだわたしは。佐治ケ江は女だぞ。それにわたしにはミットがいるじゃないか。……いるのかな。……わたしに……ミット。まったくあいつは、大事な時に女々しいんだから、はつきりしろよな、もう。

「梨乃！」

織絵からのパスがくる。巴和希がそばにいたので、奪われないよう戻りながら受ける。すぐさま、わたしの背後に、巴和希が密着し圧力をかけてくる。佐治ケ江以外からならボールを奪えるとも思ったのだろうか、お生憎様だけわたしからも簡単に奪えるとは思わないほうがいい。

「サジ！」

サイドを駆け上がっていく佐治ケ江に顔を向け、叫ぶ。しかしそ

ちらへパスは出さず、佐治ヶ江とは反対方向、中央に向かってドリブル。フェイントでもなんでもないが、佐治ヶ江恐怖症の巴和希には効果テキメン、労せずしてマークを外すことに成功した。

背後に、巴和希が迫ってくる足音。今度は本当に、佐治ヶ江にパスを出した。

巴和希、判断に迷ってうまく体を止められなかったのか、わたしの背中に激しくぶつかってきた。手が触れ合った、と思ったその瞬間には、互いの手足がからみあい、二人、もみあうように倒れていた。

わたし、なんだかもの凄い声出していた。

これまで経験したことのない激痛が身を襲った。

右膝と足首の関節にヘラを深く突き立てられて、ためらいなくねじくられる。そんな経験ないけども、でもまさにそんな感じの痛みだった。

反射的に上体を起こし、両手で右膝と右足首をそれぞれ押さえていた。ぶち、とねじ切られたかとも思ったけど、足、ちゃんと付いてた。

膝も、足首も、脈打っているかのように、ズキズキと痛む。

涙が出そうだ。

巴和希、先に立ち上がる。

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

深くお辞儀すると、手を差し出してきた。なんだ、結構いい奴じやん。転校生だから、まだ茂原藤ヶ谷色に染まってないんだな。是非頑張って茂原藤ヶ谷を変えてあげてくれ。

「ありがとう」

やせ我慢で笑顔を作り、手を引っ張って立たせてもらった。と思つたら、またビキビキッと電流が走る。

がくつと片膝を付いた。

……もつとやりたかったけど、足、ダメそうだ。

もう一度、手を引っ張ってもらい、なんとか立ち上がった。

ピッチの外、交代に使える選手を見る。

根元このみ、

島田綾、

真砂茂美、

この三人だけ。

茂美、綾、この二人はレギュラーではないため、ペース配分がうまくいかなかったようで、まだ体力が回復していない。わたしが後先考えず走り回れと指示したせいもあるんだけど。二人で大の字になって、大きく胸を上下させている。とても動けそうにない。最悪、延長戦になるんだから、それまでには体力回復してくれよ。

残るはこのみ一人だけか。

作戦上、一人は残しておきたいし、やっぱり、わたしがもう少し頑張るしかないか。

そうだよな。織絵だって、ほとんどフルタイム出ている、足ふらふらなのに頑張っているんだから。佐治ケ江だって後半からとはいえ、体力そんなになくせにあんなに頑張っているんだから。晶もFPは後半からとはいえ、あんなに走り回ってくれているんだから。わたしだけ、ちよつと足が痛い程度で楽するわけにいかないよな。

「梨乃、大丈夫？ もの凄い悲鳴あげてたけど。片足、引きずってない？」

織絵に気づかれた。

「大丈夫、転んでちよつと痛かっただけ、もうなんともないから」

織絵にというより、自分にいい聞かせる。

あとほんの何分かの辛抱じゃないか。陸上の、あの単純に心臓へくる辛さに比べればなんてことない。

佐原南のキックで試合再開。わたしは横にいる佐治ケ江へパスを出す。佐治ケ江、わたしへのリターンボールを前方へと蹴るが、わたしが足を庇って、のたのたとボールを追っている間に、名倉明美に取られてしまった。「すみません」と佐治ケ江が謝る。

「謝るのはこっちのほう」

といいながらも、ボールキープする名倉明美に体を寄せて、佐治ケ江と挟み撃ちでボールを奪った。佐治ケ江はわたしにボールを任せて、前方へ。わたしは、ポストプレーでボールをキープする。名倉明美が審判に分からないように激しくガツガツと当たってくる。ほんと鬱陶しい連中だな！　なんとか平常心を保ち、頃合を見計らって、晶へとパスを出す。

そして晶、すかさず佐治ケ江へとスルーパスを狙う。晶、状況見えてなかったな。佐治ケ江の走り出しを期待してのパスだったのだろうが、彼女は内藤幸子と巴和希の二人に囲まれており、前方へ走り出したところでボールが届くはずもない、途中で相手にカットされてしまうだけ。

個人技はあるけど試合経験の少ない佐治ケ江、生まれつきの才能があったということなのだろう。素早く駆け戻り、ボールを受け取ると、受けたその瞬間に体を反転させて、なんと内藤幸子と巴和希に向かっていった。完全に意表をつかれた二人だが、本能的だが経験的にだか分らないが巴和希は足を出してボールを奪おうとする。佐治ケ江は予期していたかのように軽くボールを浮かせ、細かな左右のステップで暴風雨のようなパワーを持った二人の間をなんなく通り抜ける。

あとはゴレイロだけだ。

しかし、

内藤幸子の手が、佐治ケ江の襟首を後ろ掴んでいた。そして、腕を払って振りほどこうとする佐治ケ江の、その腕をも掴んでいた。

体重の軽い佐治ケ江、ぐいと引き寄せられ、二人の体は激しくぶつかった。

そして二人はもつれあい、倒れる。いや……信じられないことに、内藤幸子は前方に倒れこみながら、一本背負いのように佐治ケ江を投げ飛ばしてしまった。

佐治ケ江は受身も取れず、肩と顔を床に叩きつけられた。どうんと嫌な音が聞こえた。うつ伏せに倒れたまま、そして肩を抑えたま

ま、動かない。動けないのだ。苦痛に歪んだ顔が全てを物語っている。

冗談じゃないよ。お前なんか、うちの大事な佐治ケ江を壊されてたまるか。

「てめえ、柔道やりたきゃ柔道部に入れよ！ フットサルやめちまえ、このドアホ！」

わたしは冷静さを失い、そう叫んでいた。

審判の笛が吹かれた。

内藤幸子に、レッドカードが提示された。

技をかけ終えて立ち上がった柔道家は、自分に退場が命じられたことに気づくと、

「わざとじゃない。一発は酷いだろ！」

猛烈に抗議する。一発もなにも、自分がすでに一枚警告を受けていることを忘れていたようだ。どのみち退場だ、バカ。

わたしにも、相手選手への暴言ということでイエローカードが出された。

そんなことより、佐治ケ江のことが心配だ。彼女は、まだ起き上がることが出来ないでいる。両膝を床に着き、肩に手を当てて、うずくまっている。

「サジ、大丈夫？」

月並みな言葉だけでも、これ以外にかけ言葉がない。

「無理そう？」

「……いえ」

佐治ケ江、ゆっくりと起き上がりはじめた。

「やれます。……いえ、やらせて下さい」

「無茶はしないでよね」

わたしも他人のことはいえないけど。

「……怖いんです、あたし」

「え、怖いって、なにが」

「あの……いま、凄く面白いんです。木村先輩が一生懸命にフット

サルの面白さを教えようとしてくれていたのに、あたし、余計なお世話だって、そんな酷いこと内心思ってたんです。夏に部長変わって、たいがいことばかり、おいしい部活になったって思ってたんです。でもいま、凄い面白いんです。……少し離れたら、またもとの自分に戻ってしまう気がして、それが怖いんです。じゃけえ、一分でも多く、試合に出ていたいんです」

こんなに喋る佐治ケ江、はじめて見た。頭で考えず、気持ちがある。そのまま言葉になっているんだろう、広島弁がぼろぼろと出てきている。

「じゃ、この試合は最後まで任せた。終わったら、ドクターに診てもらうからね。場合によっては、病院いくよ」

「はい！」

わたしは手を出す。佐治ケ江も手を伸ばし、硬く握手をした。

選手交代。

衣笠春奈 アウト 根本このみ イン

ゴレイロの春奈をベンチに引っ込めるわけだが、しかしこのみが着ているのはFPのユニフォームのまま。つまり、佐原南の選手は、五人全員がFPということになる。パワープレイという強行的に得点を狙うための捨て身の戦術だ。

本来、このような場面で行うものではない。負けている場合や、リーグ戦で他の試合との関係でどうしても時間内での勝利が必要な場合などに行うもの。

しかし、こちらの人数や体力を考えると、延長戦突入は絶対的に不利。そうなる前に決勝点を上げないと、勝つことは厳しいだろう。パワープレイはゴレイロ不在となることから、相手のロングシュートがあっさり決まってしまうたりもするので、かなりリスクのある戦術。やるにしてもどのタイミングで、と様子を見ているうちに、内藤幸子が退場した。もう、やるならばこのタイミングしかない。

織絵、晶の二人がゴレイロ不在の分しっかり守備をし、わたしとこのみが攻撃、佐治ケ江にはポジション関係なく自由に走り回って

もらう。簡単にそれだけを伝えた。そして最後に、絶対に勝とう、と。

さて、内藤幸子のファールで得た佐原南のFK、キッカーはその悪質極まりないファールを受けた本人。残り時間を考えれば、これが決まればほぼ試合も決まるだろう。

果たして佐治ケ江がどんなFKを蹴るのか。

佐治ケ江、ボールを右足で踏み、真っ直ぐゴールを見つめている。怖いものなにも、もうそんな心配いらないよ、佐治ケ江。凄い自信に溢れた顔しているよ。

相手の壁は三枚。その周囲には、佐原南の選手が三人。わたし、このみ、晶だ。織絵は、相手のロングシュートに備えて自陣で守る。笛。

一呼吸の後、佐治ケ江は短い助走。右足側面でボールを擦り上げた。

驚くようなキックではなかった。ただひたすら狙いが正確で、ただひたすら速かった。相手の中では一番身長の高い巴和希、その頭上をすっと越えた瞬間、ドライブがかかって縦に急速に落ちる。ボールって、この近距離で、こんなに変化するものなのか。いや、それよりも変化させた佐治ケ江のほうが凄い。小学生の頃から毎日壁を相手に遊んでいた成果だろう。

だけどボールは、ゴレイロに弾かれてしまった。予期せぬ弾道に混乱しながらも無意識に振り回していた腕に偶然ボールが当たって跳ね返った、といったほうが正確かも知れない。

落下してくるボールを目指し、みなが詰め寄る。

混戦。激しい争奪戦になった。ここで佐原南が奪えば決定的な得点機会になる。だから、お互いに死に物狂いだ。

晶がボールを奪い、振り向きざまにシュートを撃った。ポストに当たり、大きく跳ね返った。巴和希がそれを拾い、詰め寄る佐治ケ江をフェイントでひらりとかわした。ついに佐治ケ江を抜いてやったことにほくそ笑むこともなく、落ち着いて狙い済ましたロングシ

ユートを放った。

織絵、前へ出すぎていた。まさかこのタイミングで撃つてくると思わなかったのだろう。まさか佐治ケ江が抜かれると思わなかったのだろう。まさか、こんな精度の良いロングシュートを相手が放つと思わなかったのだろう。

織絵、六、七メートルほどの距離を全力疾走で戻る。振り返り、なんとかボールをおでこに当てて下に床に落としたが、ボールを落ち着かせる間もなく、巴和希が迫っていた。

やばい、自陣で織絵と巴和希と一対一だ。

「先輩、こつち！」

いつの間にかサイドを駆け戻っていた佐治ケ江。かろうじて出された織絵からのパスを受けると、今度はドリブルでぐんぐんと駆け上がる。

茂原藤ヶ谷ゴール前は数秒前と変わらず、わたしと晶、対戦相手の名倉明美、桜木美紀、ゴレイロの古野敏江がごちゃごちゃとひしめき合っている状態。あつという間に自陣からボールを持ち帰ってきた佐治ケ江は、中央突破、あえて混戦の中に身を躍らせてきた。名倉明美たちはわたしや晶そっちのけで佐治ケ江の持つボールを奪おうとする。しかしもともとボール扱いは抜群に上手い佐治ケ江、自信を得たいま、簡単に奪われるはずもない。腕の使い方や体の入れ方などはまだまだ経験不足のようだけど、補って余りある巧みなフットワークで二人を翻弄。佐治ケ江と名倉明美がぶつかり合うなんと名倉明美のほうがバランスを崩してよろけた。一瞬大きく開いた足の間から、佐治ケ江はシュートを放った。ボールはゴレイロの脇をすり抜け、ゴールネットに突き刺さった。

「やった！」

晶や織絵が喜び、叫ぶ。

でもすぐに、落胆の表情へと変わった。ゴールが認められなかったのだ。佐治ケ江のタックルが反則を取られたのである。混戦の中、お互いに激しくぶつかって佐治ケ江が勝った、ただそれだけなのに。

この程度のプレー、むこう最初からずっとやっているくせに、なんでこっちのはファールなんだ……

審判に愚痴いっても仕方ない。ちゃんと向こうにだって、ラフプレーで退場者も出ているんだから。

現在、こちらが一人多い状況だが、あまり有利ともいえなかった。交代出来る人数の関係で、こちらはもう体力の限界を迎えようとしていた。もちろん相手だって疲れているだろうが、こちらの状態に比べれば遥かにましなはずだ。

さきほどのゴール取り消しにより、余計に疲労が増した気がする。中でも一番酷いのが佐治ヶ江だ。先ほどまでとはうって変わって、ボールを奪えない、プレッシャーのないところでパスミス、カットされて慌てて追いかけてますます疲労する悪循環。

佐治ヶ江は後半からの出場のくせに……。体力なくせに、ペース配分を考えないからだよ。自分のスタミナのなさ、分かってたはずだろ。まあろくに試合経験がないんだからしょうがないか。肩を痛めてしまったというのもあるし。いままでの自分から開放され、萎縮せずにのびのびとプレーが出来て、それがよほど楽しくて、本当に夢中になってしまったんだろうな。

小さな頃から一日中リフティングなんかやってたんだから、十分な体力があってもおかしくない気もするけど。やっぱりランニングしたり、バランスの取れたトレーニングしないとダメだな。好きなことやってるだけじゃ。

覚悟しときな、明日から、徹底的にしごいてやるから。

栄養指導もしないとな。聞いてみないと分からないけど、なんか野菜ばかりで肉食べてない気がするし。

しかしどうということだろう。あんなに凄いプレーを見せられるくせして、あいつ、体力はない、筋力はない、柔軟ではすぐ悲鳴をあげる、筋肉ないから足も速くない……伸びしろだらけじゃないか。なんか嬉しくなってくる。

育ててみよう。鍛え上げたらどんなふうになるのか、楽しみだ。

佐治ヶ江だけじゃない。春奈のことも。今度、景子と久樹に相談してみよう。みんなフットサルが好きだし、どんどん強くなるぞ、うちの部は。

なんだろう。なんだかとても気分が高揚してきた。中学生の頃、好奇心からお父さんの缶ビールをこっそり一本飲んでしまったことがあるけど、その時の酔った感じに似てる。自己防御反応で脳内麻薬でも出来ているのだろうか。それほどまで、足の痛み、酷くなっていた。動くたび、心臓の鼓動のたび、呼吸のたび、激しく痛む。わたしの足元へと、パスが回ってきた。

巴和希が向かってくる。なんでこいつ二人いるんだ、と思ったら単にわたしの目がかすんできているだけだった。

かわしぎま、晶へとパス。

バランスを失い、ふらついた。

ぐつと踏ん張ってもちなおしたところ、またボールがくる。

左足の内側で、受ける。

激痛こらえて右足で蹴る。

走る。

ああ、わたしいま、なにやっているんだろうなあ。

ここ数ヶ月の間に、何十回、この言葉を心に呟いたことが。

決まってんじゃん。

フットサルやってんだよ。

即答している自分に驚いた。

そうだな。

疑問に思うまでもなかったじゃないか。

将来どうなっていくか分からない者同士、一年後、二年後にはもう絶対に組むことの出来ない、そんなかけがえない仲間同士、こうしてフットサルをやっているんだ。

将来への不安もなにも、将来なんてのは催促するまでもなく、放っておけば黙ってたってやってくる。

いましか出来ないことは、いまやらないと。

後悔はしたくないから。

だから……

「もう時間がないよ！」

誰かが叫んだ。敵か味方か、誰の声なんだか全然分からない。わたしは激痛を我慢し続けていたことと、疲労とで、ぐるぐると視界が回り、白くぼやけ……それどころか五感全体が麻痺しはじめ、耳もろくに聞こえない状態になってきていた。

はやく得点しなければ。延長戦になったら、おそらく勝ち目はない。

焦りばかりがつのる。

周囲、ごちゃごちゃして窮屈……

ぼんやりした、視界、

FKか。

茂原藤ヶ谷のFK、わたし、自陣で守っているようだ。

誰か、蹴った。きつと……巴和希。

混戦、体がゴツゴツとぶつかりあう音。相当激しくやりあっているのだろうけど、あんまりよく聞こえない。

どんと背中押され、ぼんやりした、視界、急速に反転、床、広がる、倒れていた。どどっ、と崩れるような低い足音が耳元に迫り、わたしは頭を、がつかつと蹴られていた。

すべてが、真っ白になった。

気を失っていたのだろうか。

どのくらい……

「梨乃！」

織絵の顔。

天井が広がっている。

視界がはつきりしてきた。

朦朧としていた意識も、はつきりとしてきた。

織絵だけではなく、

晶、

このみ、

佐治ケ江、

みんなが、わたしのことを心配そうな表情で見下ろしていた。

「よかった……気付いたみたいだ！」

織絵が叫ぶほうに顔を向けると、久樹や王子たちの胸を撫で下ろしている姿が。

みんなに心配させちゃったな。

「大丈夫ですか？」

織絵と晶の間から、第一審判の人がぬつと顔を出した。

「大丈夫です」

わたしは上半身を起こそうとする。

「頭を上げないでください。横になったまま、担架に乗ってもらいますから。すぐ病院にいつてもらいます」

さつきフサエを担架で運んだ係の人たちだ。その足元には担架が置かれている。

冗談じゃない、この大事な時に病院なんていけるか。

「大丈夫ですよ……頭、蹴られてません。足の怪我がズキズキ痛んで、動けなかったただけですから」

嘘をついた。

立ち上がった。驚くほど簡単に立ち上がることが出来た。

実は意識不明のまま、何年もたっているんじゃないだろうか。そう思ってしまうくらい、足の痛みがなくなっていた。

「なんだ、そうだったんだ。心配せんなよ、もう！」

織絵、嬉しそうな顔で怒ってる。

「本当は頭蹴られて、ちよつとあっちの世界いった」
織絵の耳元で囁く。

「え、ダメじゃん病院いかな……」

わたしは慌てて織絵の口を手で押さえた。分かった分かった、という表情に、ようやく押さえた手を離してやる。

「でもやつぱり足痛めてたんじゃん。大丈夫なの？」

「不思議なんだよね、こんな痛み経験したことないってくらいだったのに、いまは全然痛くないんだ」

「ならいいけど」

「試合終わったらさ、サジと病院いつてくるよ」

みんなに、残り時間で絶対に点を取ろうと声をかけた。

各人、配置につく。

さあ、試合再開だ。

さっきの混戦、向こうのファールが取られたようで、佐原南にFKが与えられる。自陣からということで、キッカーは織絵だ。

笛がなった。相手ゴールまでには相当な距離があるので、無理せず後方からの組み立てを選択、すぐそばの晶へとパスを出した。

巴和希がすかさずプレッシャーをかけてくる。晶、織絵に戻すふりをして、巴和希をかわす。

佐治ヶ江へのパス。うまく通ったものの、受けた佐治ヶ江、少しもたついてしまい、二人に囲まれボールを取られてしまった。そのボールはすぐさま、一人で佐原南ゴール近くに残っていた巴和希へと送られる。伸ばした根本このみの足も届かず、巴和希にボールが渡ってしまった。織絵が詰め寄ってボールを奪おうとする。しかし巴和希は軽快な足技で織絵を翻弄。数メートル離れた無人のゴールを目掛け、短く振り上げた足、ボールを蹴りつけようと振り下ろした。

これが決まれば茂原藤ヶ谷の勝利が決まってしまう。だが、巴和希の足は虚しく空振りをしただけだった。全力で戻ったわたしが、彼女の足元からボールを奪ったのだ。

信じられない、といった表情を浮かべている巴和希。おそらくわたしも、同じような表情、浮かべていると思う。意識がなくなるくらい、凄まじい足の痛みに苦しんでいたというのに。

ドリブルで駆け上がりとするわたしに、名倉明美が邪魔しようと走りこんできた。名倉明美に背を向け、ボールキープ、と見せか

け、すぐさまつま先でちゃんとボールを浮かし、そのまま体を反転させて前を向いた。

体……動くぞ。

痛くない。

低く宙に浮いたボール、膝を当てて大きく前に転がす。同時に、

名倉明美の脇を駆け抜ける。

「みんな、上げれ！」

わたしは、力の限り叫んだ。

自分で転がしたボールに追いつき、そのまま全力でドリブル。

不思議な感覚。体重をまったく感じない。

気持ちいいくらいに、ぐんぐんと視界が後ろに流れていく。

きつとこれ、神様がくれた時間だ。

だって、わたしの足も心も、悲鳴を上げる余裕すらないくらいポロボロのはずなんだから。

あと何秒だか、何十秒だか分からないけど、この時間が終わったら、わたし、どうなるんだろう。

フットサル、続けられるだろうか。

続けられたらとても嬉しいけど、いま手を抜いて後悔はしたくない。

わたしのドリブルを食い止めようと、桜木美紀が、そして戻ってきたばかりの巴和希が、立ち塞がる。

フェイントを仕掛け、二人の間を強行突破、と思わせておいて、ヒールで後ろへとボールを送る。織絵がうまく受けてくれたことを信じ、わたしは前へ走る。

わたしの横を走る晶が、おそらく織絵からの、後方よりのボールを器用に受けた。

晶、ドリブルで進み、そしてわたしへと横パスを出した。ボールを受ける体勢をとつたのと同時に、ドンと背中から激しい衝撃が。名倉明美が、トラップを邪魔しようとしたのだ。でもわたしは最初から、そのボールを受ける気はなかった。

スルーされたボールは、そのまま真横へと転がる。

わたしへとマークが集中している中、見るもあつさりとフリーの佐治ヶ江にボールが渡る。

佐治ヶ江、残った気力と体力を振り絞り、ドリブル独走。

第一審判が笛を手にし、タイムキーパーと残り時間の確認をしている。そして審判は笛を口にくわえた。ラストワンプレーか……

ゴレイロの古野敏江、佐治ヶ江に対し安易には飛び出さない。後半開始直後のまるで自信のないプレーを見せていた佐治ヶ江優と、いまの佐治ヶ江優とはまったくの別人であること、肌身に染みて感じているからだろう。

いつそ飛び出してきたほうが佐治ヶ江にはやりやすかったかも知れない。かわせばいいだけ、と迷いない判断が出来るから。

一瞬の我慢くらべにも思えた。耐え切れなかったのは佐治ヶ江。

ゴレイロとの距離四メートルほどのところで、右足でシュートを放った。ゴール正面。ゴレイロ、両手で弾いた。ちよつと正直すぎたか。

けどまだ、チャンスは続く。

駆け上がってきていた織絵、こぼれたボールを奪おうと名倉明美と競り合う。二人の肩が激しくぶつかり合った。織絵が一方的に飛ばされるかと思ったが、なんと勝ったのは織絵のほう、名倉明美はバランスを崩しつつ、とと、と数歩進んで、そして転んでしまった。さすが、彼氏が出来て遅しくなっただけある。

ヘディングでのわたしへのパス、ちよつと精度悪い。わたしは走り寄り、足を伸ばして受けた。

ゴレイロに背を向けた格好だ。

足元にしっかりボールを収め、その瞬間、振り向きざまシュート！と素早く反転したはいが、ゴレイロの古野敏江、今度は鬼気迫る形相で飛び出してきた。気迫で負けてたまるか。振り向くと同時にシュート体勢に入っていたわたしは、そのまま迷わず振り上げた足を振り下ろした。

古野敏江、自分の体を横に倒していた。フットサルで倒れこむなんて……。だか彼女の判断は正しかった。前へと滑りながらも、横たわった巨大な体全体で、わたしのシュートを防いだのだ。高く跳ね上がるボール。

時が止まった？ 一瞬、そう錯覚した。いま起きていること、何故かわたしにはスローモーションのように見えていた。

地を滑ってくる古野敏江、わたしはよけずに引き付けた。軽く膝を曲げ、そして、跳んだ。

宙に静止している、空を飛んでいる、なんだかそんな感覚。

ここに高木ミットがいたら、絶対「出た、ゴリラジャンプ！」などと叫んだ。

宙に止まったまま、胸でボールを受けた。

背後など見えるはずなのに、何故か、みんなの顔、見えていた。

佐治ケ江、

このみ、

織絵、

晶、またタコみたいな口になってる。

みんな、ここまで頑張ってくれてありがとう。

春奈も、王子も。

久樹も、景子も、これまで本当にありがとう。これからも、ずっと親友でいようね。……何回、何十回、生まれ変わっても。

眼下には、無人のゴール。

光が見えた。

そしてわたしは

【あとがき】 & 【登場人物紹介】

【あとがき】

この作品のテーマは、月並みながら「友情」です。

フットサル部部長の主人公が、友情や絆を再確認していく物語です。「ブストサル」、もちろん造語です。なんとなく閃いた駄洒落です。言うまでもなく、ブスと猿、ですね。

書き進めるにつれて、ブストサルとは「性格の不器用な、フットサル好きの女の子」のことなのかなと思うようになりました。

主人公の木村梨乃と、気づいてみれば裏主人公のような存在感の佐治ヶ江優、

この二人がまさにブストサルですね。

執筆時期 2008年9月～2009年4月

舞台設定年 2009年9月～2009年11月

【登場人物紹介】

【千葉県立県立佐原南高校 女子フットサル部の部員】

「二年生」

木村梨乃 きむらりの 部長。この物語の主人公。中三の時にフットサルをはじめめる。

畔木景子 あぜ きけいこ

梨乃の親友。どのポジションも器用にこなす。頭脳明晰。

浜虫久樹 はまむしひさき

梨乃の親友。小柄ながら運動能力抜群。しかし勉強がちよつと・・

楽山織絵らくやまおりえ 守備の要。がっちりした体格。

楠見留美子くすみるみこ 特に目立たないが、技術はそこそこ高い。

夏木フサエなつき 痩せ型だが、意外にパワーがある。マックスコーヒーが大好き。

根元このみねもと 主力とまではいかないが、最近ぐんぐんと上達してきた。

島田綾しまだあや 能力的にはいまひとつ。マイペースでフットサルを楽しんでいる。

「一年生」
武田晶たけだあきら ゴレイロ。小学生の頃に空手とハンドボールをやっていたという変わった経歴。相当に能力が高い。また、FPも出来る。

山野裕子やまのゆうこ 男の子みたいな短髪で、あだ名が王子。凄まじい体力の持ち主ではあるが、技術はさしてない。

佐治ケ江優さじがえゆう 足元の技術は久樹以上。ただ、体力がまるでない。気が小さい。小中学生の頃に、酷いいじめを受けていた。

竹藤琴美たけふじことみ 実力が全く伸びず、練習が苦痛だった。フットサル部を退部してしまう。

篠亜由美しのあゆみ 下手。とにかくおしゃべり。茂美とは親友同士。

真砂茂美まささしげみ 練習態度が真面目で、最近、かなり成長して来た。どん

な声だか知らない人がいるくらいの、凄まじいまでの無口。

衣笠春奈 きぬがさはるな 転校生。非常に明るい性格。しかし梨乃にはどうにも嫌われてしまい・・・

【千葉県立県立佐原南高校 男子および先生】

高木三人 たかぎみつと 梨乃の近所に住んでいる。小学生の頃からの腐れ縁。会えば口喧嘩ばかり。

加地原孝 かじわたかし ミットの友人。

北岡先生 きたおか フットサル部の顧問。年寄りっぱいなのであだながオジイ。

【その他】

ヒデさん 梨乃の家、木村豆腐店の従業員。

野木春江 のぎはるえ 梨乃の尊敬する人物。フットサルの天才。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3976j/>

ブストサル

2011年4月17日00時40分発行